

望月町文化財調査報告書 第19集

平石遺跡

— 第2次緊急発掘調査報告書 —

1991.3

望月町教育委員会

序

ここに、平成元年度に実施した平石遺跡発掘調査の実績報告書として、平成2年度事業「平石遺跡緊急発掘調査報告書」が刊行される運びとなりました。

平石遺跡は、昭和62年度に望月町農村基盤総合整備事業に先立って第1次発掘調査を実施し、昭和63年度にその成果を報告書にまとめてすでに刊行していますが、本事業は、個人住宅の建設事業に先立って実施されたもので、いわば第2次発掘調査ということになります。

第1次の調査では、縄文時代中期から後期の敷石住居址群が検出され、なかでも張出部に石積み構造をもつ柄鏡形敷石住居址の発見は、全国でも初めてのことであり、多くの研究者の注目を集めたところであります。第2次調査は、第1次調査地区の続きであり、その成果はほぼ同様でありましたが、やはり敷石住居址が検出され、平石遺跡の性格をさらに強調するものでありました。

平石遺跡は、蓼科山を源流とする八丁地川水系に位置していますが、この水系沿いには規模の大きな縄文時代の集落が点在しており、一連の最重要遺跡群として位置づけることができます。これらの資料を基礎にして、さらに広範囲に調査研究を行っていく必要があり、その積み重ねが真の望月町の歴史の一端を明らかにしていくことにもなり、さらに全国的視野に立った歴史の解明がなされていくものと思っております。

近年、急激な開発の波の中で失われていく文化財は増大する一方ですが、歴史を築き上げてきた先人の足跡を守り、永く後世に伝えていくことは、私たちにとても、また、現代社会にとっても重要な使命であると思います。動きの激しい社会の中にあっては、最小限度記録として保存し、そして活用することによって現代社会に役立てていかなくてはならないと痛感している次第です。

発掘調査に際しましては、顧問の森嶋 稔先生をはじめとして調査員・作業員の皆様には熱意あふれるご指導・ご協力をいただきました。特に、地主である上野一雄さんには、住宅建設の前でありながら、自ら埋蔵文化財の存在と、発掘調査のための土地の提供を申し出てください誠に感謝の念に耐えません。それぞれの方々に対しまして、衷心より敬意と感謝の意を表する次第です。

本調査の成果が、記録保存の役目を担って多くの方々に利用され、郷土を再認識し、益々の歴史研究発展の足掛りともなれば幸いと存じ願うものであります。

1991年3月20日

望月町教育委員会
教育長 田中 稔

例 言

調査及び報告書作成業務

1. 本報告書は、平成元年5月15日～6月10日まで現地発掘調査を実施した平石遺跡第2次緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、個人住宅の建設事業に先立って望月町が直営で実施し、教育委員会と教育委員会が組織した発掘調査団がその任に当たった。
3. 遺構の実測は、金井重恭・白田俊保・掛川喜四郎・福島邦男が行ない、福島茂子・小野沢ちえ子とその補助を行なった。
4. 遺構の写真撮影は、福島邦男が行なった。
5. 遺物の洗浄は、主に作業員が、注記は福島茂子が行なった。
6. 遺物の復元は、倉見 渡・金井重恭・吉澤浩矢が主に行なった。
7. 拓本は、掛川喜四郎・福島茂子が行なった。
8. 遺物の実測は、写真实測方式をとり、その撮影を委託契約により小川忠博が行なった。トレースのための写真構成は福島茂子が、土器のトレースは百瀬忠幸が、石器は近藤尚義が行なった。また、断面実測とトレースは、拓本資料も含め福島邦男が行なった。
9. 遺構図の調整及びトレースは、白田俊保が行なった。
10. 遺物の写真撮影は、福島邦男が行ない、その補助を倉見 渡・福島茂子が行なった。
11. 図及び図版の作成は、福島邦男・福島茂子が行なった。
12. 本書の執筆は、序文……田中 稔・目次関係……福島茂子・第I・II・III・IV章……福島邦男が行なった。
13. 発掘調査に係る書類・図面・写真・遺物等全ての資料は、望月町教育委員会が保管している。

本書の内容

1. 平石遺跡で検出した遺構や遺物は極めて多かったため、特に遺物については遺構に伴う主要なものを載せ、その他各期の代表的資料を取り上げ報告書にまとめた。
2. 位置図及び分布図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1と望月町発行の5,000分の1を使用した。

本文目次

序

例言

目次

第I章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の構成	3
第3節 調査団組織	3
第4節 調査の経過（調査日誌）	4
第II章 遺跡の立地と環境	5
第1節 遺跡の立地と自然環境	5
第2節 遺跡の歴史的環境	8
第III章 遺構と遺物	11
第1節 縄文時代の遺構と遺物	11
1. 第32号住居址 2. 第33号住居址 3. 第34号住居址 4. 第35号住居址	
5. 第36号住居址 6. 第37号住居址 7. 第38号住居址 8. 第39号住居址	
9. 第40号住居址 10. 第41号住居址 11. 第42号住居址 12. 第43号住居址	
13. 第44号住居址 14. 第45号住居址 15. 第46号住居址 16. 第47号住居址	
17. 第48号住居址 18. 第49号住居址 19. 第1号土壙及びピット	
第2節 遺構外出土遺物	61
1. 縄文時代の土器	61
2. 縄文時代の石器	64
第IV章 総括	73

図版

挿図目次

第1図	平石遺跡位置図(1:50,000) ……6	2、33~43・1:4) ……30	
第2図	平石遺跡周辺の遺跡分布図(1: 10,000) ……6	第25図	第37号住居址実測図(1:60) ……31
第3図	平石遺跡遺構全体図(1:100) ……9・10	第26図	第37号住居址出土石器実測図(1~6・ 1:2、7~15・1:4) ……32
第4図	第32号住居址実測図(1:60) ……11	第27図	第38号住居址実測図(1:60) ……33
第5図	第32号住居址出土土器実測図(1:3) 12	第28図	第39号住居址実測図(1:60) ……34
第6図	第32号住居址石器実測図(1:4) ……13	第29図	第39号住居址出土土器実測図(3~4・ 1:6、他1:3) ……34
第7図	第33号住居址実測図(1:60) ……13	第30図	第39号住居址出土石器実測図(1:4) 35
第8図	第33号住居址出土土器実測図(1~4・ 1:6、他1:3) ……15	第31図	第40号住居址実測図〔(1)上層、(2)床面〕 (1:60) ……36
第9図	第33号住居址出土土器及び土偶実測図 (40・1:2、他1:3) ……16	第32図	第40号住居址出土土器実測図(23・1: 6、他1:3) ……37
第10図	第33号住居址石器実測図(41~46・1: 2、47~50・1:4) ……17	第33図	第40号住居址出土石器実測図(44~51・ 1:2、52~54・1:4) ……38
第11図	第34号住居址実測図(1:60) ……18	第34図	第41号住居址実測図(1:60) ……39
第12図	第34号住居址出土土器実測図(1~3・ 1:6、他1:3) ……19	第35図	第41号住居址出土土器実測図(1・15・ 16、1:6、他1、3) ……40
第13図	第34号住居址出土土器実測図(1:3) 20	第36図	第41号住居址出土土器実測図(1:3) 41
第14図	第34号住居址石器実測図(41~44・1: 2、45~48・1:4) ……20	第37図	第41号住居址出土石器実測図(39・1: 2、40~45・1:4) ……41
第15図	第35号住居址実測図(1:60) ……22	第38図	第42号住居址実測図(1:60) ……42
第16図	第35号住居址出土土器実測図(1~7・ 1:6、他1:3) ……23	第39図	第42号住居址出土土器実測図(1~2・ 5・1:6、他1:3) ……43
第17図	第35号住居址出土土器実測図(1:6) 24	第40図	第43号住居址実測図(1:60) ……44
第18図	第35号住居址出土土器実測図(1:3) 25	第41図	第43号住居址出土土器実測図(1:3) 45
第19図	第35号住居址出土石器実測図(1:4) 26	第42図	第44号住居址実測図(1:60) ……46
第20図	第35号住居址出土石器実測図(1:4) 27	第43図	第44号住居址出土土器実測図(1・1: 6、他1:3) ……47
第21図	第36号住居址実測図(1:60) ……28	第44図	第44号住居址出土土器実測図(1:3) 48
第22図	第36号住居址出土土器実測図(1~5・ 1:6、他1:3) ……29	第45図	第44号住居址出土石器実測図(37・38・ 1:2、他1:4) ……48
第23図	第36号住居址出土土器実測図(1:3) 30		
第24図	第36号住居址出土石器実測図(32・1: 2、33~43・1:4) ……30		

第46図	第45号住居址実測図(1:60) ……………	49	第59図	第49号住居址実測図(1:60) ……………	60
第47図	第45号住居址出土土器実測図(29~31・ 1:6、他1:3) ……………	50	第60図	第49号住居址出土土器実測図(1:6)	61
第48図	第45号住居址出土土器実測図(1:3)	51	第61図	第1号土壇及びピット実測図(1:60)	61
第49図	第45号住居址出土土器実測図(44・1: 2、他1:4) ……………	51	第62図	遺構外出土土器実測図(1:2) ……………	65
第50図	第46号住居址実測図(1:60) ……………	52	第63図	遺構外出土土器実測図(1:3) ……………	66
第51図	第46号住居址出土土器実測図(17~18・ 1:6、他1:3) ……………	53	第64図	遺構外出土土器実測図(1・1:6、他1: 3) ……………	67
第52図	第46号住居址出土土器実測図(19~23・ 1:6、他1:3) ……………	54	第65図	遺構外出土土器実測図(1~5・ 11~12・1:6、他1:3) ……………	68
第53図	第46号住居址出土土器実測図(1:3)	55	第66図	遺構外出土土器実測図(1~2・18・1: 6、他1:3) ……………	69
第54図	第46号住居址出土土器実測図(67~77・ 1:2、他1:4) ……………	56	第67図	遺構外出土土器実測図(6~7・1:6、 他1:3) ……………	70
第55図	第47号住居址実測図(1:60) ……………	58	第68図	遺構外出土土器実測図(1~2・8: 16~19・1:6、他1:3) ……………	71
第56図	第47号住居址出土土器実測図(1:3)	59	第69図	遺構外出土土器実測図(1~7・1:2、 他1:4) ……………	72
第57図	第48号住居址実測図(1:60) ……………	59			
第58図	第48号住居址出土土器実測図(1:3)	60			

表 目 次

第1表	平石遺跡周辺の遺跡一覧表……………	7	第2表	平石遺跡出土土器分類表……………	62
-----	-------------------	---	-----	------------------	----

図 版 目 次

図版1	遺跡及び遺構全景	図版11	第35号住居址
図版2	第32号敷石住居址	図版12	第36号住居址
図版3	第32号敷石住居址	図版13	第36号住居址
図版4	第33号住居址	図版14	第37号住居址
図版5	第33号住居址	図版15	第38号住居址
図版6	第33号住居址	図版16	第39号住居址
図版7	第34号住居址	図版17	第40号住居址
図版8	第34号住居址	図版18	第40号住居址
図版9	第35号住居址	図版19	第41号住居址
図版10	第35号住居址	図版20	第41号住居址

図版21 第42号住居址
図版22 第43号住居址
図版23 第44号住居址
図版24 第44号住居址
図版25 第45号住居址
図版26 第45号住居址
図版27 第46号住居址
図版28 第46号住居址
図版29 第46号住居址
図版30 第47号住居址

図版31 第48号住居址
図版32 第49号柄鏡形敷石住居址
図版33 遺構外出土遺物
図版34 遺構外出土遺物
図版35 遺構外出土遺物
図版36 遺構外出土遺物
図版37 遺構外出土遺物
図版38 遺構外出土遺物
図版39 調査経過
図版40 調査経過

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経過

本発掘調査は、個人住宅を建設する地主からの申し出により実施したものである。望月町における個人住宅に係る発掘調査は、昭和57年度に実施した真光寺第1号古墳に次いで2遺跡目である。住宅の建設は、設計図に元づく現地の縄張りを行なわない限り、遺跡に係る土地の変更面積は明確でなく、それに加えて物置の建設、駐車場の設置、水道管・ガス管・排水施設の設置、将来には温室や室その他の建造物が建設される場合が考えられ、発掘調査の計画段階から遺跡の現状変更箇所を指摘することは不可能に近い。従って、最大限度考えられる諸々の建設予定地域を広範囲に調査することが、埋蔵文化財の保護につながるものと考えている。

平石遺跡第2次発掘調査は、昭和63年度より手続が開始された。予算は、発掘調査の原因者である地主が支出することはできないので、100%補助対象経費とし、その内訳は、国庫補助額50%、県費補助額15%、町負担額35%である。尚、事業は平成元年度が発掘調査、平成2年度は整理及び報告書刊行事業の継続事業で実施し、その経過は、以下に示すとおりである。

昭和63年度

- 6月3日 「昭和64年度文化財補助金等の事業計画について」(照会) 63教文第136号
- 6月13日 「同上」(回答) 63望教第851号
- 6月30日 「昭和64年度の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財について」(通知) 63教文第851号
- 7月19日 「同上」(提出) 63望教第1044号
- 11月25日 「埋蔵文化財包蔵地における住宅等の建設と発掘調査の実施について」(地主依頼)
- 12月1日 「昭和64年度埋蔵文化財緊急発掘調査の実施について」(伺)
- 12月28日 「昭和64年度文化財関係補助事業計画について」(提出) 63望教第1721号

平成元年度

- 4月1日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査労働保険関係成立届の提出について」(提出)
- 4月3日 「平成元年度文化財保護事業(県費補助金)について」(通知) 元教文第2号
- 4月10日 「消費税導入後の文化財保護事業の取扱いについて」(通知) 元教文第36号
- 4月11日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業計画について」(伺)
- 4月18日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の通知について」(通知) 元望教第394号
- 4月18日 「有線放送による広報について」(依頼)
- 4月27日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査における労働保険概算保険料申告」
- 4月28日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の作業参加者の雇用について」
- 4月28日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の雇用の通知と参加者全体の事前会議について」

- 5月8日 「平成元年度平石遺跡発掘調査における重機の借上について」(伺)
- 5月8日 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査における写真機材一式借上について」(伺)
- 5月9日 「平成元年度『平石遺跡・山ノ神A遺跡ほか発掘調査』事前会議」
- 5月23日 「平成元年度文化財関係国庫補助事業計画の内定について」(通知) 元教文第94号
- 5月30日 「平成元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書及び「平成元年度文化財保護事業補助金交付申請書の提出について」元望教第781号
- 6月15日 「平成2年度文化財補助金等事業計画について」(照会) 元教文第126号
- 6月26日 「同上」(回答) 元望教第928号
- 7月7日 「平成2年度農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財の保護について」(通知)
元教文第130号
- 7月18日 「平成元年度文化財関係国庫補助金の交付決定について」(通知) 元教文第1号
- 9月11日 「平成元年度文化財保護事業補助金の交付決定について」(通知) 元教文第1号
- 9月25日 「平成2年度文化財補助事業計画の事情聴取について」(通知) 元教文第126号
- 10月11日 「平成2年度文化財補助事業計画について」(提出) 元望教第1359号
- 3月31日 「平成元年度文化財保護事業補助金の額の確定について」(通知) 元教文第2-8号
- 3月31日 「平成元年度国宝重要文化財等保存整備事業実績報告書について」(提出)
2望教第237号
- 3月31日 「平成元年度文化財保護事業実績報告書について」(提出) 2望教第237号
平成2年度
- 4月10日 「平成元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の確定について」
元教文第1-14号
- 5月28日 「平成2年度文化財関係国庫補助事業計画の内定について」(通知) 2教文第113号
- 6月2日 「平成2年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について」(提出)
2望教第575号
- 6月2日 「平成2年度文化財保護事業補助金交付申請書について」(提出) 2望教第575号
- 6月26日 「平成2年度平石遺跡発掘調査報告書刊行事業における遺物の写真実測について」
(伺)
- 6月28日 「平成2年度平石遺跡発掘調査報告書刊行事業における遺物の写真実測委託契約の締結について」
- 7月3日 「平成2年度平石遺跡発掘調査労働災害保険料の申告について」
- 7月31日 「写真実測の完了届」

第2節 発掘調査の構成

1. 遺跡名 平石遺跡
2. 所在地 長野県北佐久郡望月町大字協和字平石3137
3. 調査原因 個人住宅建設事業に伴い平石遺跡に影響が及ぶため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。
4. 調査依頼者 長野県北佐久郡望月町大字協和3136-1 上野一雄
5. 調査主体者 望月町 町長 佐藤幸男
望月町教育委員会が組織する発掘調査団
6. 調査期間 (平成元年度) 平成元年5月15日～平成元年6月10日
(平成2年度) 平成2年6月13日～平成3年3月31日
7. 調査面積 495.2m²
8. 調査方法 西→東を1・2・3……、北→南をA・B・C……とし、3m×3mのグリッド方式による平面発掘を実施。

第3節 調査団組織

1. 顧問 森嶋 稔 (長野県考古学会長・長野県埋蔵文化財保護指導委員・千曲川水系古
代文化研究所主幹・望月町誌編纂委員長・日本考古学協会員)
2. 調査団長 田中 稔 (望月町教育委員会教育長)
3. 調査担当者 福島邦男 (望月町教育委員会学芸員・日本考古学協会員)
4. 調査員 渡辺重義 (軽井沢町文化財専門委員・長野県考古学会員)
倉見 渡 (長野県考古学会員)
掛川喜四郎 (望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会員)
吉澤浩矣 (望月町遺跡調査員)
金井重恭 (望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会員)
白田俊保 (長野県考古学会員)
山本顕治 (長野県考古学会員)
5. 調査補助員 (平成元年度) 福島茂子、小野澤ちえ子、(平成2年度) 福島茂子、上野知一
6. 作業員 (平成元年度) 佐藤初子、伊藤今朝夫、高塚照雄、高橋甫太、菊地寅蔵、菊地
民子、吉澤なつみ、市川吉治
7. 協力者 (平成元年度) 上野知一、小野澤直次、小池嘉一、上野清次、市川 豊、佐藤
久衛、上野和子、上野恵美子
8. 事務局 望月町教育委員会社会教育係

第4節 調査の経過（調査日誌）

- 平成元年度
- 5月15日 助役、教育長、教育次長、社会教育係長、調査員、作業員の出席のもと、地主上野一雄さんの主催で神事が行なわれ、合せて結団式も実施する。その後、グリッドの設定をし、調査を開始する。縄文中期土器が多数出土する。
- 5月16～17日 すでに縄文中期の敷石住居址1棟、炉址1基、埋甕1基が検出され、それぞれ第32号・33号・34号住居址とする。17日午後から18日にかけて雨が降る。
- 5月19日 遺構の掘り込み及び遺構の検出作業を行なう。33住より大形の深鉢形土器が出土する。新たに住居址が検出され第35号住居址とする。
- 5月22～25日 新たに住居址が検出され、第36～40号住居址とする。検出されている遺構の掘り込みを続ける。32住は炉址を中心に鉄平石の敷石が部分的に検出される。33住からは土偶の頭部が出土する。
- 5月29日 住居址の掘り込みを行なう。34住より石棒が出土する。36住は敷石住居址ではないかとの疑いをもつ。38・39住は炉址のみが本日のところ検出される。
- 5月30日 32～35住の清掃と写真撮影を行なう。40住の上層部の写真撮影。新たに41～45住を検出する。全般に複合しており、検出の難しい箇所が多い。
- 5月31日 遺構の検出、掘り込みが続く。また、本日より実測を開始する。32～35、40住の平面及び断面実測を行なう。41住より石囲炉がみつかる。
- 6月1日 37住のプラン確認を行なう。大部破壊されており、しかも廃土の下に一部入ってしまっているため余り良い状態とはいえない。炉址隅より石棒が出土する。
- 6月2日 再度32～36、39、40住の清掃と写真撮影を行なう。実測の終了した住居址から遺物の取り上げを行なう。42～46住の掘り込みも実施する。それぞれの住居址より多量の遺物が出土する。
- 6月3日 34住の床面の精査中に確認できなかった炉址が下部より検出される。40住は、縄文後期住居址であることがわかる。しかも深さ50cm以上もある特異な竪穴である。
- 6月5日 新たに47～49住を検出する。47、48住は複合しており、縄文後期の土器が出土した。49住は、調査開始段階にすでに検出されていた礫と関連した柄鏡形敷石住居址であることがわかる。
- 6月6～7日 47～49住の掘り込みと清掃を行なう。各遺構の平面及び断面の実測を行なう。現段階までの遺構全体の写真撮影を行なう。一部北西側に遺物が集中して出土する箇所があり、掘り下げを行なう。
- 6月8日 遺構実測と写真撮影の終了したところから遺物の取り上げを行なう。35住床下より縄文早期の楕円押型文土器が出土する。
- 6月9～10日 調査の結果、住居址が合計18棟検出されたことになり、竪穴住居址や柄鏡形住居址など第1次調査の内容をさらに深める成果があった。器材を搬出し、調査を終了する。
- 平成2年度
- 6月13日～3月末日 平成2年度における平石遺跡の整理及び報告書刊行事業は、他の遺跡調査とのすり合せの中で開始された。遺物の洗浄、注記そして土器の復元には比較的長時間を要した。遺物の原図は写真実測の委託事業で処理を行ない、写真からのダイレクトのトレース及び図の作成を行なった。担当者、調査員、作業員の連携で図、図版の作成が12月までに実施された。その後、担当者により原稿執筆が行なわれ3月末日に発刊の見込みとなった。

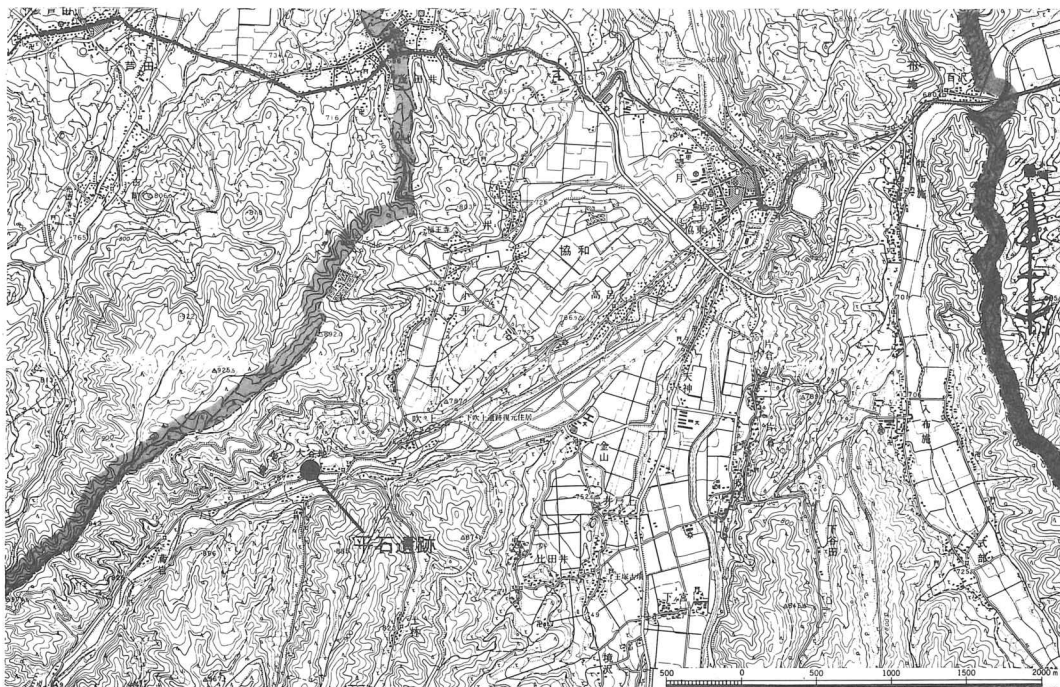
第II章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地と自然的環境

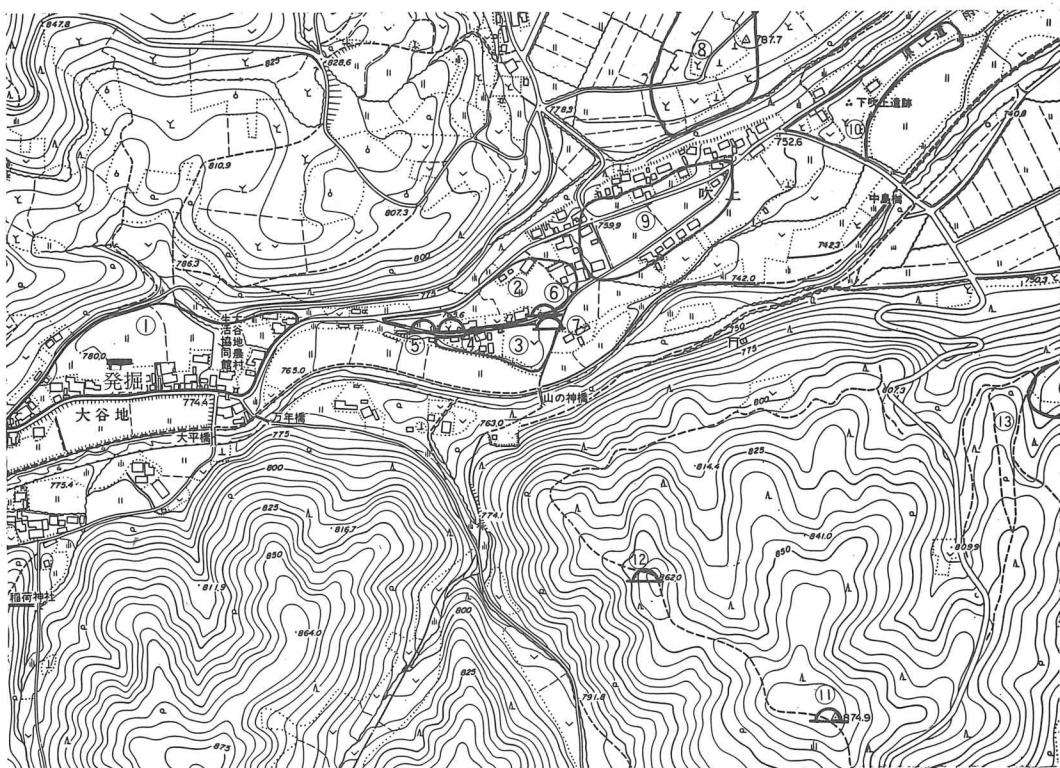
望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山(2,530m)を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山(2,560m)の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成がなされていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」(模式地：佐久市相浜)と呼ばれる非常にもろい湖沼性堆積層によって形成されており、各所に露頭箇所を見ることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礫質砂岩などで、幾層にも繰り返して互層しており、ほぼ水平層に近い。これらの地層の中では、泥岩から針葉樹や広葉樹などの珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」(模式地：望月町大字望月)と呼ばれ、メタセコイヤやその他の植物化石が得られることから、相浜層が、新生代第四紀更新生の前期と推定されているのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新世の後期に属すると推定されており、今から約200万年以前に形成されたということがわかる。一見すれば、蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相異がみられるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域をいわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また、西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿を止めている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が北方の望月町方面へ延び、しかも雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は、安山岩の分布が広く見られ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、畳石、菅原、大谷地、吹上など八丁地川の中・上流地域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がものの美事に発達し、天然記念物のごとく美しい露頭を見ることができる。

望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜って流下している。細小路川は春日で、また、八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流の4河川は、この地方においては人々の生活や動植物の生棲にとって必要不可欠な自然的条件であるとともに、これらの自然環境を取り入れながら過去から現在に



第1図 平石遺跡位置図 (1 : 50,000)



第2図 平石遺跡周辺の遺跡分布図 (1 : 10,000)

第1表 平石遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	遺構・遺物	備考
①	平石遺跡	大字協和字平石	集落址	畑・水田 宅地	(縄・早～後)早期～後期の各期の遺物、(弥・中・後)土器、滑石製模造品、須恵器、(奈・平)土師器、須恵器、(中～近)小銭、陶磁器他	昭和62年度に発掘調査同63年度に報告書刊行
②	山ノ神A遺跡	大字協和字山ノ神河原 上吹上	散布地	水田 宅地	(縄・早・前・中・後)深鉢、黒曜石フレイク、(古・後)須恵器、(平)土師器、須恵器	平成元年度に発掘調査
③	山ノ神B遺跡	大字協和字山ノ神河原	散布地	畑・宅地	(縄・中～後)土器、フレイク、(弥・後)土器、(平)土師器、須恵器	平成元年度一部発掘
④	山ノ神第1号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)直刀14、刀子32、刀装具20、馬具4、鉄鏃53、勾玉7、管玉1、切子玉17、金環13、銀環1、金鈴2、埴輪片4	昭和45年度に発掘調査報告
⑤	山ノ神第2号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)天井石は存在しない。石室露呈	保存良好
⑥	山ノ神第3号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	宅地	(古)横穴式石室、直刀3、刀子10、鉄鏃50以上、冑1、轡1、杏葉1、辻金具2、雲珠1、帯金具2、瑪瑙製曲玉7、水晶製切子玉2、水晶製丸小玉2、琥珀製丸小玉1、滑石製白玉1、ガラス小玉14、金環2	平成元年度に発掘調査
⑦	山ノ神第4号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)横穴式石室、刀子3、鉄鏃15、金環2、轡3、帯金具1	平成元年度に発掘調査
⑧	貴船反遺跡	貴船反 大字協和字太田 雨池	散布地	畑・水田	(縄・中)中期後半の住居址、深鉢、打石斧・土器・フレイク、(平)土師器、須恵器	
⑨	上吹上遺跡	大字協和字上吹上	集落址	水田	(縄・中～後)中期住居址7、集石11、土壙、深鉢、浅鉢、埋甕炉、打石斧、磨製斧、石鏃、凹石、敲石、石匙、フレイク他	昭和63年度に発掘調査元年度に報告書
⑩	下吹上遺跡	大字協和字下吹上	集落址	畑・宅地	(縄前～中)前期住居址1、中期住居址9(内敷石住1)、埋甕、深鉢、浅鉢、打石斧、磨石斧、石鏃、ノミ型石器、凹石、敲石、石匙等	昭和53年度平成元年度に発掘調査
⑪	内裏塚第1号古墳	大字協和字大里久保	古墳	山頂	(古)5世紀代とみられる山頂の円墳	保存良好
⑫	内裏塚第2号古墳	大字協和字新林	古墳	山頂	(古)5世紀代とみられる山頂の円墳	保存良好
⑬	堂上日影A遺跡	大字協和字堂上日影	散布地	畑	(平)土師器、須恵器	

至るまで日々刻々と生活が営まれたのであり、基本的な生命泉であるといえる。

平石遺跡は、望月町の中心地の西方で八丁地川中流の左岸に当る河岸段丘に位置している。この付近は、かつて河川が大きく蛇行していたと思われ、自然堤防上は他の段丘面から比べるとかなり広い平坦面が作り出されている。そして、遺跡の存在する段丘面は河床より約5～10m程高い位置になり、標高775～780mを測る。やはり八丁地川流域の中でも最も広く平坦面の続く河岸段丘で、北側には小高い山が控えており、この付近の遺跡の立地条件として最も適地と考えられ、

現在の状況も含め幾年にもわたって生活の場として選択するのは当然のことである。

平石遺跡の存在する地域全体は沖積地であり、八丁地川によって時には削られ、時には氾濫によって形成されているが、八丁地川そのものが段丘形成前に流れていた時期もありその形跡が確認されている。そして、八丁地川が移動する段階には河床に極めて長い期間ヨシが繁茂し、河川の移動によって池状に残り、やがて湿地帯と化していったものと考えられ、北側の広範囲に厚く泥炭層が確認された。泥炭層中に含まれる植物はヨシが最も多かった。泥炭層の周辺地域は、大小の礫が全面に存在し、さながら河原の様相であり、泥炭層の基盤となる地質構造は、角のとれた丸い河原の小礫であり、八丁地川がかつてはここを流れていたことの実証ともなるものである。また、遺構の存在する地点は不思議に礫が余り存在せず、粘質土を僅かに含んだ砂層である。恐らくは人工的に礫を移動し、地盤を変更した結果であろうと思われる。

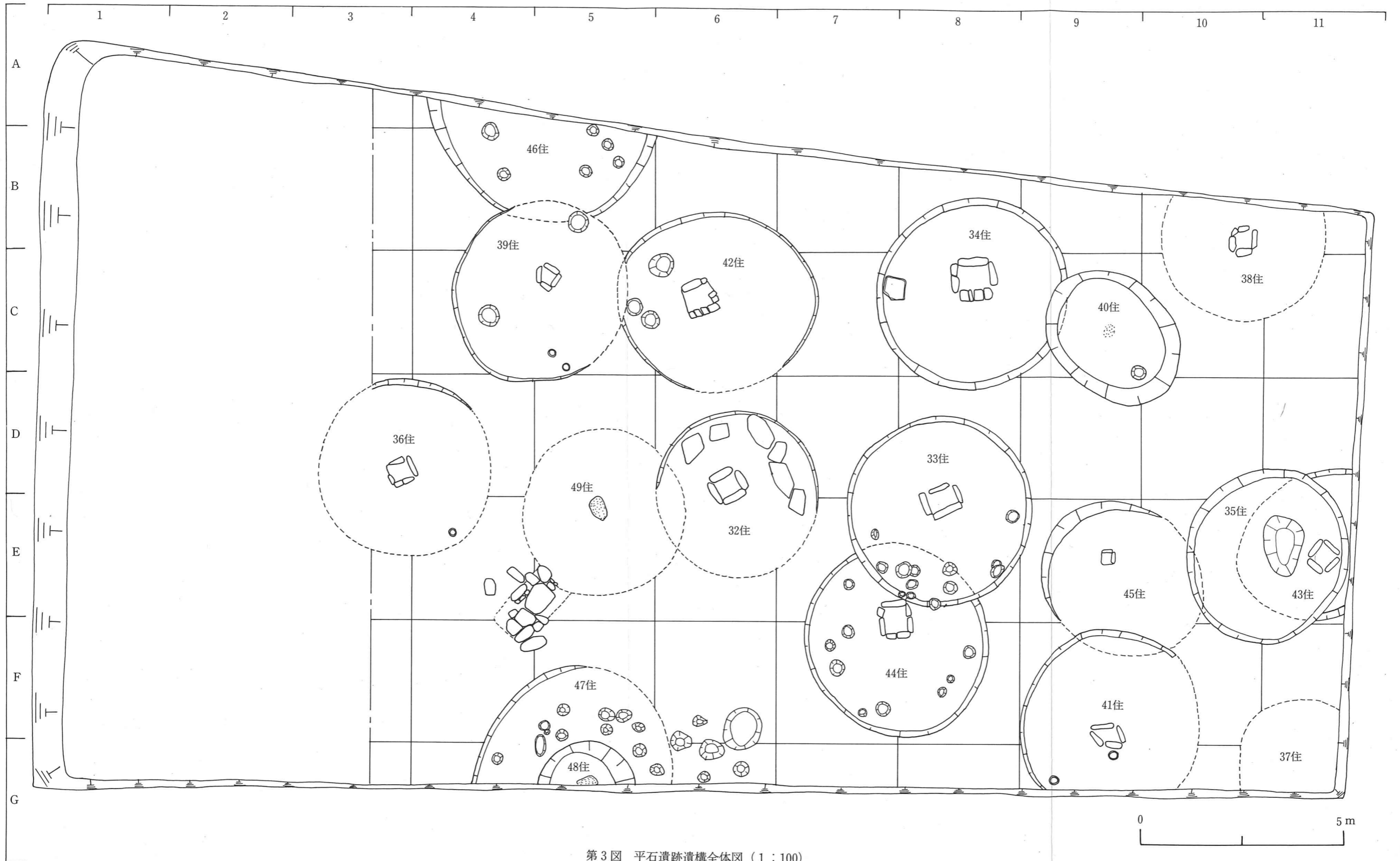
本地域はまさに八丁地川によって形成された地域であり、人々の生活も八丁地川とかかわりが深かったものと思われる。

第2節 遺跡の歴史的環境

望月町に存在する遺跡は、地点からみると287遺跡であるが、それぞれを各時代別に区分してみると総数469遺跡を超える。このうち最も多いのが平安時代で42.9%、次いで縄文時代の37.5%であり、次は古墳時代の11.8%でここまでみると時代別の数にかなりの減少がみられる。

平安時代は、前代より続く望月町のピークを迎える時代であり、地域的な社会情勢に加え朝廷の直轄地を控えていたこともあって、人口が急増したと思われ遺跡数が極立って多い。分布地点も望月町のほぼ全体にみられる。平石遺跡でも内黒の土師器や須恵器の甕などが出土している。また、平安時代に限ってみれば、須恵器の窯址も御牧原台地や北御牧村の八重原台地に多数存在し、一大窯業生産が展開されている。

縄文時代も平安時代に匹敵する程遺跡数が多い。望月町全体から概観するとやはり広範囲にわたって分布していることがわかるが、特に蓼科山麓に近い程分布密度が濃くなっている傾向にある。発掘調査をする中では、春日地域、協和地域に規模の大きな遺跡が存在し、水系によって特徴を示している。平石遺跡の存在する八丁地川水系では、やはり平石遺跡が最も規模が大きく、長期間生活が営まれており、また、昭和51年度に発掘調査した下吹上遺跡では、縄文前期の住居址1棟、中期の住居址5棟が検出され、このうち1棟は平地式の敷石住居址であった。この敷石住居址の炉址及び敷石部の様相は、平石遺跡第2・23号の2棟の住居址に近似しているもので、中期後半の代表的な遺構である。立地条件も同様の河岸段丘上にあり、極めてよく似ている。昭和63年に発掘調査した上吹上遺跡も、やはり八丁地川の左岸の河岸段丘に位置しており縄文時代中期の集落址が確認され、貉沢期及び中期後半IV期の住居址7棟が検出された。この他、上吹上遺跡に隣接する台地の貴船反遺跡も中期後半IV期の住居址が検出されている。



第3図 平石遺跡遺構全体図 (1:100)

第三章 遺構と遺物

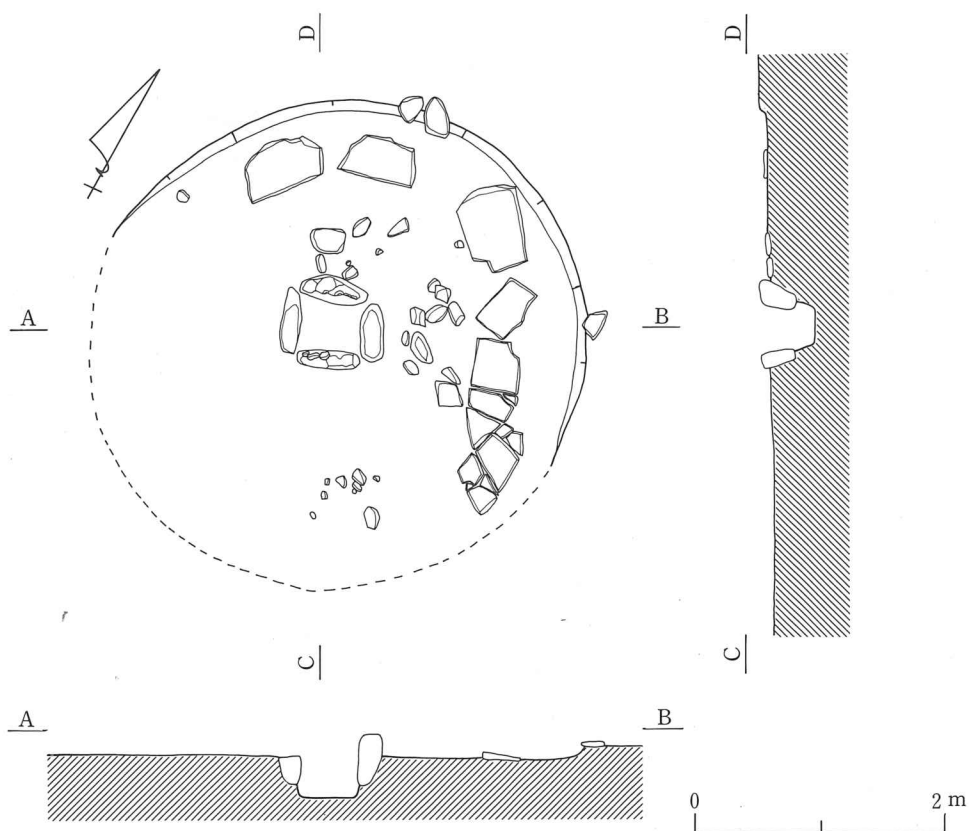
第1節 縄文時代の遺構と遺物

1. 第32号住居址（第4～6図、図版2・3）

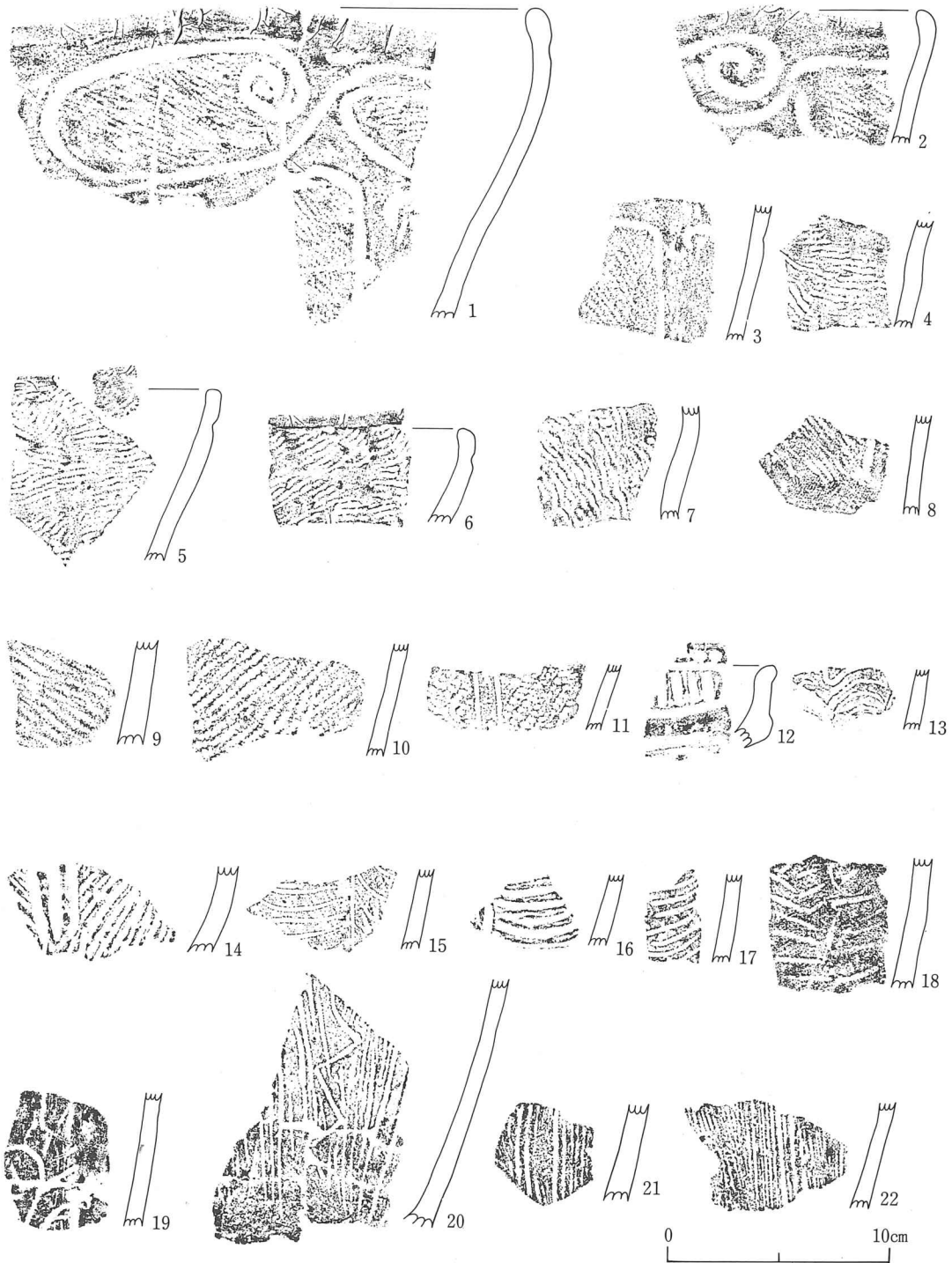
本住居址は、調査区のほぼ中央部で、D-6・7、E-6・7グリッドで検出された敷石住居址である。プランの南側半分は、水田の造成あるいは耕作の時に破壊されたと思われ、壁・床ともに存在していなかった。東西の直径は400cm、壁高1cmを測るが、南北もほぼ同様の円形主体部をなしていたものと推定される。炉址は、一辺80cmのほぼ方形をなし、深さ40cmを測る。四面ともに表面が扁平の河原石が使用され、熱の作用により表面が部分的に剥離している。しかし、内部には焼土や灰などはほとんど存在していなかった。床面の北側には、扁平な比較的大形の鉄平石（安山岩）が敷かれていたが、本来は全面に敷石が存在していたと思われる。

主軸は、炉址の方向より判断してN23°Wで、真北よりやや西方に主軸をとっている。

住居址の形態は、主体部が円形の敷石住居址であることは明らかであるが、第1次調査で検出



第4図 第32号住居址実測図（1：60）



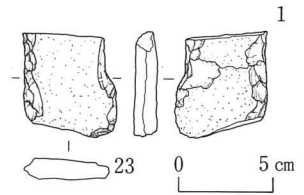
第5图 第32号住居址出土土器实测图(1:3)

された第2号柄鏡形敷石住居址等平石遺跡全体の住居址形態から類推すると、本住居址は柄鏡形敷石住居址であった可能性がある。

遺物は、器形に復元できるものはなく全て破片資料でありあまり多くない。第5図1～22は、縄文時代中期後半の土器であるが、型式差が認められ時期的に一定しておらず、従って混入（混在）遺物の可能性も考えられる。主には、中期後半IV期に比定できる。

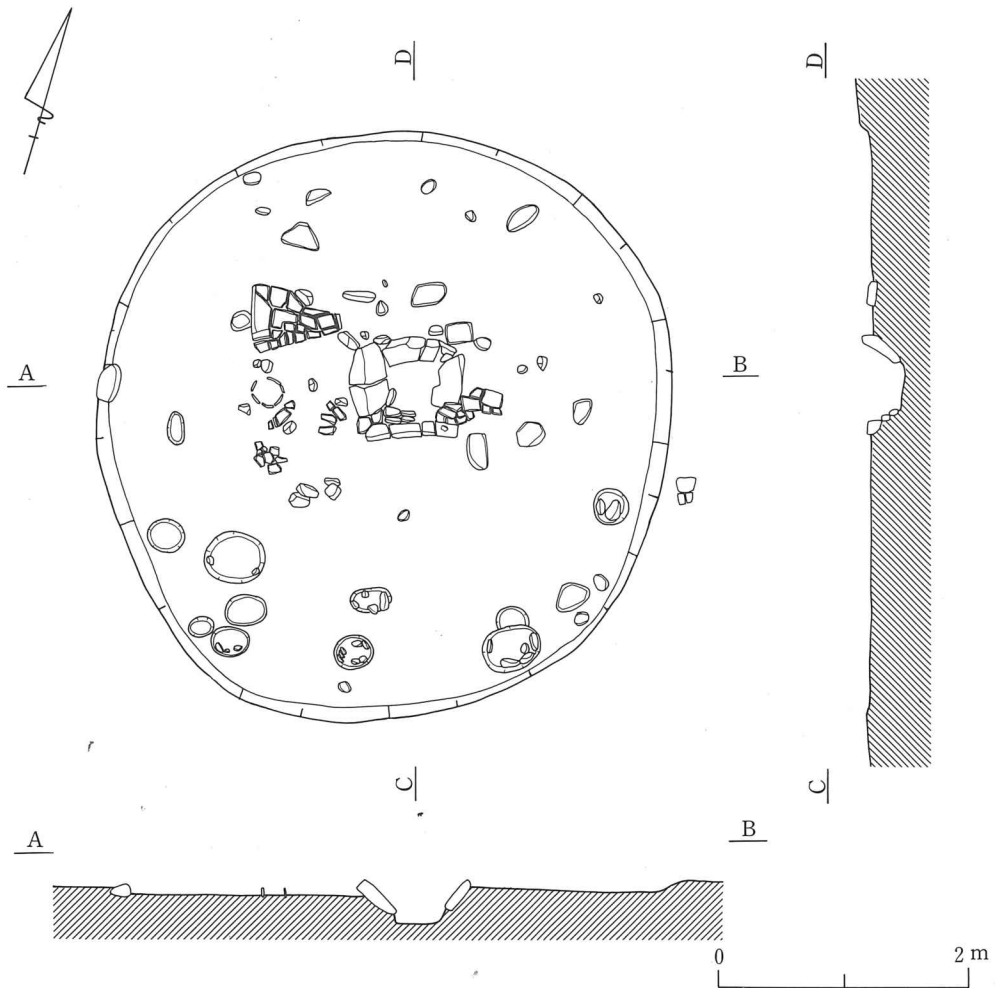
石器は、打製石斧（第6図23）1点と磨石5点、黒曜石のフレイクが出土している。

本住居址は、時期設定のできる遺物は出土していないが、敷石住居址の形態や当地域特有の炉址形態のあり方から中期終末期である中期後半IV期と考えられる。



第6図 第32号住居址石器実測図（1：4）

2. 第33号住居址（第7～10図、図版4～6）



第7図 第33号住居址実測図（1：60）

本住居址は、調査区のほぼ中央部で、第32号住居址の東側で検出された。かかるグリッドは、D-7~9、E-7~9である。南側には第44号住居址が存在し、本住居址の一部と複合関係をなしており、第44号住居址→第33号住居址の順に構築されたことが確認されている。

東西600cm、南北700cmを測り、やや南北に長い円形プランをなし、壁高は10cm程である。壁は浅いが固く締って良好である。床面は、砂質黄色ロームの地山を固く締めてあり、極めて良好な状態であった。床面のほぼ中央部には、東西90cm、南北80cmの平面長方形の炉址が存在しており、深さは30cmを測る。炉石は四面とも厚手の鉄平石が使用されており、長期間の熱の作用により、かなり細かく割れていた。内部には焼土が厚く残り、彩かな赤褐色をなしていた。

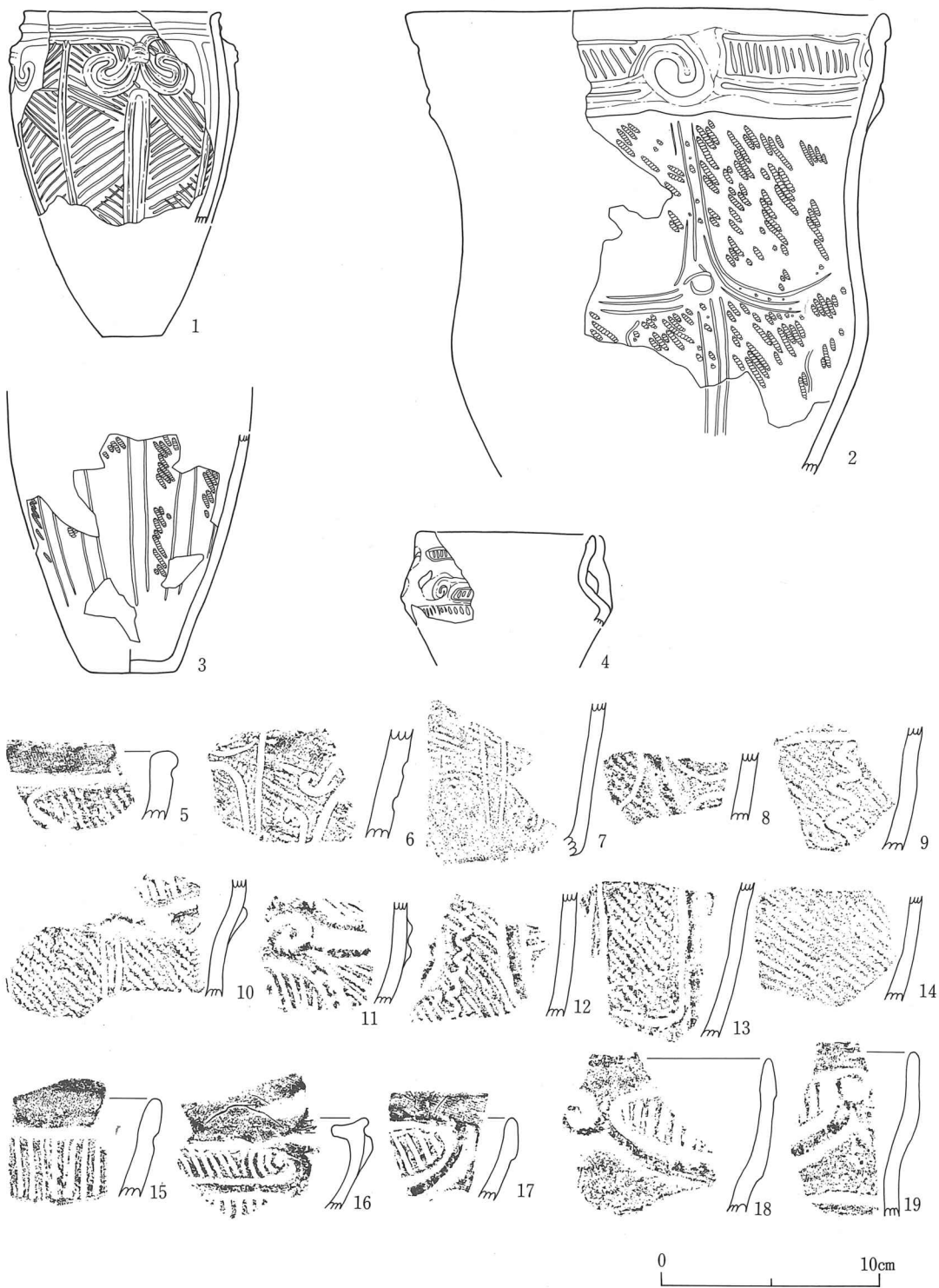
プランの南側に集中して12個のピットが認められた。これらは、第44号住居址に伴うことも考えられ、本址に伴うものと確定はできないが、一応本址で取り上げることにした。また、全てが柱穴とは考えられない。内部に丸味を帯びた礫が入っているピットがあり、これらは柱を入れた後に詰めた詰め石と認められ、明らかに柱穴と思われる。また、2連のピットがあり、柱を取り替えた遺構とみられる。

床面上には、鉄平石や河原石など小礫が存在し、中には磨耗しているものもあった。

遺物は、縄文時代中期後半の土器及び石器が比較的多く出土した。第8図1は、胴部下半と口縁部を欠くが、図上復元で口縁部直径18cm、器高30cmと推定でき、器厚0.8~1cmで胎土に砂粒や僅かに雲母を含む土器である。2は、同様図上復元で、口縁部直径44cm、器厚1.2cmを測る大形の土器である。口縁部には横帯する文様帯が巡っている。頸部から胴部にかけては沈線が施文されており、器面には全面に縄文が施文されている。3は胴部上半が欠損している資料で、器面に対して縦状の沈線が数条描かれ、全面に縄文が施文されている。4は、把手付の壺形土器で、口縁部と頸部に渦巻文と区画文との組み合わせによる文様帯がみられる。5~39は、1~4のいずれかの文様パターンに含まれるものである。5・15~21は、口縁部に渦巻と区画文の組み合わせによる文様帯が施文されている深鉢形土器である。22・23は、1の資料に近似する口縁部の破片である。38・39は、綾杉文を主体に施文されている資料である。

石器は、石鏃2点、石錐1点、打製石斧4点、スクレイパー2点、凹石3点、磨石1点、その他フレイク類が出土している。第10図47の打製石斧以外は全て欠損品であり、使用不能の資料が多く残されていたことは本址の石器のあり方の特徴である。

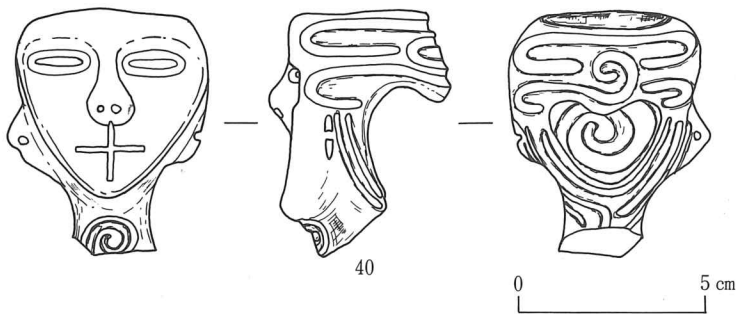
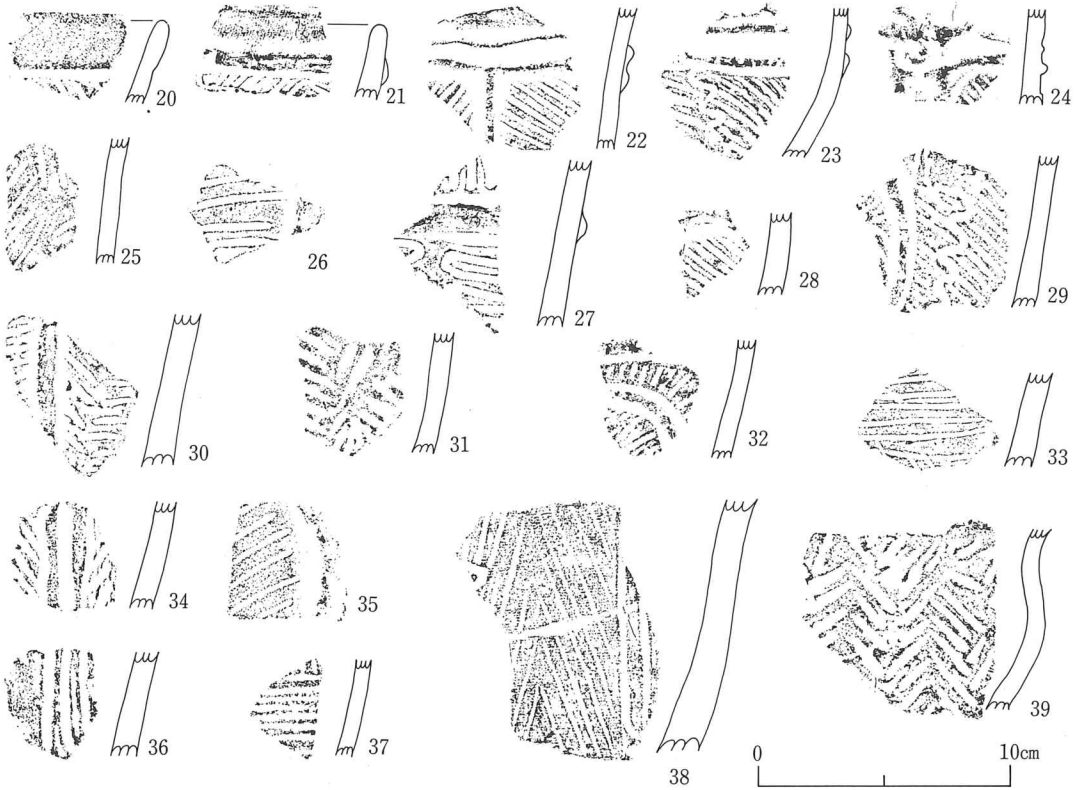
第33図40は、土偶頭部の資料である。顔面部の縦は5cm、横は5cmを測り、頭部に近い部分から顎にかけてやや丸味を帯びる逆三角形をなしている。眉間に当る部分はややふくらみをみせ、鼻につながっている。目は沈線により横長の楕円状に描かれ、鼻はやや盛り上げて孔が2つ開けられている。口は沈線により十字状に施文されている。頭部及び頭部背後は、唐草文ないし渦巻状の沈線が全面に施文され、冠状の構造になっている。従って頭部上面から見ると中央部は大きな孔となっている。本土偶の顔の表状は、感情があるような、あるいはないような異様な感じを受け、口がまた十字状に刻まれている。三口(兎)の表情か、あるいは口を封じているのかとも



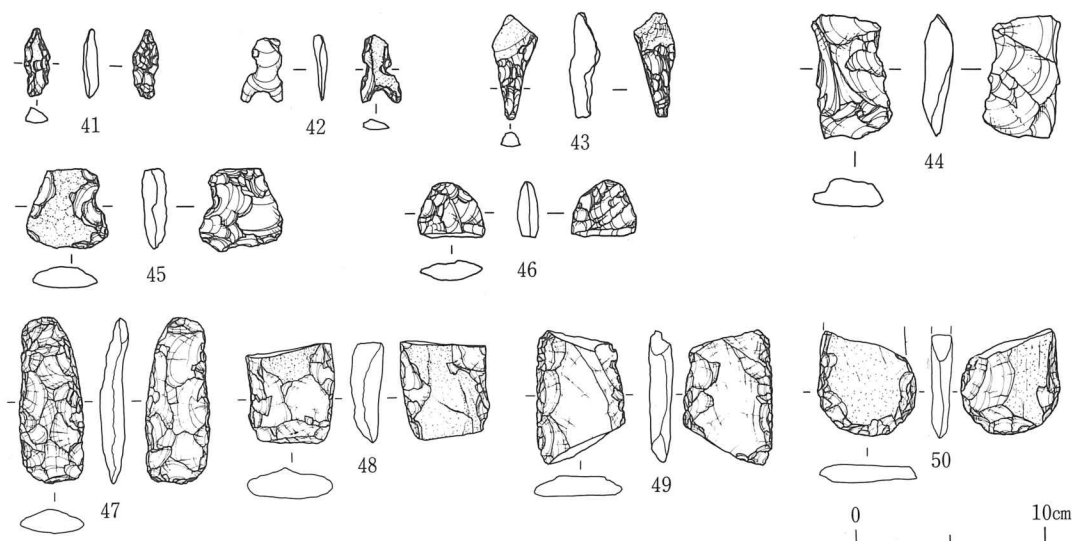
第8图 第33号住居址出土土器实测图 (1~4·1:6、他1:3)

考えられるが、いづれにしても、通常の土偶にみられる表状とは異なり、一種異様な様相を呈しているものである。

本住居址は、土器を中心にした出土資料から、縄文時代中期後半IV期に比定されるものであると考えられ、良好な基準資料となりうるものである。



第9図 第33号住居址出土土器及び土偶実測図(40・1:2、他1:3)



第10図 第33号住居址石器実測図 (41~46・1 : 2、47~50・1 : 4)

3. 第34号住居址 (第11~14図、図版7・8)

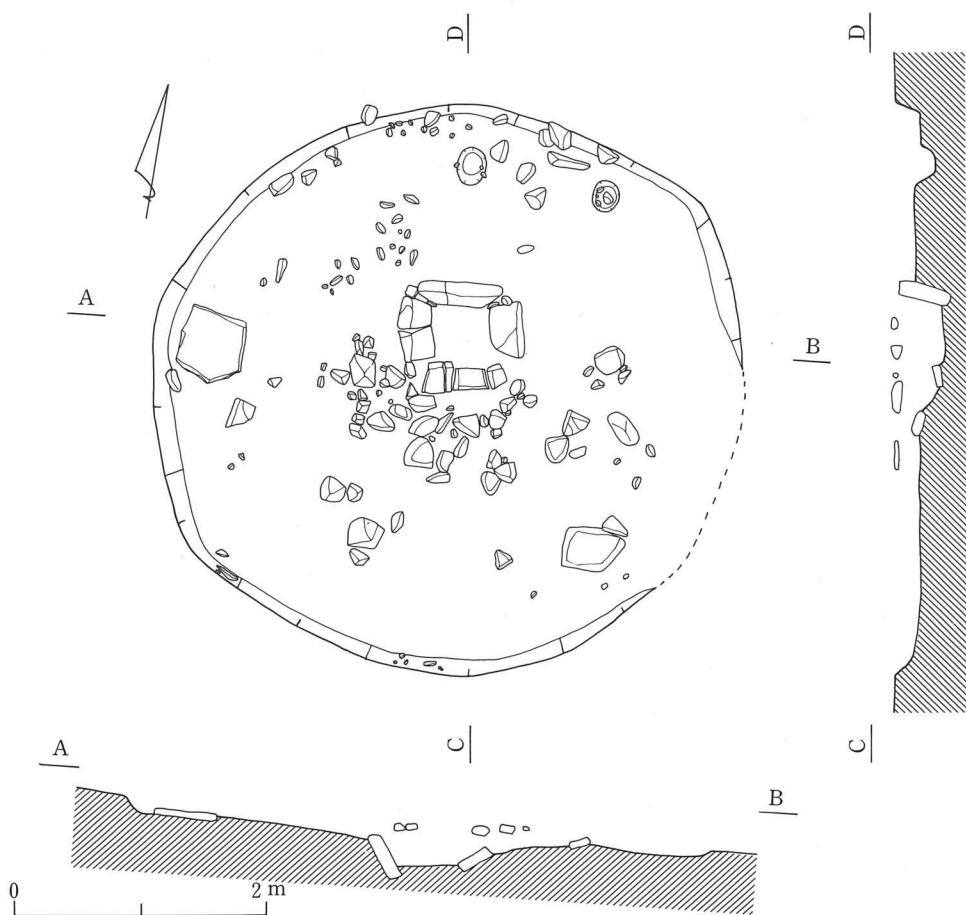
本住居址は、調査区中央部北寄りのB-7~9、C-7~9、D-8グリッドで検出された縄文時代中期後半の円形竪穴住居址である。本址は、第40号住居址と複合関係をなしており、第34号住居址→第40号住居址の編年が明らかになっている。

東西470cm、南北460cmでほぼ正円形をなしており、壁高は10~15cmを測りやや高低に差がある。覆土には山礫を主体に大小の多数の礫が入り込み、床面にまで達していた。床面は、凹凸が激しく、小礫が地山に入り込む状態で存在しており平滑ではなかったが、極めて固く締まっていた。また、床面下にも大礫や小礫が厚く入り込んでいる状態であり、意識的に構築されていることがうかがえる。炉址は、東西100cm、南北85cm、深さ20cmを測り、四方の炉石は東・西・南側の炉石が鉄平石(安山岩)、北側の炉石は極めて大きな河原石が使用されていた。中でも南側の炉は、扁平な面を上部に向け、しかも他の炉石よりも低く据えてあった。恐らく南側が炉を使用する場合の主体的な場であったものと考えられる。炉の内部にはほとんど焼土や灰は存在しておらず、低面に僅かな焼土が存在しているだけであった。

床面上の西側には大形の鉄平石が存在しており、また、プランの掘り込み段階でも鉄平石の小片が出土していたことをみると、本来は全面に鉄平石が敷かれていたものとみられ、第32号住居址と同様敷石住居址であった可能性が高い。

柱穴は、床面北側で1個検出されたが、規模が小さい。

遺物は、器形復元可能な土器2点と破片資料及び少量の石器が出土している。1は、口縁部直径20cm、器高26.5cm、器厚0.8cmを測る深鉢形土器で、口縁部直下が部分的に欠損している。口縁部は折り返しになり肥厚し、無文帯になっている。頸部はややくびれており、隆帯による渦巻状

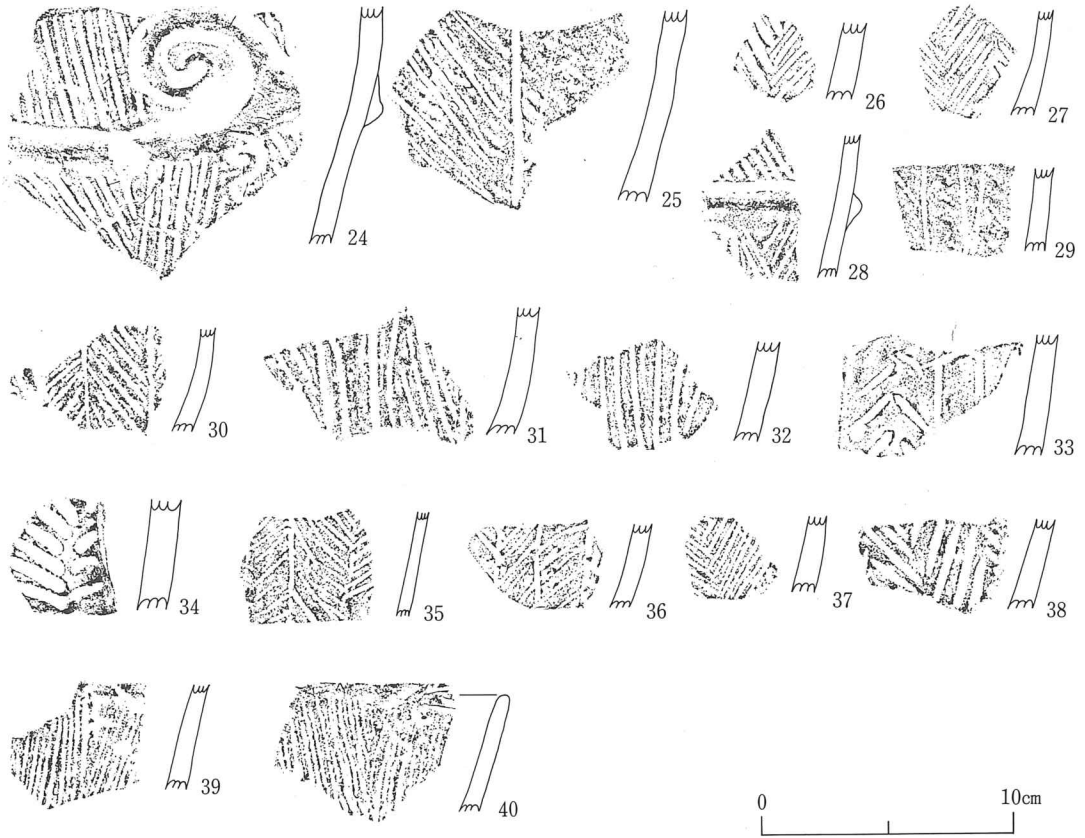


第11図 第34号住居址実測図（1：60）

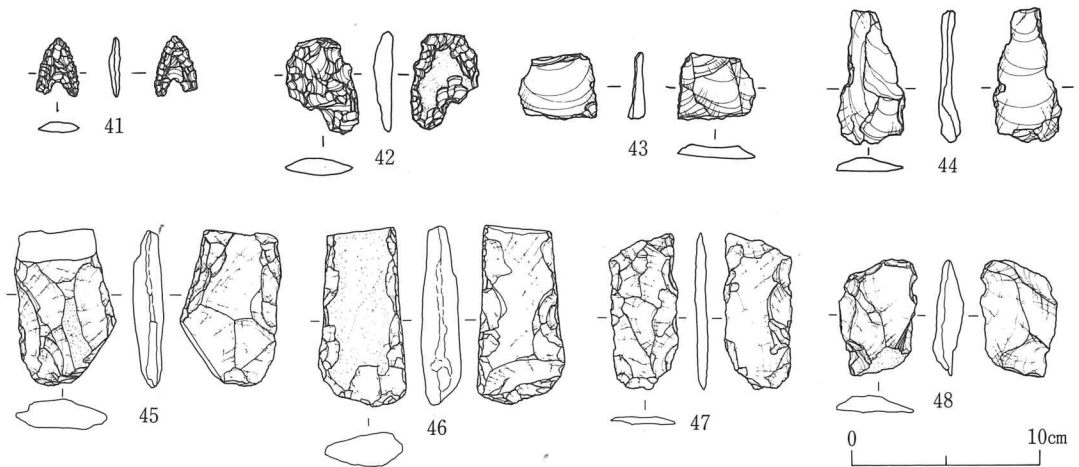
の文様が施文されている。胴部には、器面全体を四分割するように頸部から縦状に隆帯が貼付され、その間を全面に雨垂れ状の沈線が施文されている。2は、口縁部直径16cm、器高18cm、器厚0.5~0.8cmを測る深鉢形土器である。口唇は若干内弯し、沈線で半円状に施文されている。頸部には波状沈線が器面を巡り、胴部には縦状の沈線と、器面全体に縄文が施文されている。3~5、7~9、11~13、17、19、24、28は、渦巻文と横長の楕円区画文を口縁部文様帯にもつ深鉢形土器の破片資料であり、中でも3は大形の破片であるところから器形復元された資料である。口縁部はやや破状をなしており、その直下に隆帯による渦巻状の文様、さらに連続して楕円区画文が施文されている。区画文内には斜状沈線が描かれている。区画文内の沈線は、斜状のものと13、17にみられる半円状のものが存在する。第12・13図にみられる他の資料は胴部の資料であり、縄文系列の土器と唐草文系列の土器がみられる。



第12图 第34号住居址出土土器实测图 (1~3·1:6、他1:3)



第13图 第34号住居址出土土器实测图 (1 : 3)



第14图 第34号住居址石器实测图 (41~44 · 1 : 2、45~48 · 1 : 4)

石器は、石鏃2点、スクレイパー多数、打製石斧4点、凹石3点、磨石1点その他フレイクが多数出土している。石鏃とスクレイパーは全て黒曜石製である。

本住居址は、土器を中心とした出土資料から、縄文時代中期後半Ⅲ～Ⅳ期に比定されるものである。

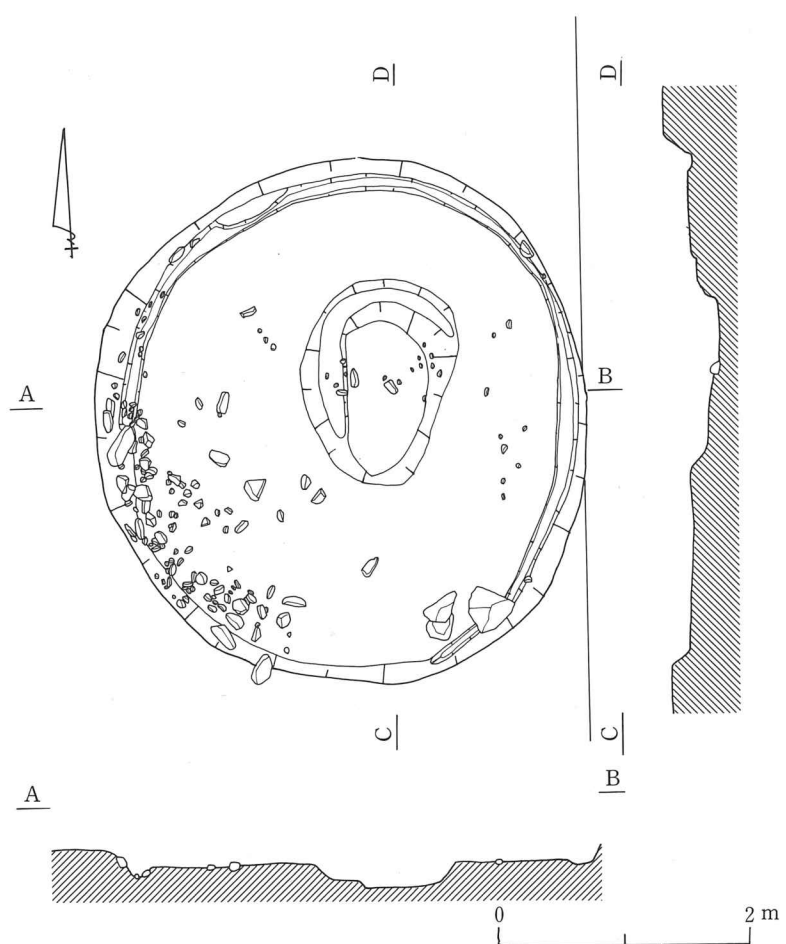
4. 第35号住居址（第15～20図、図版9～11）

本住居址は、調査区東側の中央部で検出され、かかるグリッドはD-10・11、E-10・11、F-10・11である。本址は、第43号住居址と第45号住居址と複雑に複合関係をもっており、第45号住居址→第43号住居址→第35号住居址の順に新旧関係が明らかになっている。

東西390cm、南北420cmを測り、やや南北に長い楕円形をなしている。壁高は、20cmを測る。床面は、砂質黄色土を固く締め平滑で極めて良好である。壁面もかなり固く締っており、構築の際にタタキをなしたものと思われる。南側を除く壁直下の周囲には、幅12～18cmの周溝が巡っており、深さ1cmを測る。床面のほぼ中央部には、炉石がすでに抜き取られた炉址が存在しており、掘り方だけが残っていた。東西120cm、南北165cm、深さ20cmを測り、南北に長い楕円形で、北側は2段構造になっていた。内部には焼土や灰は全く存在していなかった。炉石が抜き取られていたということは、恐らくは住居址を破棄した段階で、後に住居址を作る時に再利用したのではないかと考えられる。

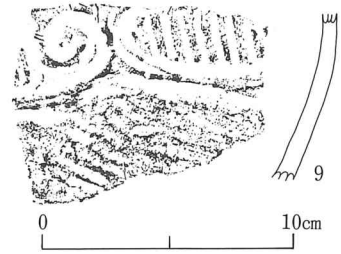
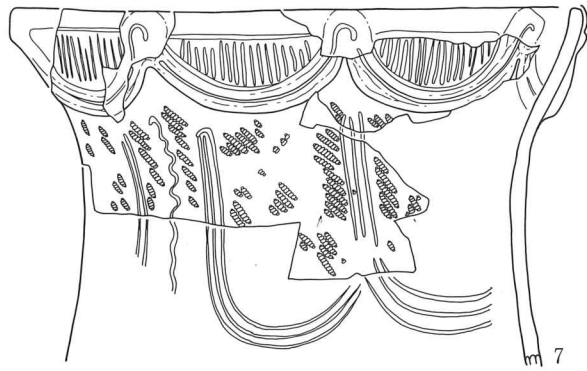
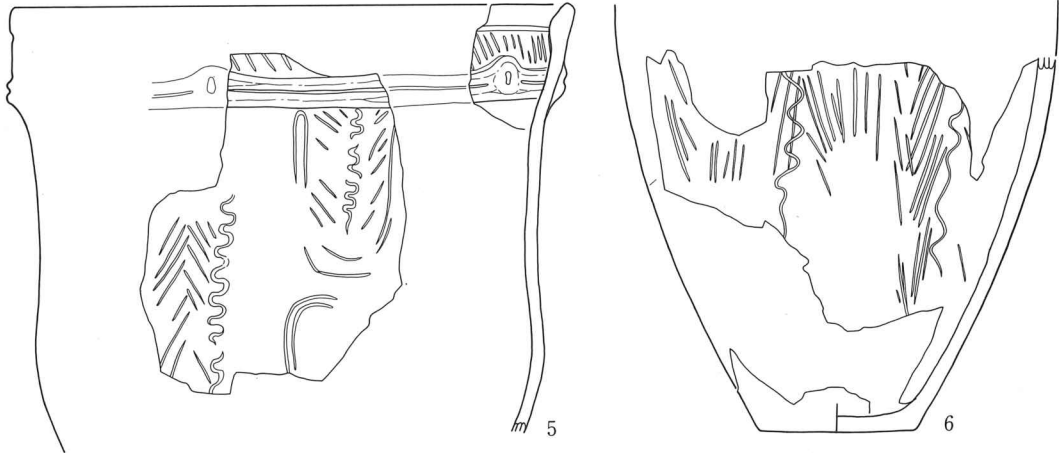
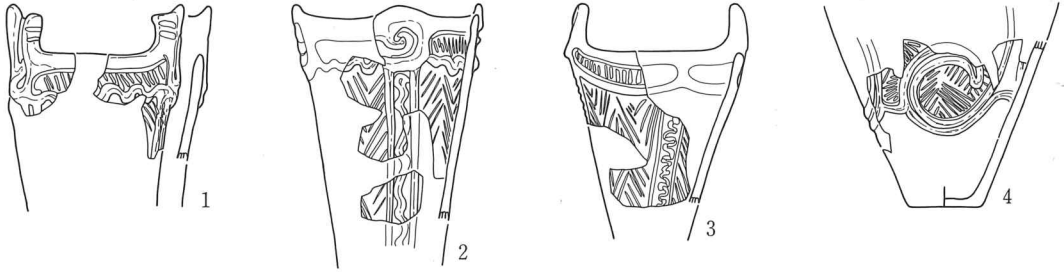
床面上には、炉址上面から南側にかけて、帯びただし程の土器片が集中していた。個体数は明らかではないが、かなりの数に及ぶものと思われる。時期的にもほとんど差のないところから一時的な埋没状態を示しているものとみられる。尚、これらの集中する土器は、本住居址に伴うものかどおき疑問の生じる場所である。それは、土器が床面に接してはいるものの炉址はすでに埋っており、覆土の上面に存在していることになり、住居址が廃棄された以後に土器が入り込んだ可能性も考えられる。さらに、中央部に集中するということは、住居址そのものがレンズ状に埋没しはじめた段階で土器を投げ入れた可能性もあり、したがって、中央部に集中する傾向は十分考えられる。床面からは、土器集中部以外にも遺物が出土しており、これらの土器との型式差がないことから、本址に伴う土器とも理解することができる。住居址の南西部壁際には礫が集中し、地山に含まれる様子で存在していた。

遺物は、ほぼ器形復元できた土器は14個体存在するが、全般に復元部の方が多くを縮めている。1は、口縁部に2つの把手が付いた小型の深鉢形土器で、胴部の大部分が欠損している。口縁部の直径は13.5cm、把手の長さ3.5cmを測る。口唇直下は無文でその下部に隆帯で楕円区画文が施文されている。2は、口縁部直径15cm、推定の高さ約20cm、器厚0.5～0.7cmを測る。口縁部は渦巻と楕円区画文の組み合わせによる文様帯が巡っており、渦巻文の存在する位置の口縁部が山形に盛り上がる波状口縁をなしている。口縁部文様帯の直下には、綾杉状沈線文が施文されている。3は、口縁部直径15cm、推定の高さ（把手除く）15cmを測る把手付の深鉢形土器である。口縁部

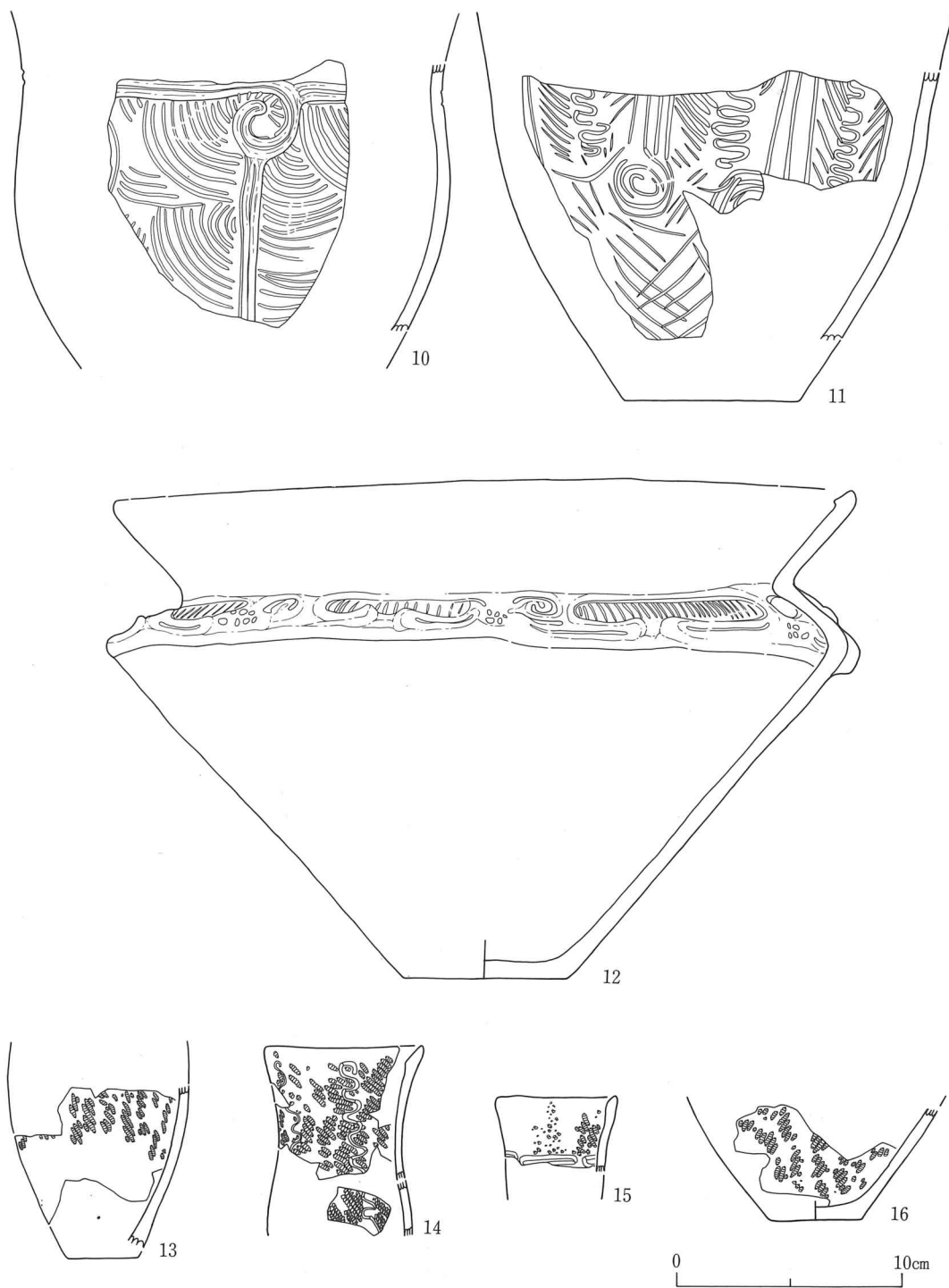


遺物分布の状況

第15図 第35号住居址実測図 (1 : 60)



第16图 第35号住居址出土土器实测图 (1~7·1:6、他1:3)



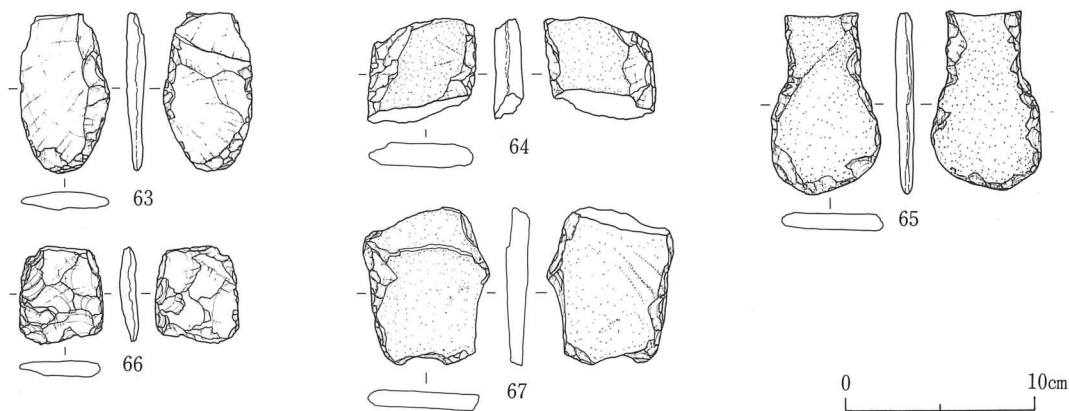
第17图 第35号住居址出土土器实测图 (1 : 6)



第18图 第35号住居址出土土器实测图 (1 : 3)



第19图 第35号住居址出土石器实测图 (1 : 4)



第20図 第35号住居址出土石器実測図（1：4）

文様帯と同部の綾杉状沈線文で文様構成されている。4は、大型の深鉢形土器で、上半部は欠損している。隆帯による渦巻文と沈線文が施文された唐草文系の土器である。5は、僅かな破片で復元した資料であるが、口縁部直径45cmを測る極めて大型の土器である。また、6は上半部が欠損している土器で、5・6ともに横帯する口縁部文様帯と、その直下の綾杉状沈線文による文様構成がなされている。7は、口縁部直径45cmを測る極めて大型の深鉢形土器で胴部下半は欠損している。口縁部は外反し、楕状の楕円区画文が巡っている。その直下はU字状の沈線文と、地文に縄文が施文されている。第17図10は、縦に貼付した隆帯と、それを中心にした半円状の沈線により文様が施文されている。11は、縦状の沈線を中心に綾杉文が施文されているもので、11・12ともに比較的大型の深鉢形土器である。12は、口縁部直径65.5cm、頸部のくびれ部54.2cm、胴部の張出部65.5cm、器高45cm、底径15cm、器厚1.2～1.7cmを測る巨大な鉢形土器である。口唇は内側に折り返して肥厚している。口縁部から頸部までは無文、頸部から胴部の張出部にかけて横帯する楕円区画文が器面を巡っている。区画文内には沈線が施文されている。胴部下半部は無文である。13～16は、地文に縄文が施文された土器で、いずれも小型の深鉢形土器である。第16図8・9、第18図の土器は、いずれも深鉢形土器の資料であり、時期的なバラツキはほとんどない。

石器は、打製石斧、凹石、磨石、スクレイパー、フレイクが多数出土している。第19・20図は出土した一部の打製石斧の実測図である。形態的には短冊型が圧倒的に多く、また石質もほとんどが安山岩製である。

本住居址は、土器を中心にした出土資料から、縄文時代中期後半IV期の住居址である。

5. 第36号住居址（第21～24図、図版12・13）

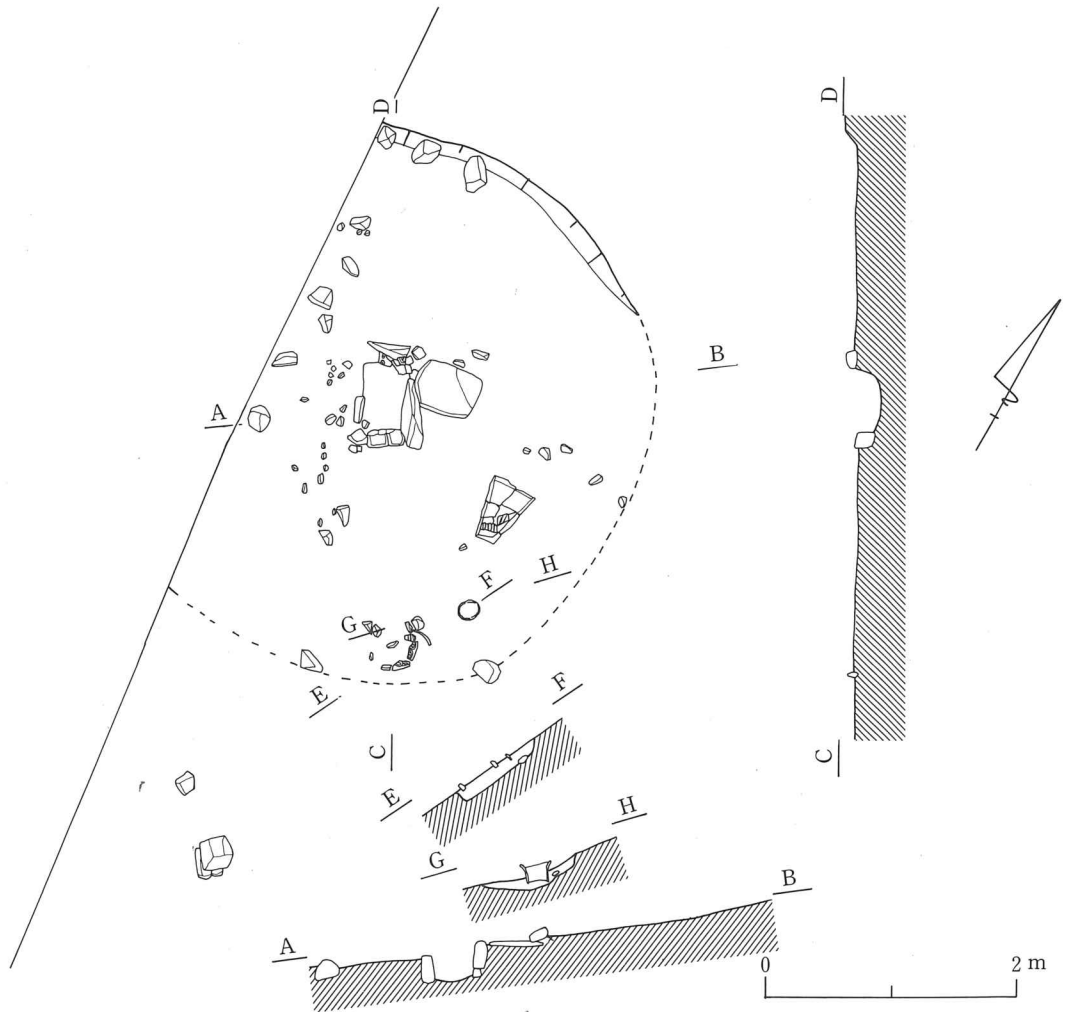
本住居址は、調査区最西端のほぼ中央部で検出された縄文中期後半の住居址である。かかるグリッドは、D-3・4、E-3・4である。住居址は、北側の一部の壁が残存している程度で、他の壁は破壊され存在していなかった。また、西側は廃土の関係で調査が不可能な部分にプラン

がかかってしまっていたため、全プランの約半分が調査することができなかった。炉址は幸いにして良好な状態で検出され、また、埋甕やまとまった土器が出土していたため、これらの状況を総合して、直径450cm程度の円形竪穴住居址であったと推定される。

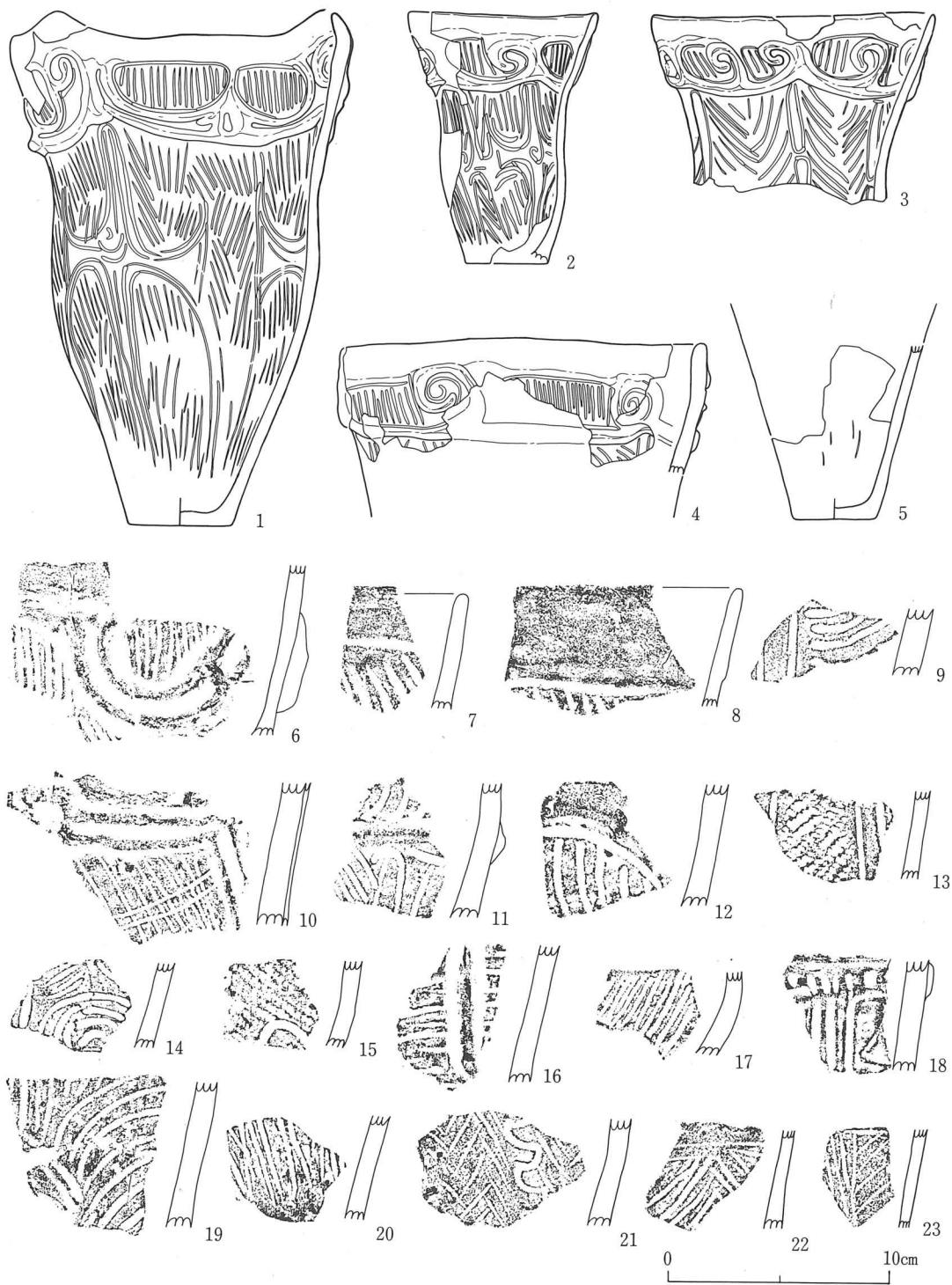
炉址は、東西80cm、南北50cm、深さ25cmを測る長方形をなしており、西側の炉石が存在していない他は、北側の炉石に乱れがあるものの比較的良好な状態であった。炉石は、鉄平石と河原石が使用され、鉄平石の方は熱により割れていた。内部には、焼土と灰が僅かに残されていた。

床面は、部分的に軟弱な箇所もあったが全般に良好で固く締っていた。炉址の東側と北側には鉄平石が敷かれており、個体土器が床面に存在している状況から全面に敷石が存在していたとは考えにくい状況であった。敷石住居址であっても部分的に敷かれていた可能性がある。

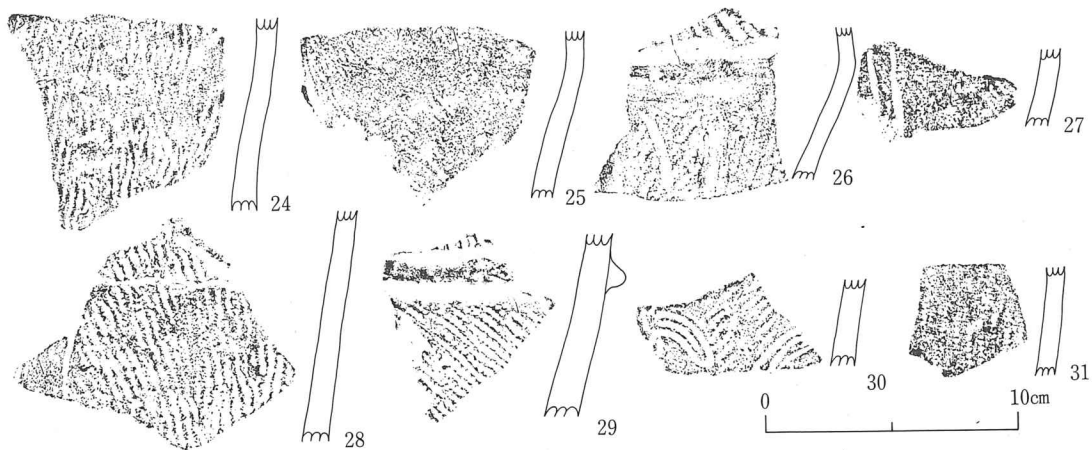
埋甕は、プランの南東部で検出された。掘り方は楕円状に掘りくぼめ、胴部下半部を打ち欠いて設置してあった。埋甕の多くは、炉址を通した主軸上に埋設する 경우가多いが、本址は主軸に



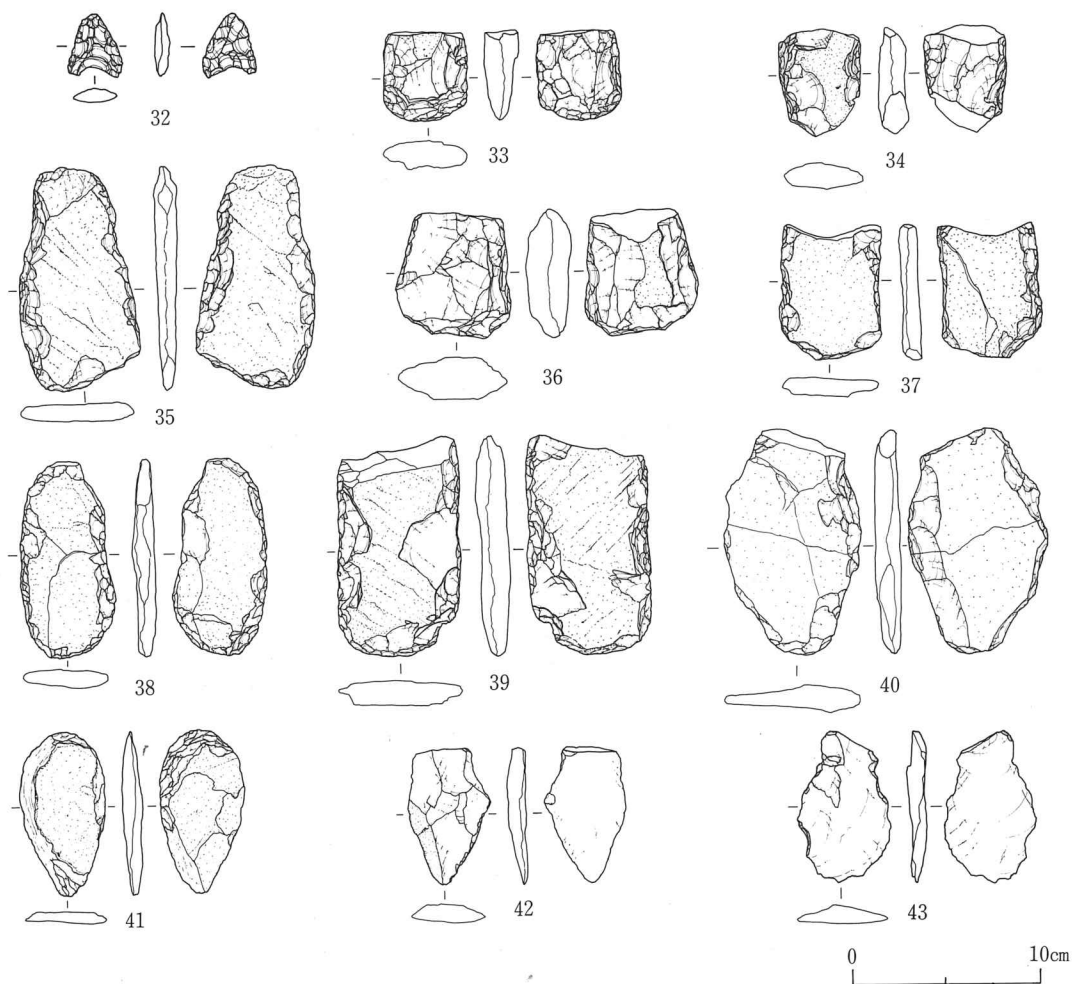
第21図 第36号住居址実測図 (1 : 60)



第22图 第36号住居址出土土器实测图 (1~5 · 1 : 6、他 1 : 3)



第23图 第36号住居址出土土器实测图 (1 : 3)



第24图 第36号住居址出土石器实测图 (32 · 1 : 2、33~43 · 1 : 4)

対して東寄りに位置しているのが特徴である。

遺物は、床面上から比較的多く出土しているが、個体資料を除く破片資料は、床面そのものの破壊はまぬがれてはいるが、壁等大部分が破壊されていることを考えれば、混入あるいは混在している可能性があり、確実に本住居址に伴うものかどうか疑問が残るものである。1は、床面直上に横たわるように存在した深鉢形土器である。口縁部直径は30cm、器高は最大46cmを測る。口縁部は、渦巻文のところは山形の波状となる波状口縁をなし、横長の楕円区画文との組み合わせによる横帯する文様帯を構成している。胴部は、沈線による区画文と綾杉状に近い沈線文が施文されている。2は、口縁部直径17cm、器高22.5cm、底径8cmを測る小型の深鉢形土器である。口縁部形態は1とは異なり平縁で、しかも口唇が内弯せず外反している。文様構成は、渦巻文と楕円区画文との構成による横帯する区画文が施文され、胴部は沈線が主体となる文様が施文されている。3は埋甕である。口縁部直径25cmを測り、1・2・4と同様の口縁部文様帯をもつ。また、胴部は、沈線により縦状に区画文が施文され、その間を綾杉状沈線が施文されている。胴部下半は打ち欠かかれていたが、疑似口縁なる二次的な磨きや加工痕はみられなかった。4は、床面の南端で出土した深鉢形土器で、口縁部を下にして床面上に伏せた状態で出土した。口縁部直径33cmを測る。横帯する口縁部文様帯が特徴の土器である。5は胴部上半部を欠く深鉢形土器で、他の土器とは異なり器面をナデをなしたような成形痕が残り、しかも無文である。第22図6～23、第23図24～31の土器は、以上示した範囲の中で特徴づけられるものである。

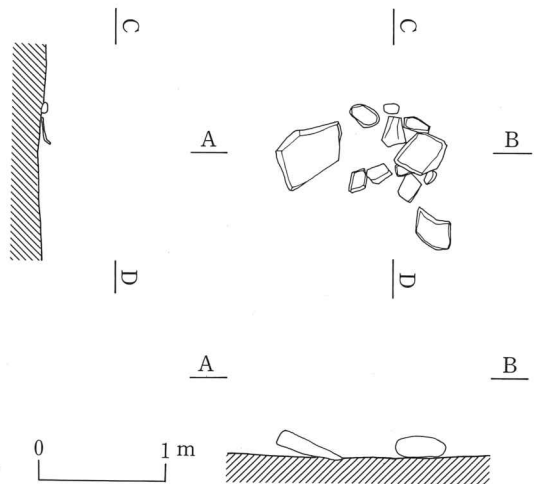
石器は、石鏃、打製石斧、スクレイパー、凹石、磨石、石棒（縁泥片岩製で、炉址コーナ部より立って出土）が出土している。

本住居址は、縄文中期後半IV期に比定されるものである。

6. 第37号住居址（第25・26図、図版14）

本住居址は、調査区南東部の隅で検出されたが、プランはすでに破壊され炉址のみが確認されたものである。かかるグリッドは、F-10・11、G、10・11であり、もしかすると調査外においては壁や床が存在している可能性はある。

確認された炉址は、床の破壊とともに影響を受けており、ほとんど原形を保っていない状態であった。炉石が抜け、あるいは熱により割れていた炉石が散乱するといった状態であった。焼



第25図 第37号住居址実測図（1：60）

土の痕跡を見ることはできたが、ほとんど存在しないに等しい。炉石は、鉄平石（安山岩）が主体をなし、他に河原石が存在した。

床面は、調査地区内においては全く確認することはできず、破壊がかなり深かったことを物語っている。

遺物は、石鏃、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、その他黒曜石のフレイクが破壊された炉址内及び周囲から出土している。これらの遺物の取り扱いも慎重を機す必要がある。破壊された炉址と入り混じるよう出土した石鏃や磨製石斧はかなり信頼のおけるものであるが、周辺から出土した資料は本住居址に含めない方がよいのかも知れない。

遺物そのものからみると、打製石斧は安山岩を石材とし、両面に自然面を残す特徴的なものである。また、磨製石斧は使い減りが激しく両端が欠損しているものである。



第26図 第37号住居址出土石器実測図（1～6・1：2、7～15・1：4）

7. 第38号住居址 (第27図、図版15)

本住居址は、調査区北東部のコーナーに近い所で検出されたが、壁がすでに破壊されて存在せず、炉址のみで確認したものである。かかるグリッドは、B-10・11、C-10・11であるが、プランの一部は北側の調査区域外へ延びており、今回の段階では確認することはできなかった。

炉址は、東西65cm、南北65cmを測り、平面形態は方形というよりはむしろ円形に近い形態をなしており小型である。炉の西側の石は、表面が扁平な山石を平坦に置いており、他の礫は縦に立てるように構築してあった。恐らく

く炉を使用するに当って主体となる位置は、この平坦な礫を置いてある場所であったように思える。深さは約20cmを測り、内部には焼土や灰は全く残されていなかった。

床面は、炉址の周囲を中心に、その周りにも所々に残っており、破壊が進んでいる住居址とはいえプランの範囲を概略推定することはできた。炉址周辺部は、砂質ロームを固くタタキを成したように締っており破壊をまぬがれていた。

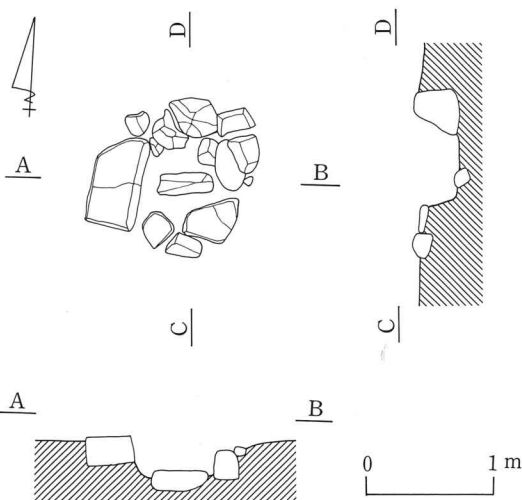
遺物は、図示できなかったが、炉址内及び床面に含まれるような状態で縄文時代後期の土器片が僅かに出土しており、本住居址に伴う資料として扱ってよいと考えている。

本住居址は、炉址の形態や小片の土器から縄文時代後期に比定されるものと考えられる。

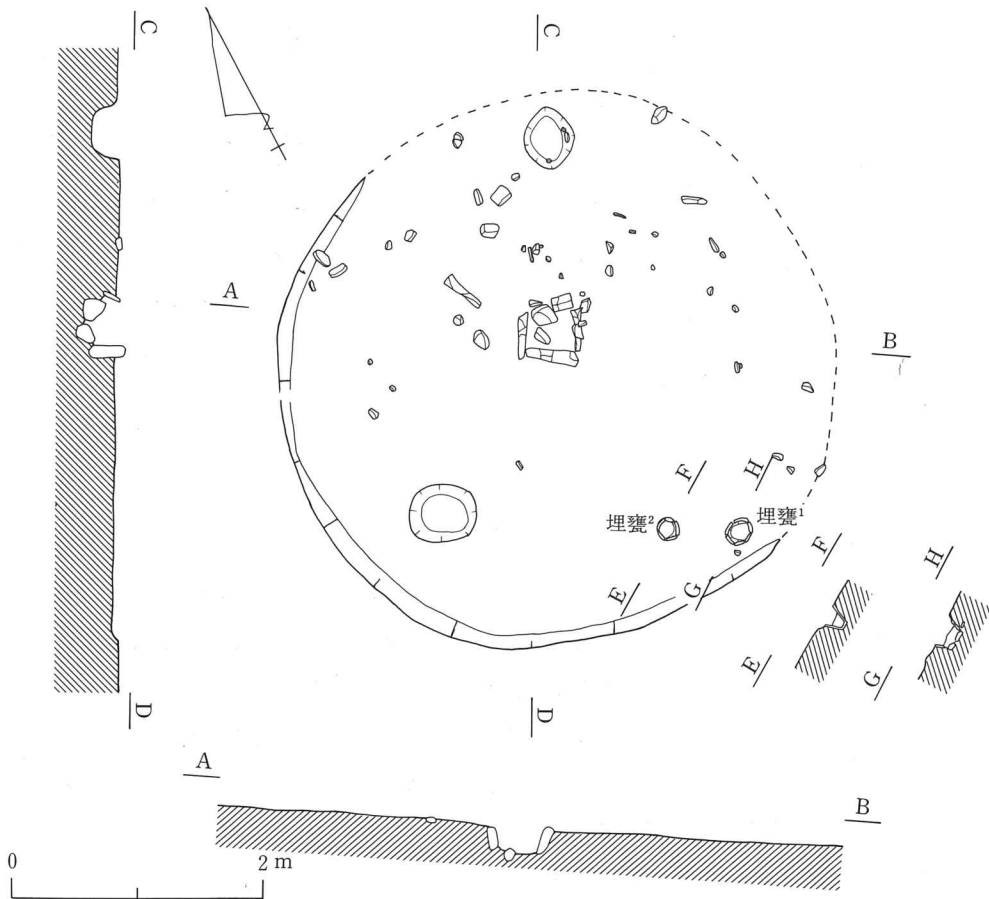
8. 第39号住居址 (第28・29・30図、図版16)

本住居址は、調査区の西寄りで検出された縄文時代中期後半の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、B-4・5、C-4・5、D-4・5である。本址は、第42号住居址と第46号住居址とに複合関係を持っており、新旧関係から第46号住居址→第42号住居址→第39号住居址の順に編年が把握されている。

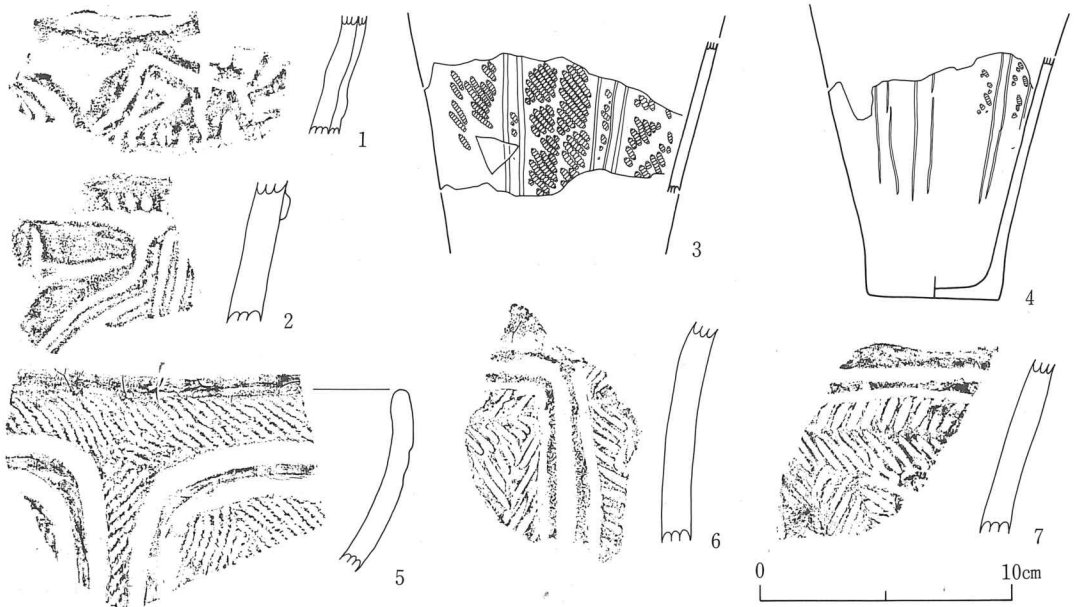
プランは、北側から東側にかけて複合関係をなしており、本址が3棟のうち最後の段階に構築しているとはいえ、壁の検出には難しいものがあつた。また、発掘調査地区は、全体に北から南に緩傾斜しており、微妙にプラン検出にも影響を与えていた。プランの規模は、正確には把握できないが、推定するところ東西450cm、南北450cmを測るほぼ正円形の形態と考えられる。壁高は、僅かに2cm程度であり、床面のつながりから判断した所もある。本来は、かなり深く作られている筈であるが、恐らくは後世に行なわれた耕作等により平面が次第に削り取られ、現状のような浅いものになってしまったものと考えられる。



第27図 第38号住居址実測図 (1:60)



第28图 第39号住居址实测图 (1 : 60)



第29图 第39号住居址出土土器实测图 (3~4·1:6、他1:3)

床面は、全体に良く締って固く、良好な状態を保っていた。また、床面に含まれる形で小礫が北側部分に存在していた。

柱穴は、北と南に2個確認された。いずれも深くしっかりしたものである。

炉址は、プランのほぼ中央に位置し、東西50cm、南北45cmで、炉石はいずれも鉄平石が使用されており、熱の影響により割れている箇所が目立つ。深さは25cmで、内部には焼土や灰は存在していなかった。

プランの南側には、2個の埋甕が検出された。第28図埋甕1は、胴部上半及び下半部ともに打ち欠き、胴部の一部のみを埋設しており、埋甕2は、胴部上半部を打ち欠き埋設してあった。尚、埋甕2の場合には、掘り方の底部に礫を敷き、その上に土器を置くという方法をとっていた。

遺物は、第29図に示す他僅かに出土したに過ぎない。3は、埋甕1に該当する資料で、地文に縄文が施文され、縦状の沈線文が描かれている。4は、埋甕2に該当するもので、僅かに残る縄文と縦状の沈線文により施文されている深鉢形土器である。1と2は混入土器とみられ、藤内式に併行する資料である。5は縄文、6・7は綾杉文を主体にした土器である。石器は、第30図に示してある他に少量の黒曜石のフレイクが出土しただけであった。1は打製石斧、2は敲石状の石器である。

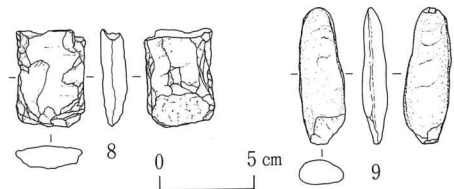
本住居址は、出土した埋甕を中心に時期設定すると、縄文時代中期後半IV期に比定されるものである。

9. 第40号住居址 (第31~33図、図版17・18)

本住居址は、調査区北東部で検出された縄文時代後期の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、C-9・10、D-9・10で、第34号住居址と複合関係を有しており、新旧関係から第34号住居址→第40号住居址の編年が明らかになっている。

プランは、東西300cm、南北370cm、壁高40cmを測り、平面形態は楕円形を呈している。住居址の確認段階では、覆土上面に拳大を平均とする大小の礫がプラン内全体に集中して入り込んでいた。石の種類は、河原石が圧倒的に多く、中には鉄平石も含まれていた。これらは、住居址の埋没後に何らかのかたちで置かれたことは明らかであるが、住居址の埋没と関連するものという可能性も含んでいることは事実である。礫の集中している中からは、縄文時代後期の土器が少量出土しており、本住居址床面出土の土器と型式差がないところから、埋没と礫との時間的経過はあまりないと考えた方がよさそうである。

住居址は、砂質黄色ローム層を掘り込んで構築しており、床面は極めて固くタタキがなされ締っている。その上面は、黒色土が薄く敷かれ、この黒色土もタタキがなされて固く締っていた。床面のほぼ中央部には僅かな焼土が存在しており、施設は存在していないが炉址ではないかとみられる。焼土は、黒色土から地山まで存在しており、黒色土の床面に伴うものと考えられる。壁



第30図 第39号住居址出土石器実測図(1:4)

はやや内側に傾斜しており、固く締って良好である。

柱穴は、南側に1個検出されているが余り深くはない。内部に河原石が1個入り込んでいた。

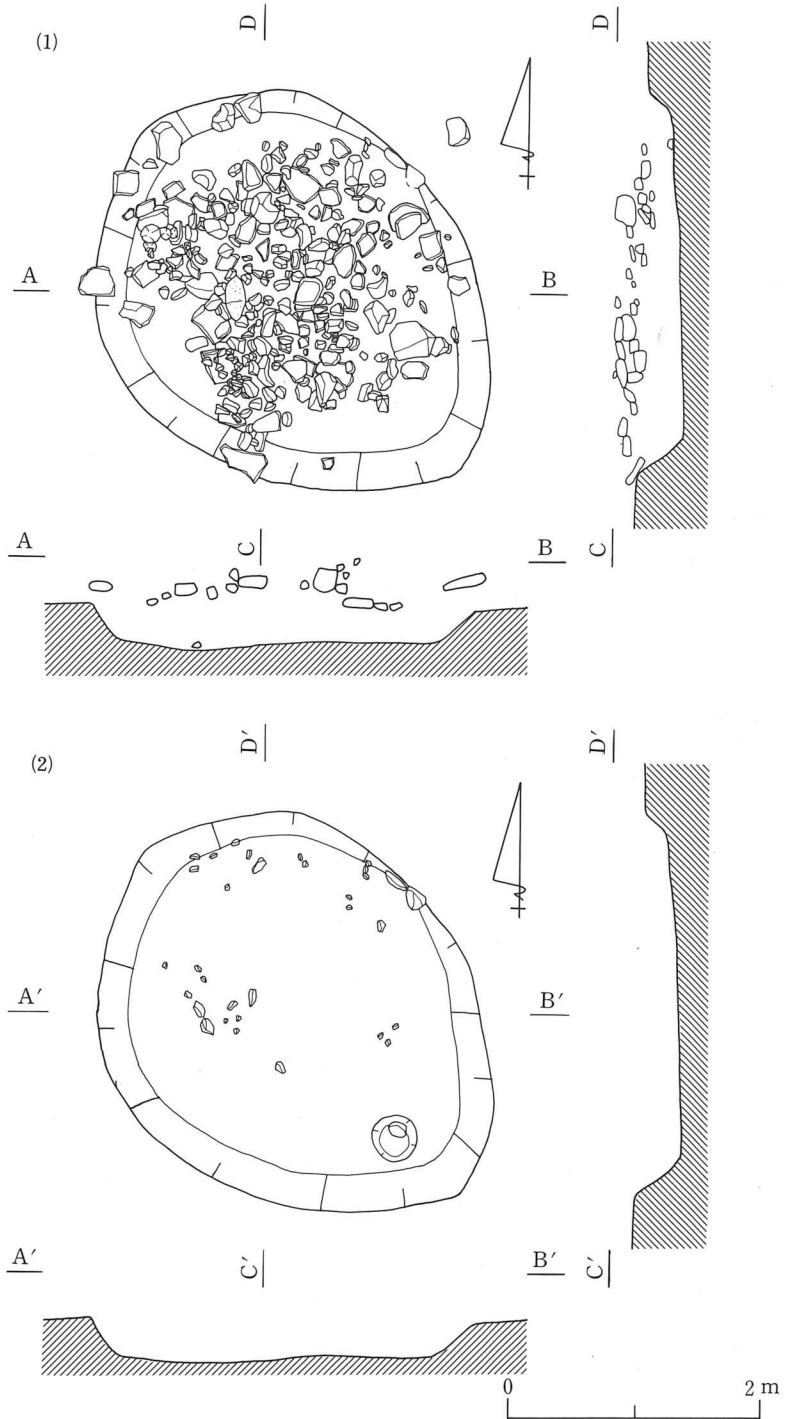
遺物は、覆土及び床面から出土しているが、地山と黒色土床面の間からも出土している。

第32図1～12は、縄文時代後期初頭の土器である。全般に厚手の粗製土器で、縄文がみられず沈線で渦巻状の文様が施文されている。

14・15は、後期前半の土器である。23～43は、後期前半II式土器である。23は、粗製の小形深鉢形土器で、口縁部直径11.5cm、高さは推定で13cmを測る。

24～43は精製土器で、黒色顕磨が行なわれている。43は、精製の注口土器の破片であり、第一次調査で実施した平石遺跡第15号住居址出土の注口土器に類例を求めることができる。

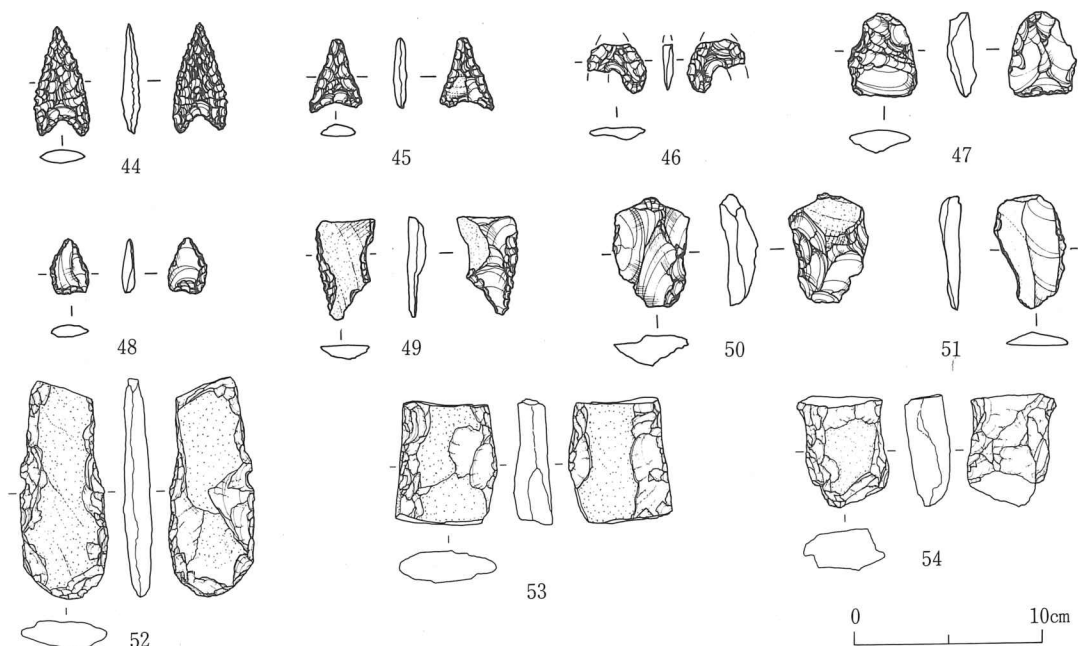
石器は、石鏃、スクレ



第31図 第40号住居址実測図 [(1)上層、(2)床面] (1 : 60)



第32图 第40号住居址出土土器实测图 (23·1:6、他1:3)



第33図 第40号住居址出土石器実測図 (44~51・1:2、52~54・1:4)

イパー、打製石斧、石皿、磨石、砥石、フレイクが出土しており、量的にはあまり多くないが良質の資量が出土している。

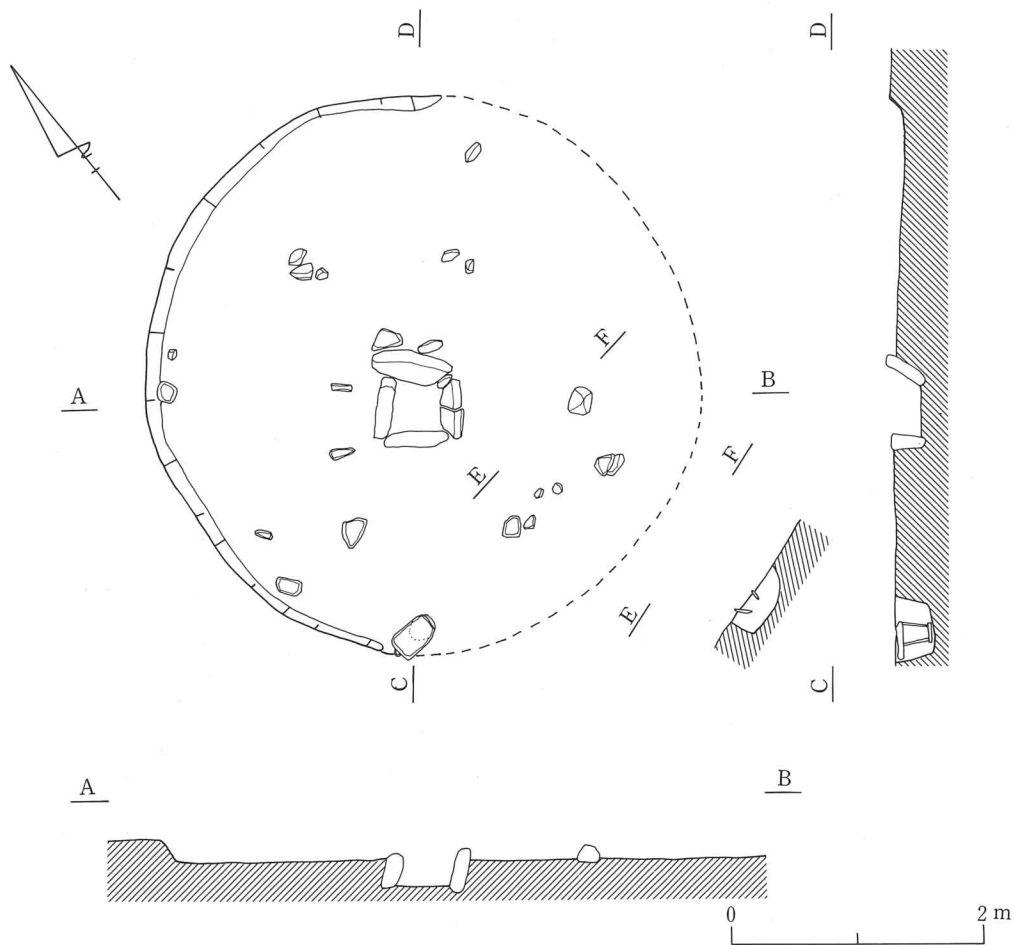
本住居址は、縄文時代後期前半までの土器が出土しており、称名寺Ⅰ式から掘之内Ⅱ式まで把握することができる。これらの中では、掘之内Ⅱ式が遺物の主体をなしているところから、本住居址の時期は、掘之内Ⅱ式期に比定することができる。

10. 第41号住居址 (第34~37図、図版19・20)

本住居址は、調査区南東部で検出された縄文時代中期後半の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、F-9・10、G-9・10である。本址は、第45号住居址と複合関係をなしており、新旧関係は第45号住居址→第41号住居址の順に編年が明らかになっている。プランの南側は、調査地区外にかかってしまっており、一部調査不能であった。また、南東部は第37号住居址から本址にかけて、比較的深い耕作が行なわれており、その一連で破壊され壁と床の一部が存在していなかった。

プランは、東西450cm、南北は推定で450cmを測り、平面形態はほぼ円形である。壁高は、場所によって差はあるが、平均15cmである。

炉址は、プランのほぼ中央部に位置しており、東西80cm、南北70cmを測り、平面形態はほぼ方形をなしている。炉石は遍平で比較的厚手の河原石が使用され、熱の作用により割れ目が生じている。炉の正面は、北東部の炉石に当る位置で、特に大きな石を使っていたり、また、この炉石



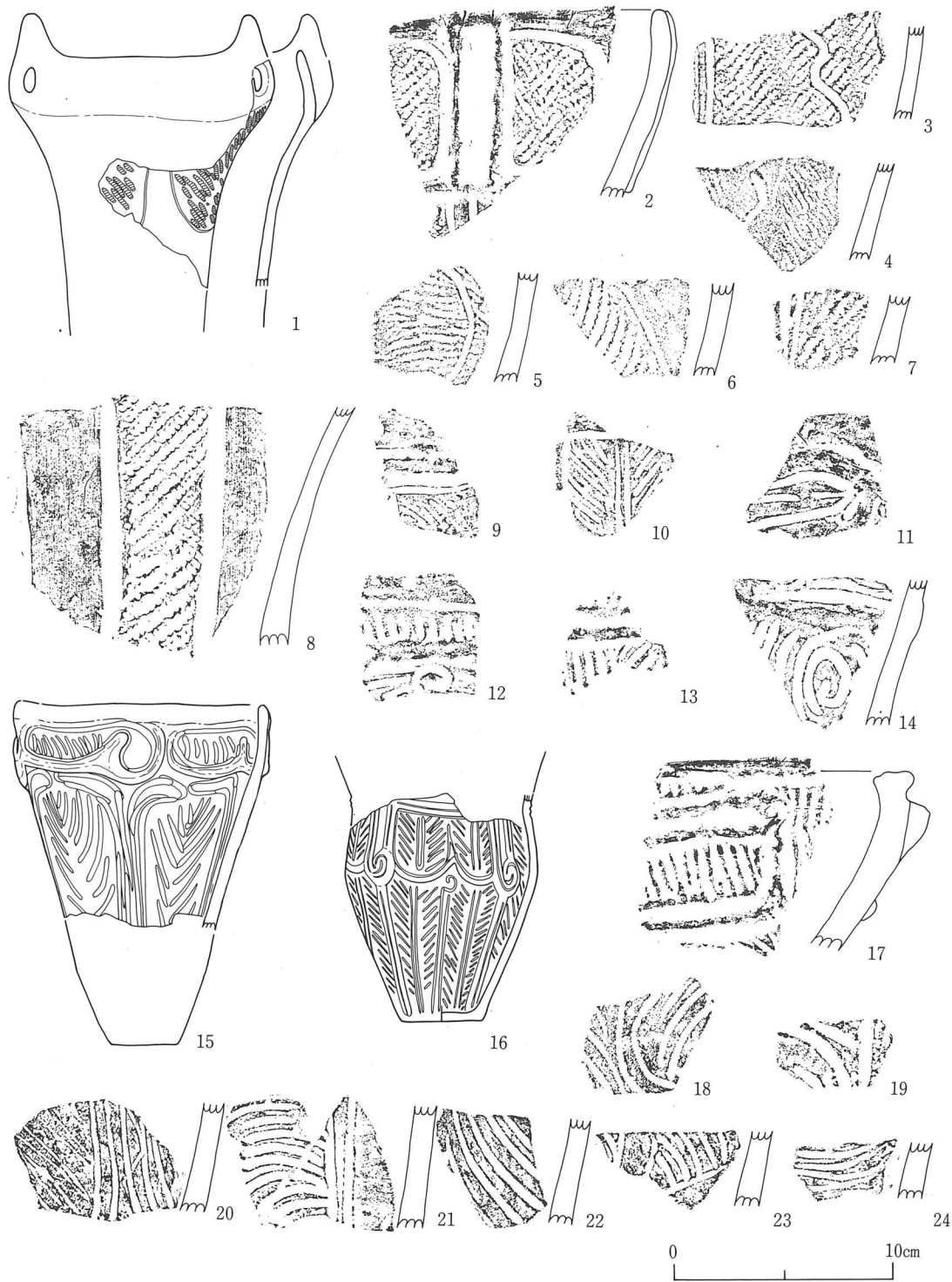
第34図 第41号住居址実測図 (1 : 60)

を通過する主軸上に埋甕が位置していることを見ても明らかである。炉址の深さは30cmとかなり深く、内部には僅かな焼土が残存していただけであった。

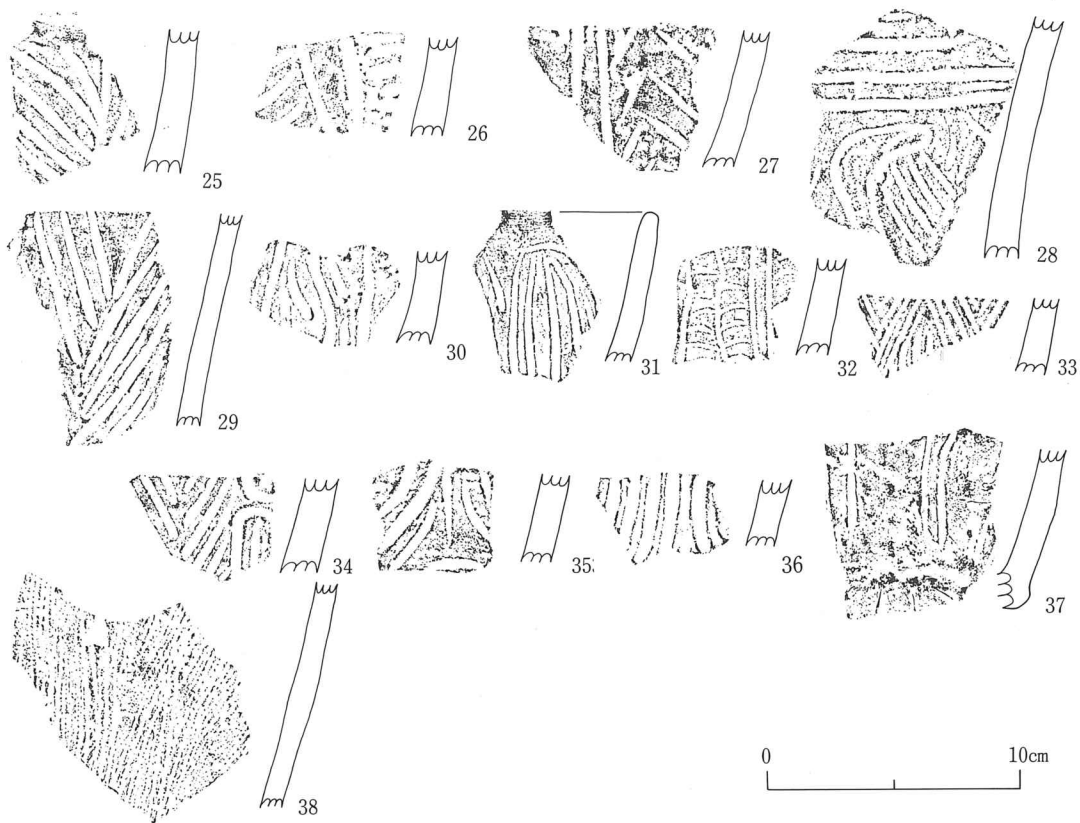
床面は、壁の破壊された付近は、同様に破壊を受けて存在しておらず、最も良好な部分は、炉址から北西部であった。全般に黒色土層中に住居址が構築されているため、床面はやや軟弱な様相であった。炉址の周囲には僅かな礫の散乱がみられた。

埋甕は、プランの主軸にあたる南端の壁際で検出された。床面を60cmの直径、深さ34cmの規模で埋り窪め、底部に扁平の深原礫を置き、そこに胴部下半部を打ち欠いた深鉢形土器を据え、掘り方に土を埋め戻し、土器に扁平の河原石で蓋をしてあった。

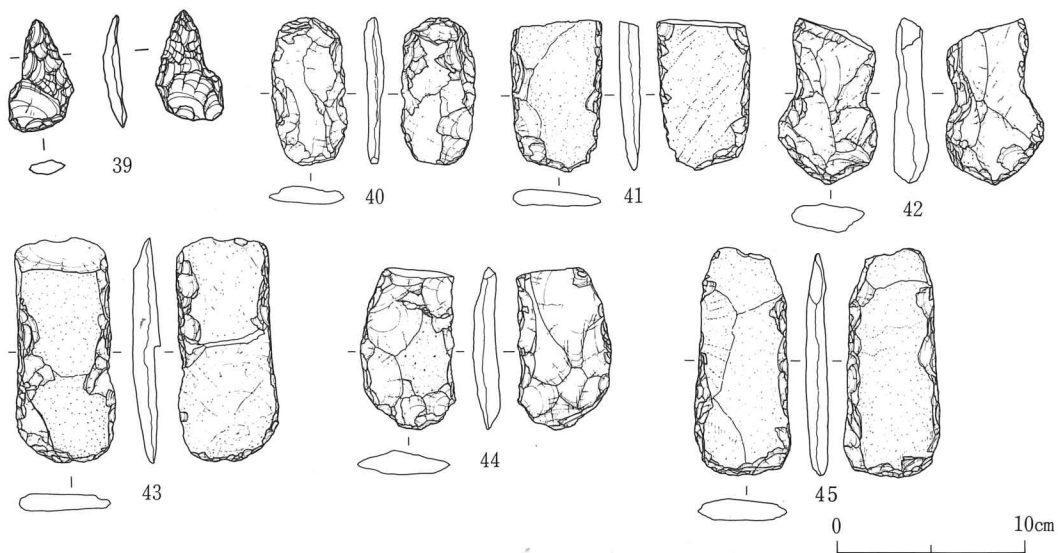
遺物は、土器、石器ともにあまり多く出土していないが、埋甕を中心に良好な土器が出土している。1は、口縁部に把手の付く深鉢形土器で、口縁部直径20cm、口縁部直下の張出部24cmを測るが、胴部下半部は欠損して不明である。沈線による区画文と磨消縄文が施文されている。15は



第35图 第41号住居址出土土器实测图 (1·15·16·1:6、他1:3)



第36图 第41号住居址出土土器实测图 (1 : 3)



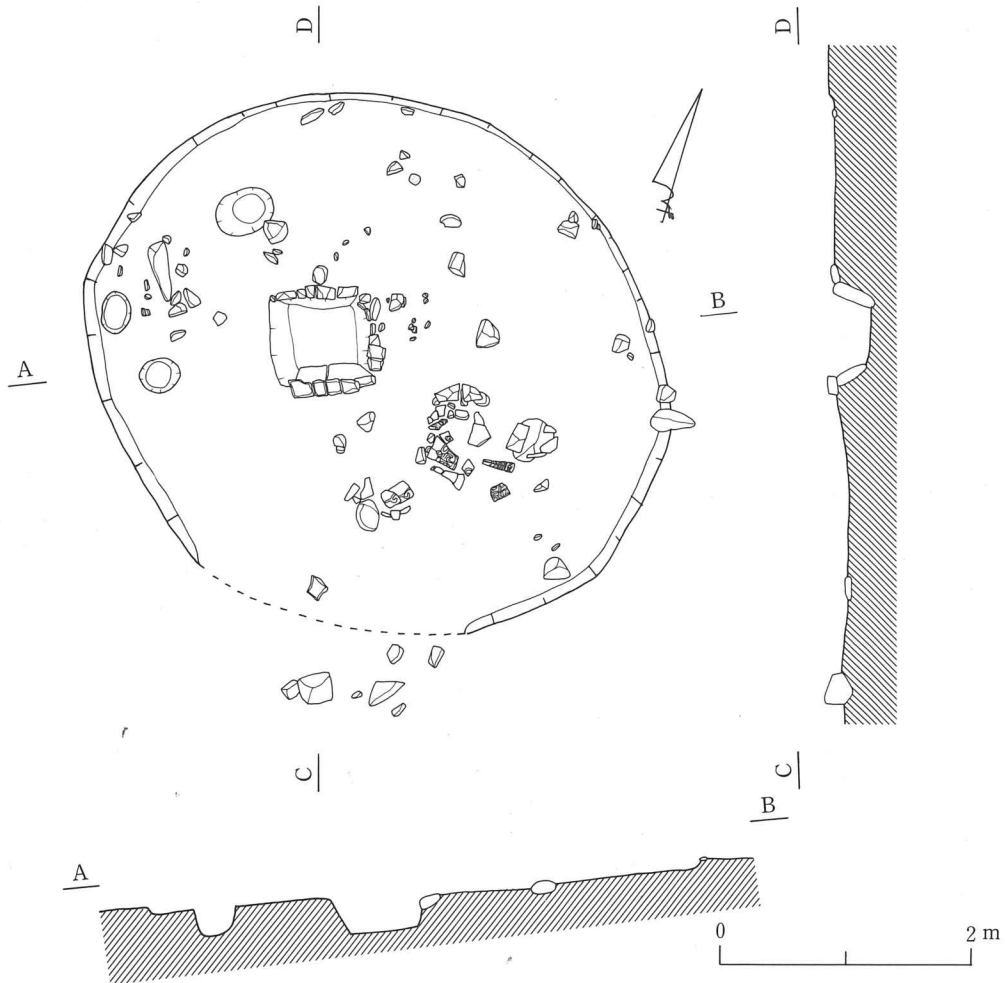
第37图 第41号住居址出土石器实测图 (39 · 1 : 2、40~45 · 1 : 4)

埋甕で、口縁部直径22cm、打ち欠いた部分までの高さ20.5cmを測る。口縁部には横帯する区画文が施文され、その下部には沈線による縦長状の区画と綾杉文が施文されている。16は、比較的小形の深鉢形土器で、頸部上半から口縁部は欠損しているが、外反する口縁をもつ土器である。唐草文を基本とする縦状の隆帯文を貼付し、その間に斜状沈線が施文されている。その他にみられる土器は、いずれも中期後半の縄文系及び唐草文系土器である。第36図38は、器面全体に条痕状の沈線が施文されている土器で、後半期の特徴的な土器である。

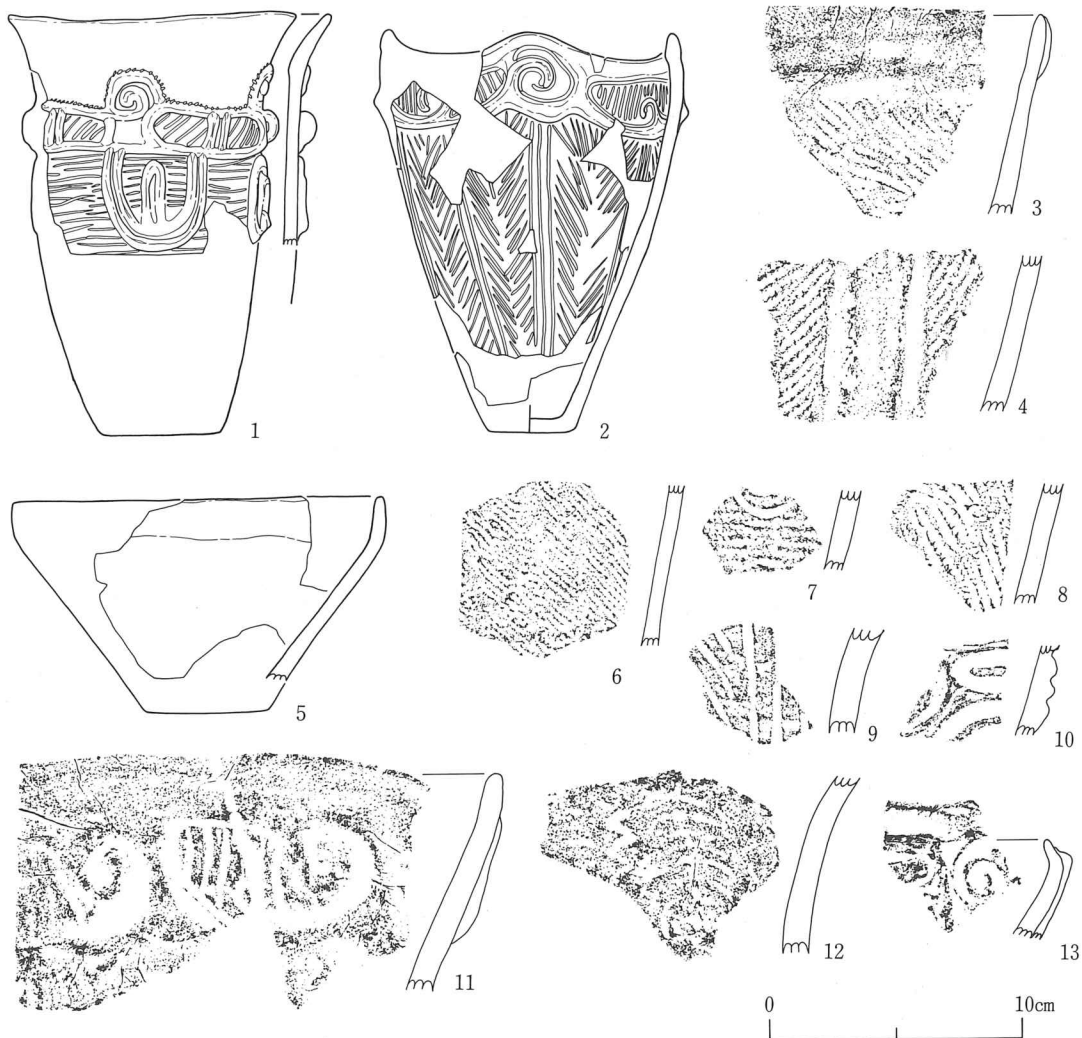
石器は、石鏃、打製石斧、凹石、磨石、フレイクが出土している。第37図39は石鏃の未製品、他は打製石斧である。42は平石遺跡では形態的に数の少ない分銅形を呈している。

本住居址は、出土した土器を中心に時期設定すると、縄文時代中期後半IV期に比定することができる。

11. 第42号住居址 (第38・39図、図版21)



第38図 第42号住居址実測図 (1 : 60)



第39図 第42号住居址出土土器実測図（1～2・5・1：6、他1：3）

本住居址は、調査区のほぼ中央部の北寄りで検出された縄文時代中期後半の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、B-5～7、C-5～7、D-6である。本址は、第39号住居址と複合関係をもっており、第42号住居址→第39号住居址の順に新旧関係の編年が明らかになっている。

プランは、東西450cm、南北430cmを測り、やや東西に長いが円形を呈している。南側の壁は微妙な地形の傾斜から、耕作の手が入ってしまったものと思われる。壁高は10cm程度であり、かなり浅いものになっている。炉址は、東西90cm、南北90cmでほぼ方形をなしていたが、西側の炉石は抜き取られて存在せず、また、他の三方の炉石は熱の作用により割れて多数に分解してしまっていた。かなり強い火力ないしは長期間使用していたと思われ、炉石を通して掘り方の土が赤く焼け、極めて固く締っていた。深さは30cm程であり、内部には僅かな焼土が残されていた。

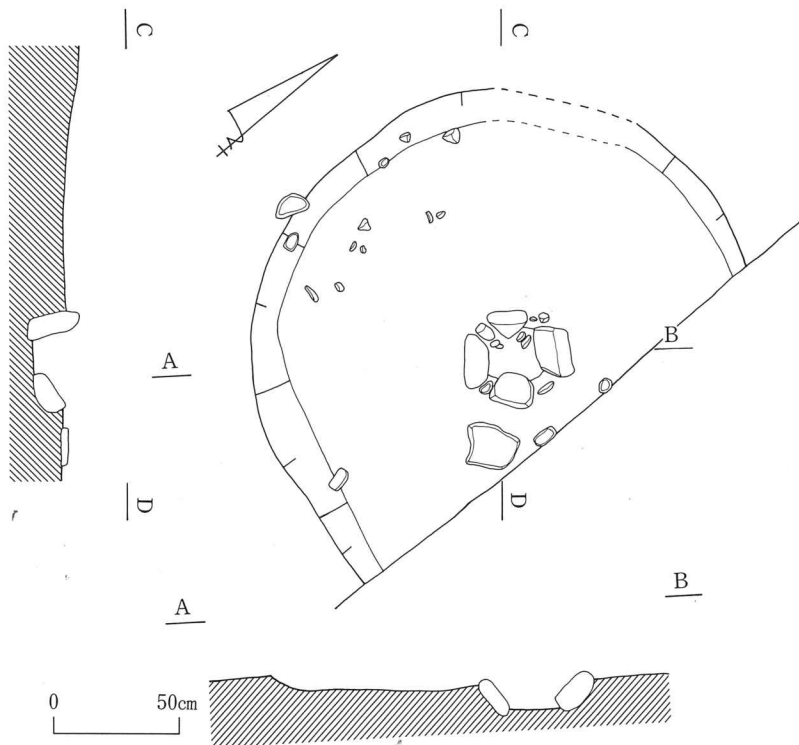
床面は、かなり破壊が進み、地山の礫があちらこちらに突出していたり、あるいは外部からの

礫の混入もみられた。柱穴は、プランの西側に3個検出されている。地山礫を掘り込んでおり、深さも比較的ある。

遺物は、器形復元が可能な土器3個とその他は破片資料が多数出土しており、石器は僅かに出土しているだけであった。第39図1は、胴部下半部を欠く資料であり、口縁部直径23cmを測る。口縁部から頸部にかけては無文で、頸部には渦巻文と横帯区画文が隆帯で描かれ、その直下はU字状の区画文と、横方向の沈線文が施文されている。2は、口縁部直径23cm、器高32cm、底径7cmを測る。口縁部は、横帯する文様帯が施文され、渦巻文の部分が山形の波状となる4サイクルの波状口縁になっている。胴部は、縦状沈線と綾杉文が全面に施文されている。5は無文の浅鉢形土器で、平石遺跡全体の中でも数少ない器形の一つである。その他の破片資料は、以上の3点の土器に集約されるものである。石器は、石鏃、凹石、磨石、スクレイパーとその他フレイクが出土している。

本住居址は、出土した土器を中心に時期設定をすれば、縄文時代中期後半IV期に比定することができる。

12. 第43号住居址 (第40・41図、図版22)



第40図 第43号住居址実測図 (1 : 60)

本住居址は、調査区の最東端で検出された縄文時代中期後半の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、D-10・11、E-10・11である。本址は、第35号住居址と複合関係をなしており、新旧関係は、第43号住居址→第35号住居址の順に編年が明らかになっている。第43号住居址は、東側半分が調査地区外になってしまっており実施することができなかった。また、第35号住居址は貼床になり、本址は、貼床の下に存在していた。

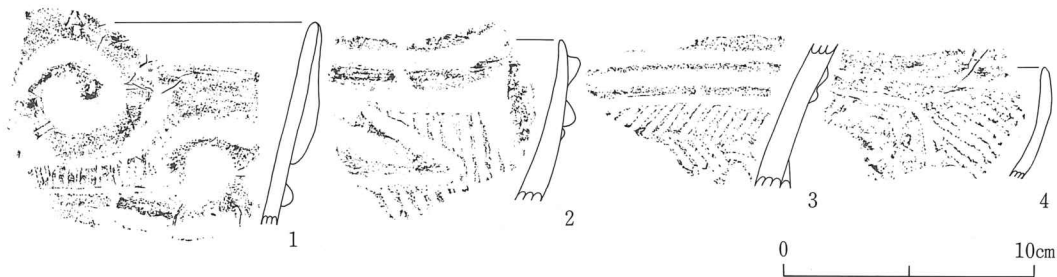
プランは、南北370cmを測るが、東西は不明である。炉址は、プランのほぼ中央部に位置し、東西80cm、南北80cmを測る。炉石はいつでも表面遍平な河原石を立ててあり、隔き間には小礫を詰めて補強してあった。深さは40cm程ありかなり深く、内部には焼土や灰は残されていなかった。

床面は、部分的に破壊がみられたが、全般に良好で固くタタキがなされたように締っていた。

壁はやや軟弱な部分や、後世による破壊がみられたが全般に良好であった。

遺物は、第41図1～4にみられるように、破片資料のほかは器形になる土器は出土しなかった。また、石器は凹石とスクレイパー、フレイクが出土している。

本住居址は、出土資料から縄文時代中期後半IV期に比定するものである。



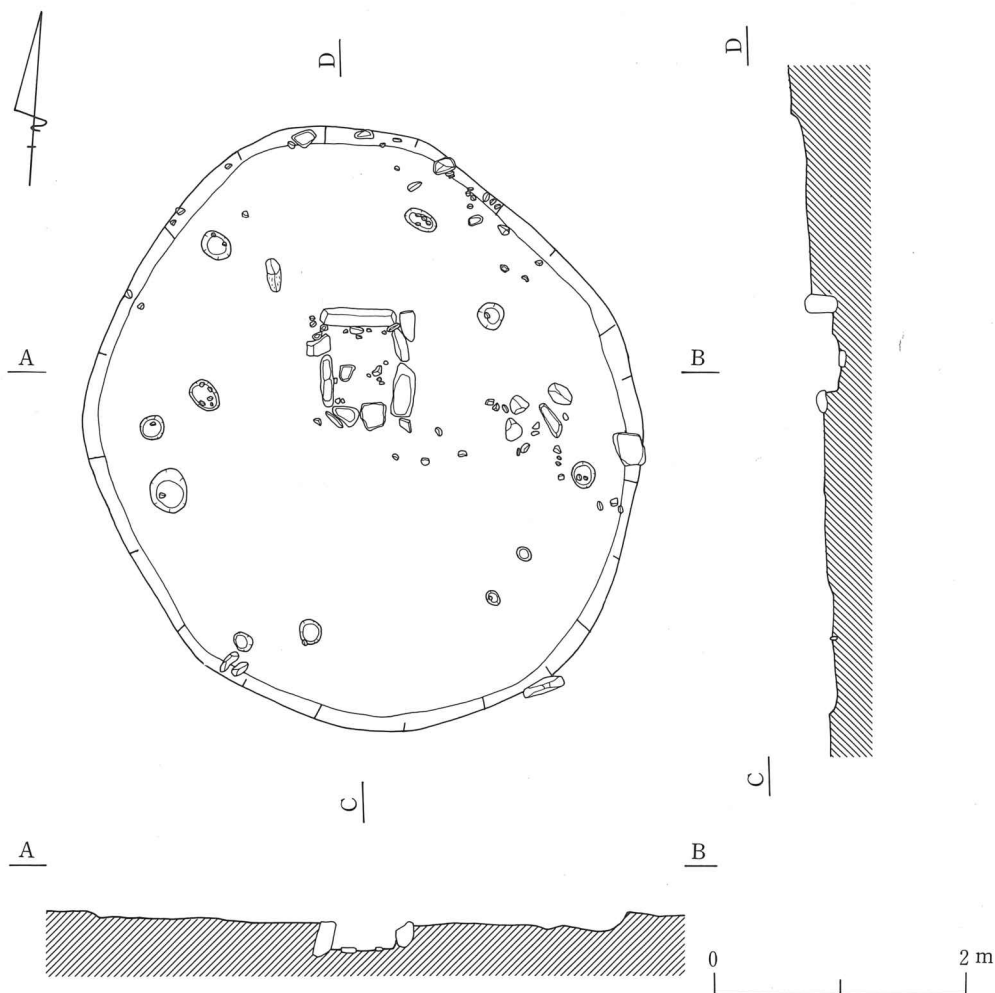
第41図 第43号住居址出土土器実測図(1:3)

13. 第44号住居址(第42～45図、図版23・24)

本住居址は、調査区の中央部で検出された縄文時代中期の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、E-7・8、F-7・8である。本址は、第33号住居址と複合関係をもっており、第44号住居址の上部に、貼床を行なって第33号住居址が存在していたために、大きな破壊はまぬがれている。従って、新旧関係は、第44号住居址→第33号住居址の順に編年が明らかになっている。

プランは、東西430cm、南北480cmを測り、南北にやや長い楕円形を呈していた。壁高は、場所によって若干異なるが10～15cmを測る。床面は、砂質黄色土上に存在し、極めて固く良好な状態であり、また、壁もあまり高くはないが固く締って良好な状態であった。

炉址は、床面の中央部よりやや北に寄った所に位置しており、東西75cm、南北100cmを測り、南北にやや長い長方形をなしており、また、規模が大きい。炉石はいつでも河原石を使用しており、中でも北側の炉石は遍平長大の整ったものを使用していた。恐らく正座として意識した上で据えているのではないと思われる。他の三方は、熱の作用により割れているものが目立つが、いつでも元は大きな河原石であったことがうかがえる。深さは20cmと浅いが、内部には比較的厚く焼土



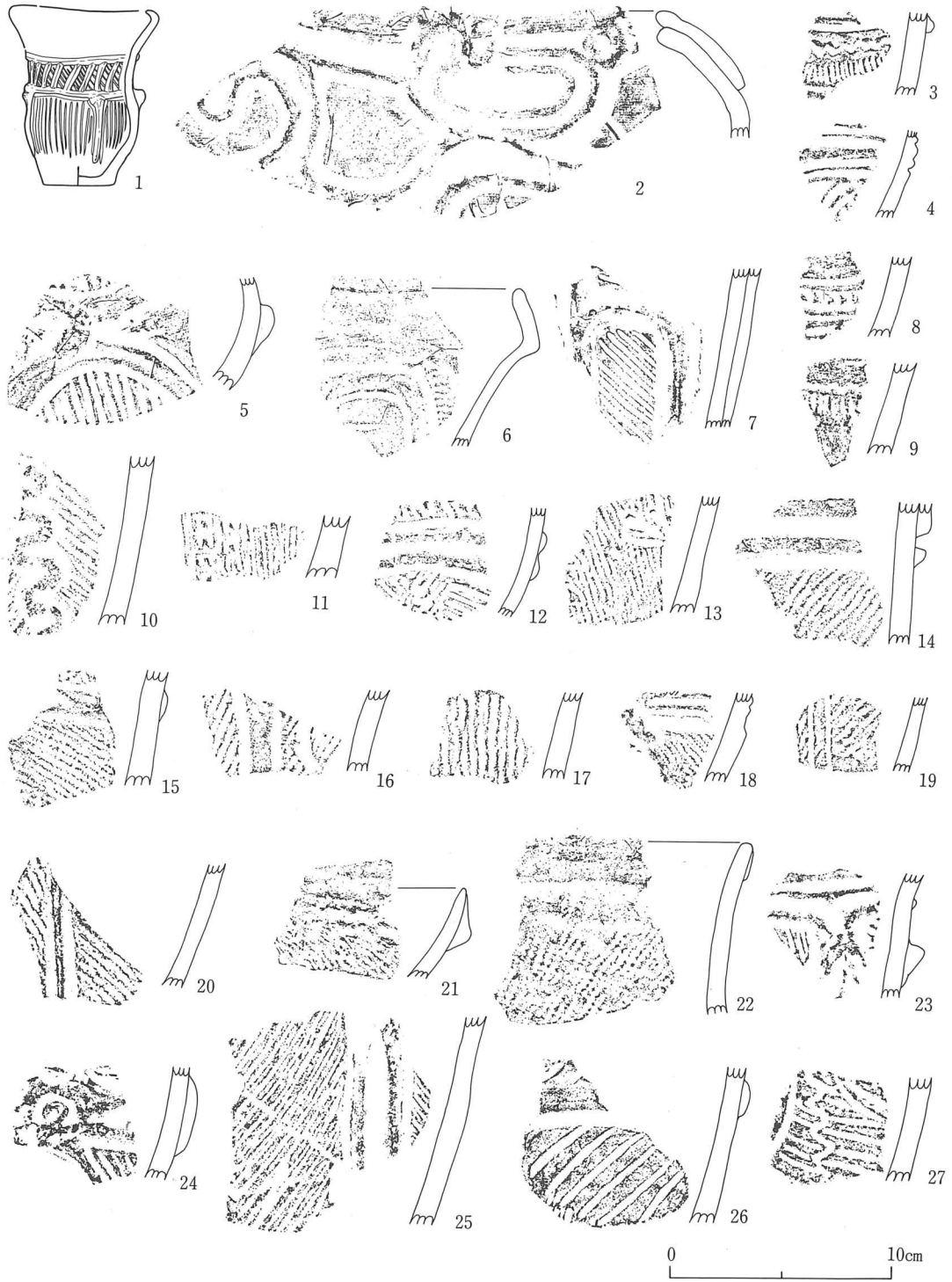
第42図 第44号住居址実測図 (1 : 60)

が堆積しており、長期間の使用を物語っている。

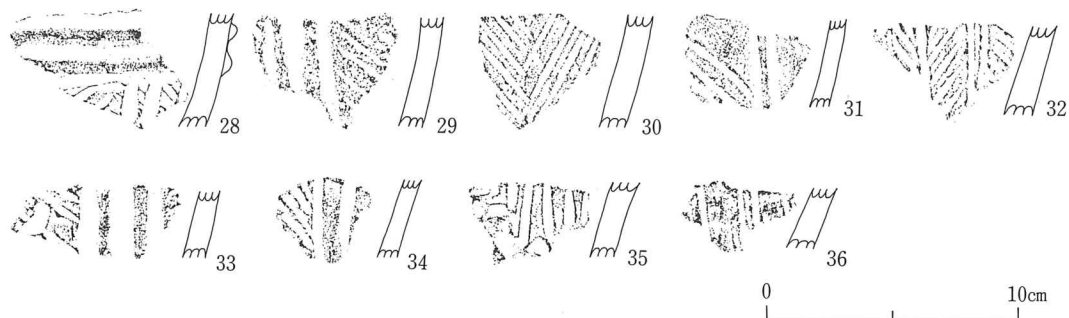
柱穴ないし柱穴と思われる穴が9個検出された。いずれも炉址を中心に、壁の内側を回っており、住居の構造に対する遺構とみられるが、規模の極めて小さいピットもあり、再考を要するものと思われる。内部に小礫が混入しているものは、柱の詰め石として理解できるものである。

床面上には、混入あるいは持ち込まれたと思われる小礫がプラン東側に集中していた。

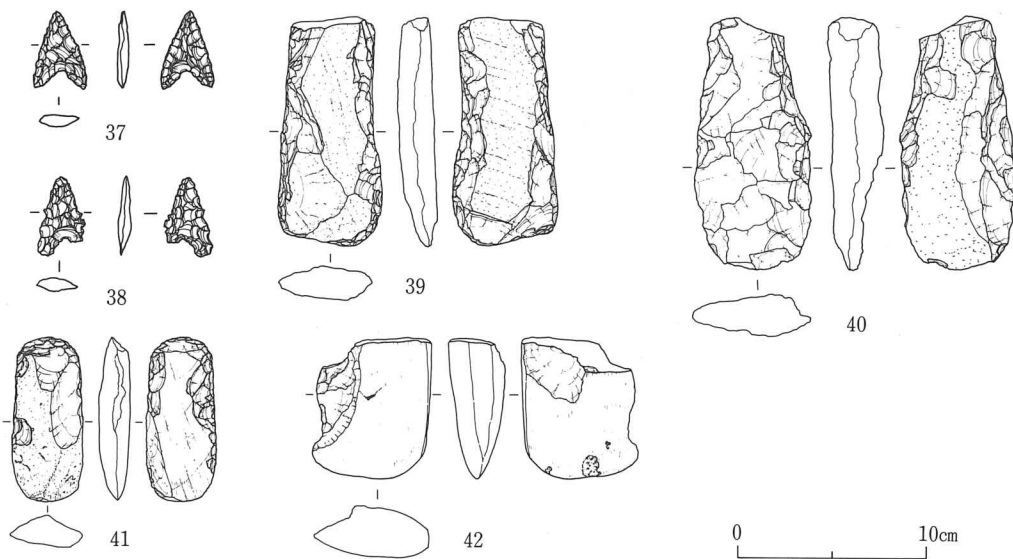
遺物は、ほぼ完形に近い土器が1点出土した他は破片資料であり、また、石器は良好な資料が出土してはいるが、少量である。第43図1は、床面の南側で出土した小型の深鉢形土器である。口縁部直径は20cm、高さ26.5cm、底径11cmを測る。口縁部は無文、頸部には隆帯で器面を一週する区画帯を作り、その間をソーメン状の文様を作り出している。また、胴部は、縦状沈線を施文



第43图 第44号住居址出土土器实测图 (1·1:6、他1:3)



第44図 第44号住居址出土土器実測図 (1 : 3)



第45図 第44号住居址出土石器実測図 (37~38・1 : 2、他1 : 4)

している。2~9は、中期中葉、10~27、第44図28~36は、中期後半の土器である。

本住居址から出土した土器は、中期前半から後葉期までの時期的にかなり幅の広い資料でありどこに焦点を合わせるのかが問題となるが、出土の状況から床面南側で出土した後半I期の小型深鉢形土器が、住居址に共伴するに最も適当な資料と判断した。他の破片資料は、住居址が浅いこともあり、混入した可能性がある。

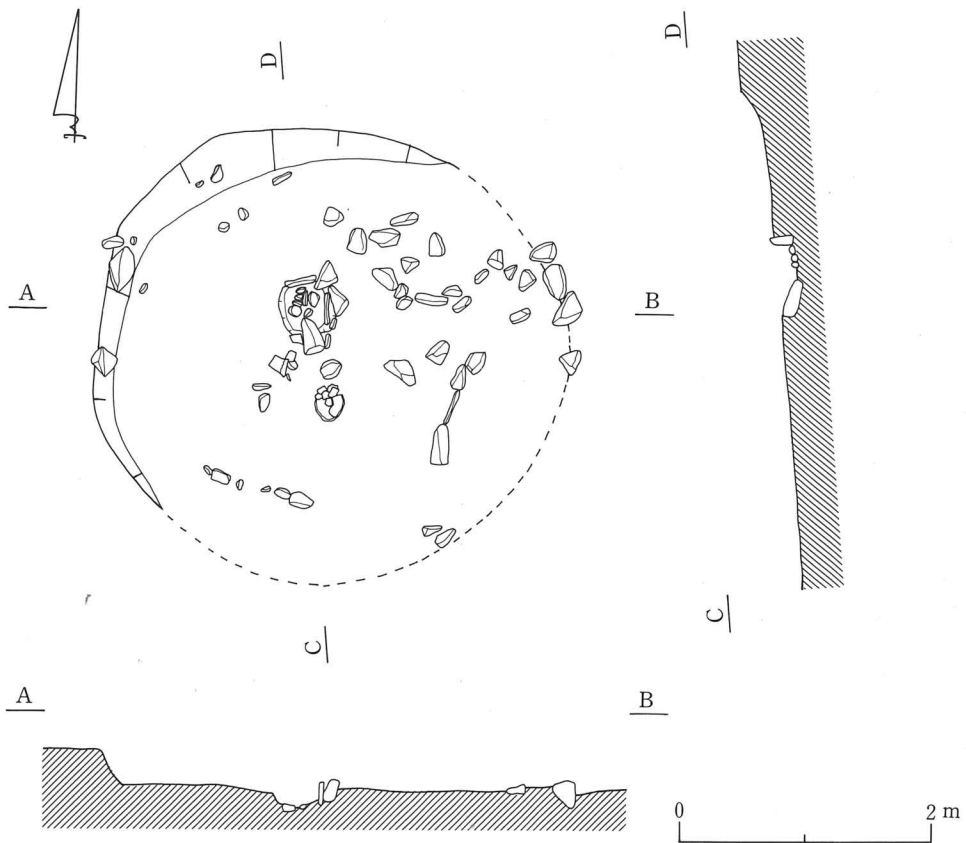
石器は、石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹石、フレイクが出土している。石鏃は黒曜石製で、37・38ともに真正で丁寧な作りである。打製石斧は、いづれも自然面を残していることが特徴であり、形態的には、40がやや揆型に近いもの、他の2点は短冊型である。42の磨製石斧は、欠損して刃部の先端のみを残すものである。

本住居址は、出土土器を規準に縄文時代中期後半I期に比定することができる。

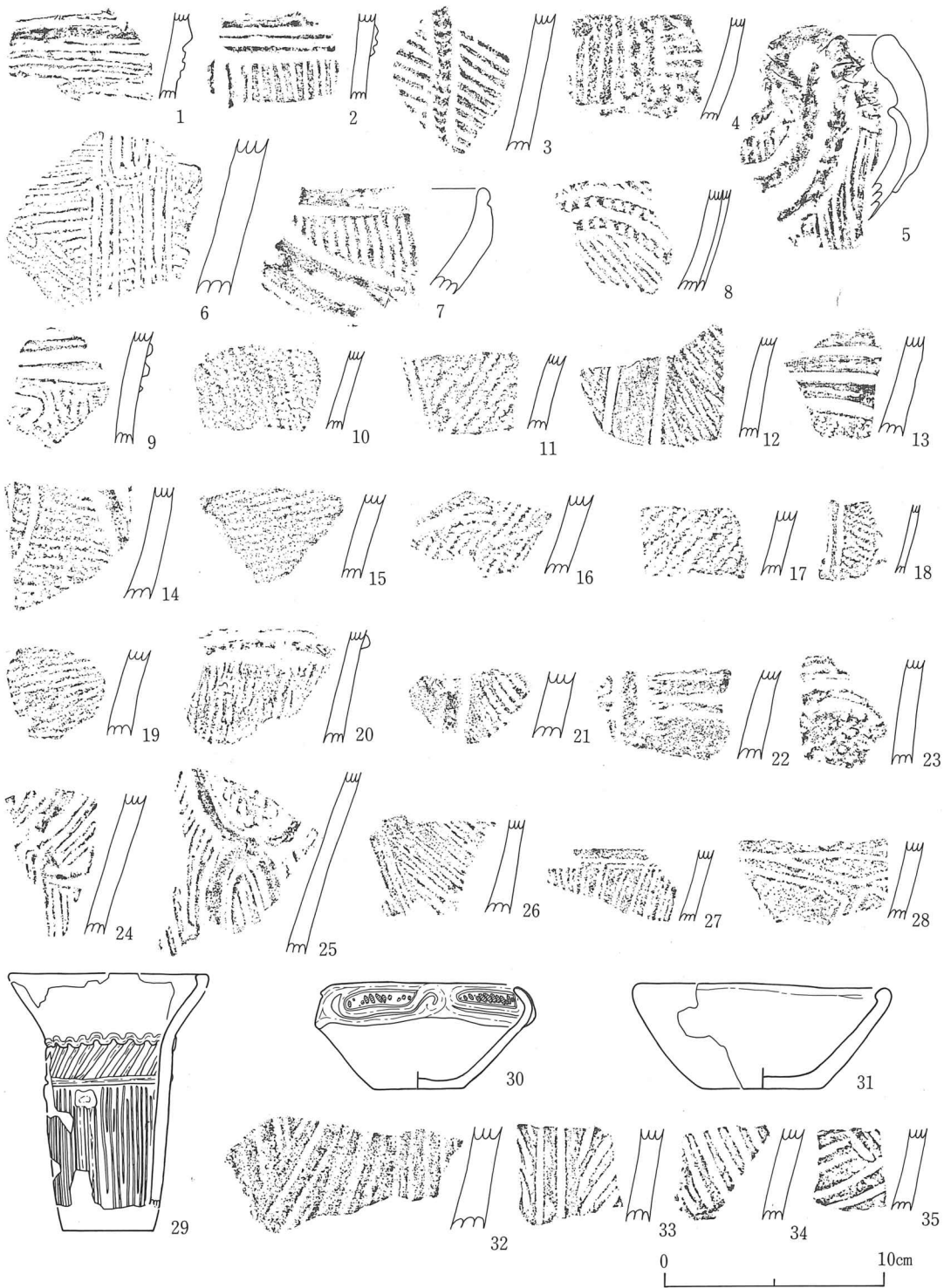
14. 第45号住居址 (第46~49図、図版25・26)

本住居址は、調査区の東側寄りで検出された縄文時代中期後半の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、E-9・10、F-9・10である。本址は、第35号住居址と第41号住居址の2棟と複合関係をなしている。第35号住居址・第41号住居址ともに第45号住居址を切って構築しており、また、出土資料からみても明らかであるが、新旧関係から第45号住居址が最も古いことが確認されている。尚、他の2棟は、中期後半IV期とほぼ同時期であるが、総合的な型式の様相から第35号住居址の方が古く位置づけることができるかも知れない。

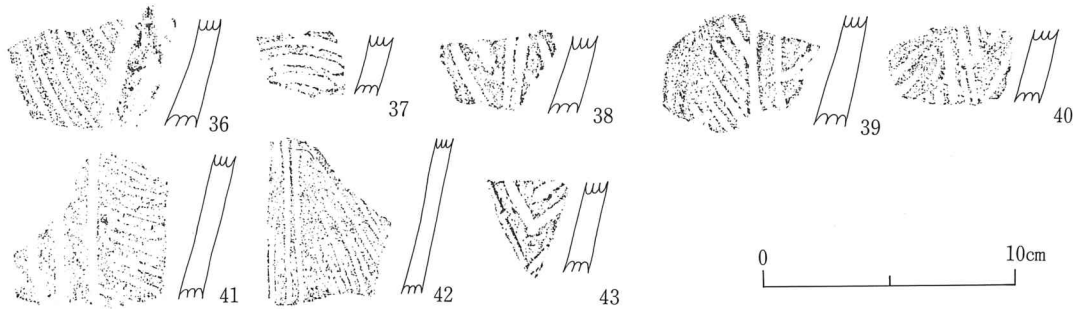
本址のプランは、東西365cm、南北370cmを測り平面形態はほぼ円形の竪穴住居址である。壁は、東側から南側が住居址の複合による切り合いや本地域を中心に特に深く行なわれた耕作等の影響ですでに破壊され存在していなかった。残存する西から北側にかけての壁は、高さ15cm程あり、礫が比較的集中する地山を掘り込んで構築しているため、壁にも大小の礫が多数突出している状態であった。床面も同様に礫の多い地点であったため、大小の礫が突出していたり、あるいは床面上に浮き上ったりしていた。従って、礫に関しては自然の礫か人為的なものかは判断できる状態ではなかった。



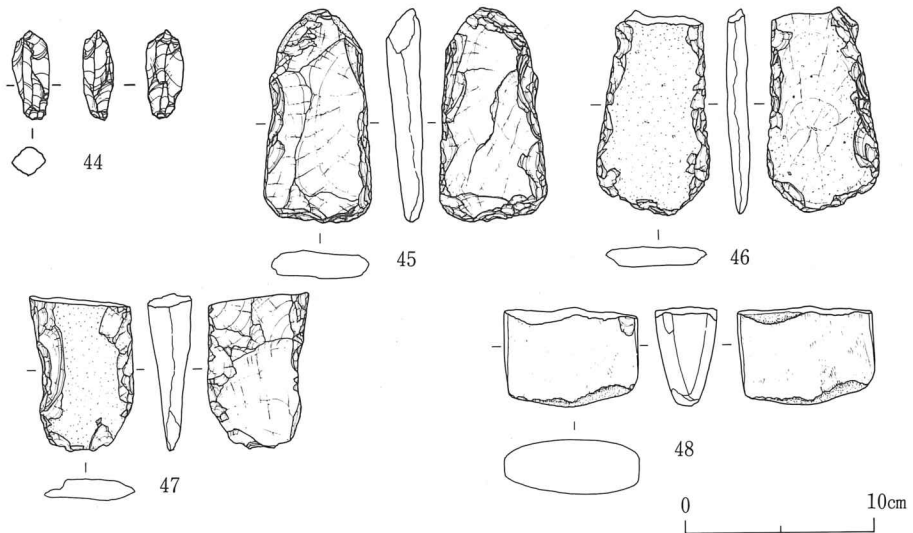
第46図 第45号住居址実測図 (1:60)



第47图 第45号住居址出土土器实测图 (29~31· 1 : 6、他 1 : 3)



第48図 第45号住居址出土土器実測図（1：3）



第49図 第45号住居址出土土器実測図（44・1：2、他1：4）

炉址は、プランの中央部よりやや北側に寄った所に位置しており、東西50cm、南北40cmを測る。炉石は、西側が抜けていたが、他の三方は存在しており、鉄平石と河原石が使用されていた。全体的にはやや破壊された感がある。深さは15cmを測るが、内部には焼土や灰は存在しておらず、後に入り込んだと思われる礫が混入していた。

遺物は、覆土及び床面から相当量出土したが、時期が一定せず混在して出土している。住居址の複合や耕作による深掘りや削平が原因しているものと思われる。これらの中で、29～31は器形復元が可能であった土器である。しかし、これらは床面から出土しているが時期が異なっており、どの時期を主体に把握したらよいか問題になるところである。29は、中期後半Ⅰ期の土器で、口縁部は無文で、頸部には横帯する文様帯、胴部には縦状の沈線が施文されている。第44号住居址床面出土土器（第43図1）と類似するものである。30は、中期後半Ⅲ～Ⅳ期の浅鉢形土器で、口縁部直径17cm、高さ10cm、底径8cmを測る。口縁部には、横帯する楕円区画文が施文され、そこ

から下部は無文である。31は、口縁部直径23cm、器高10cm、底径11cmを測り、無文である。1～28は、中期初頭～前半の土器、32～35、第48図36～43は、中期後半IV期の土器である。

石器は、両極石器、打製石斧、磨製石斧、磨石、フレイクが出土しているが、量的にあまり多くは出土していない。

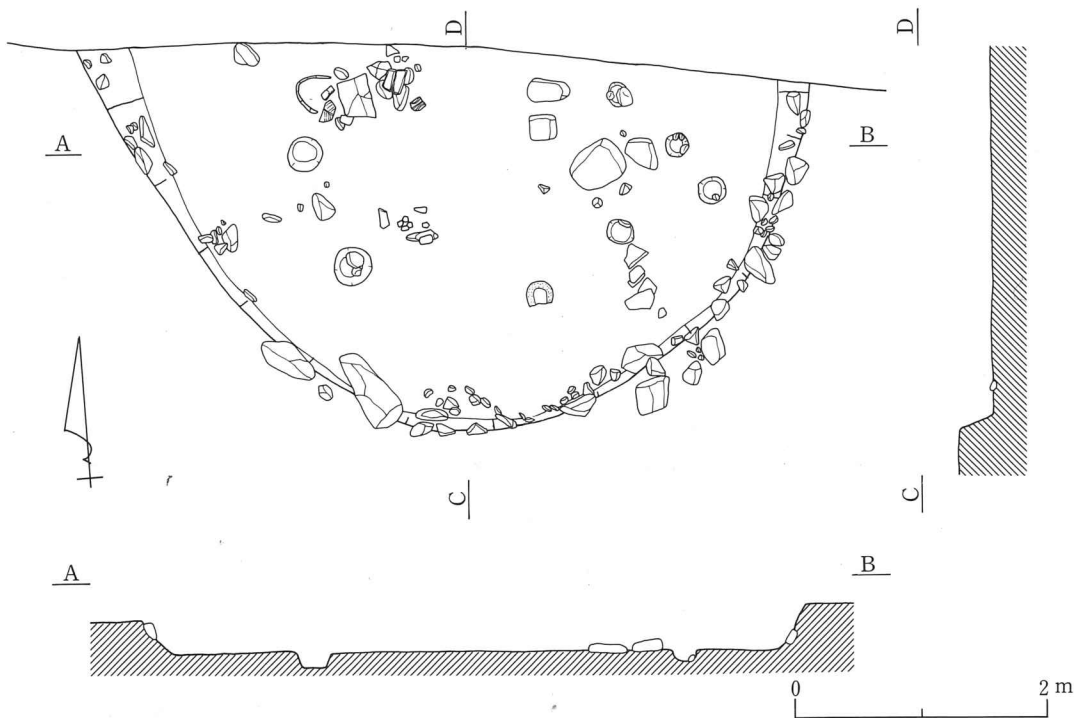
本住居址の時期は、床面から出土した器形土器29・30・31が目安となりうると考えられるが、時期に差がありこれだけでは不可能と言わざるを得ない。また、破片資料も時期差が大きく、設定には困難と言わざるを得ない。以上の状況から、中期後半期の住居址と解かる以外は時期設定はできない。

15. 第46号住居址 (第50～54図、図版27～29)

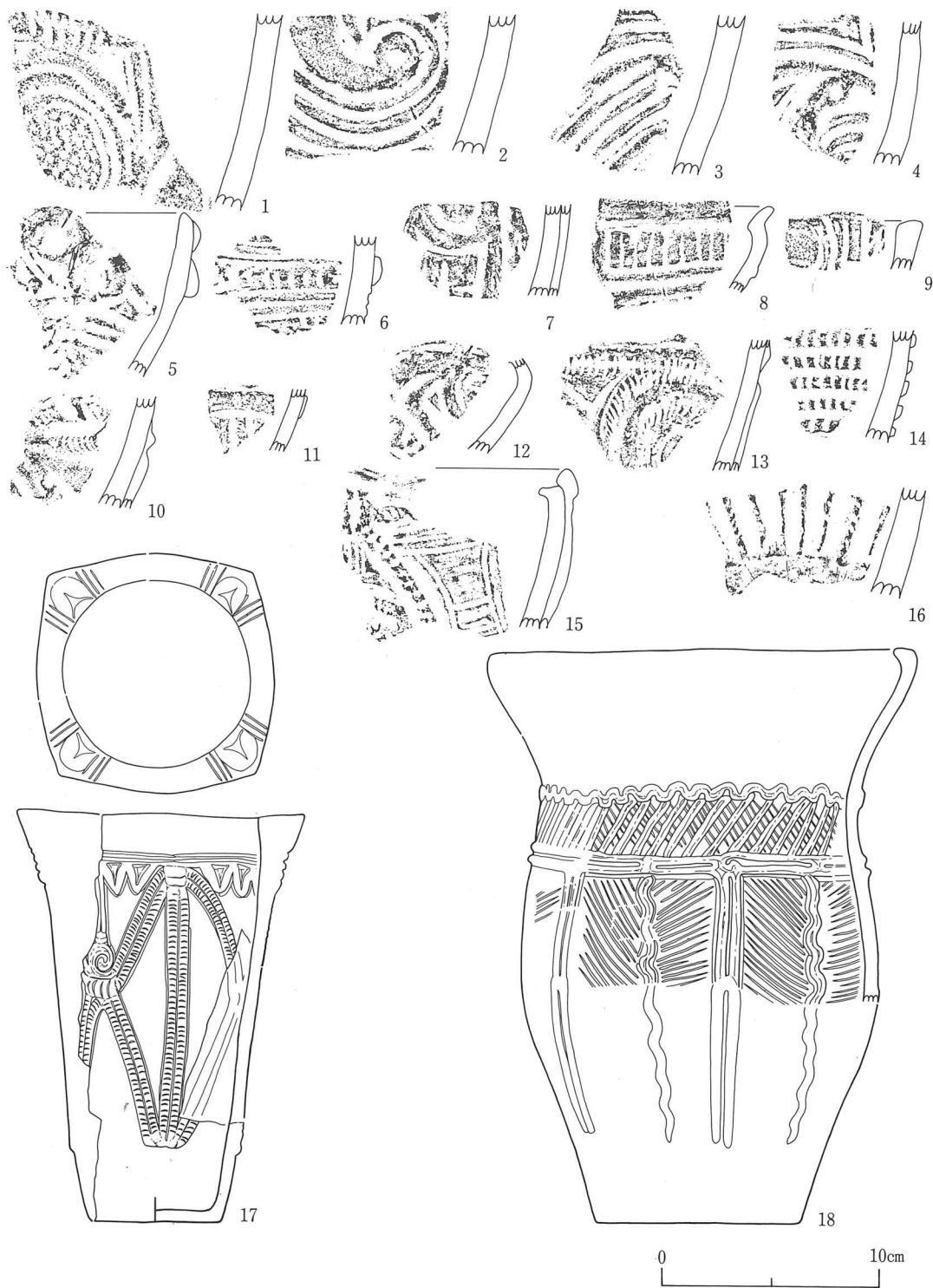
本住居址は、調査区北西で検出された縄文時代中期後半の住居址である。かかるグリッドは、A-4～6、B-4～6である。本址の北側半分は、調査地区外にかかってしまっており検出することができなかった。また、第39号住居址に、本址の南側の一部が切られるかたちで複合関係をもっており、新旧関係は第46号住居址→第39号住居址の編年が明らかになっている。

プランは、東西580cmを測るが、形態からみとると西側の壁がやや外側に張出す様相がみられ、正円形というよりは、楕円形に近いプランになるのではないかと推定される。

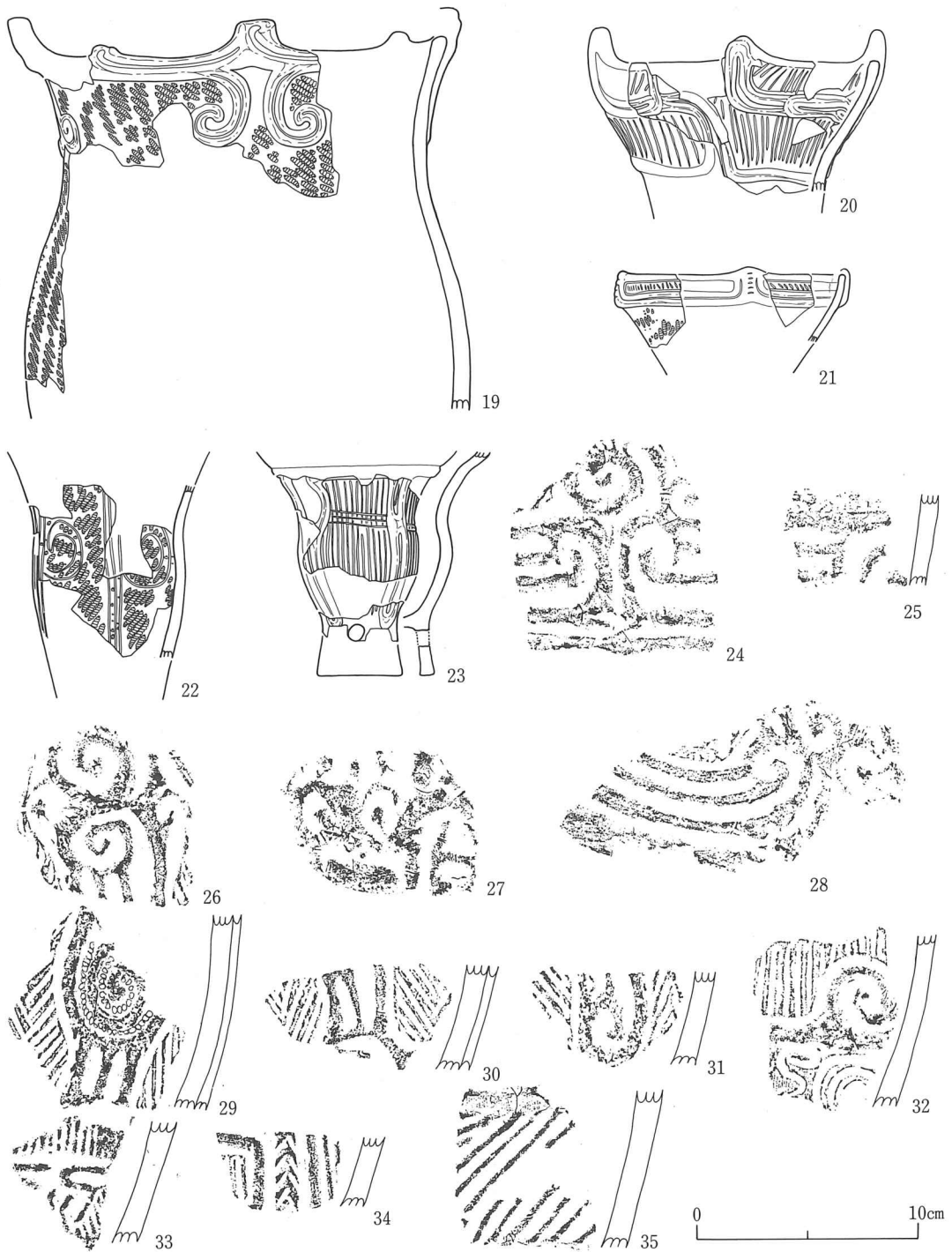
住居址そのものが、礫の多い地点に構築されているため、床面は自然礫が突出していたり、固



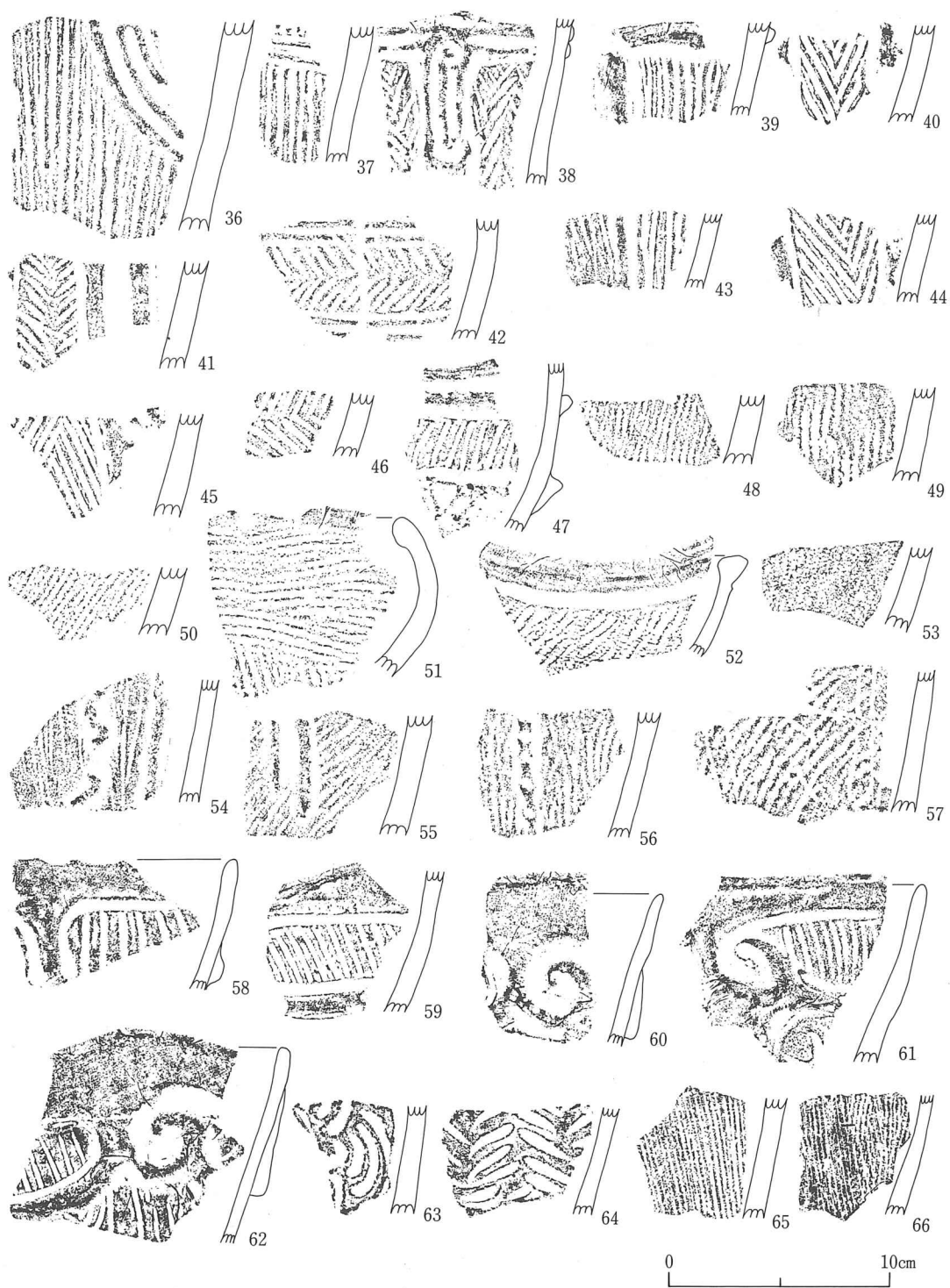
第50図 第46号住居址実測図 (1:60)



第51图 第46号住居址出土土器实测图 (17~18·1:6、他1:3)



第52図 第46号住居址出土土器実測図 (19~23・1 : 6、他1 : 3)



第53图 第46号住居址出土土器实测图 (1 : 3)



第54图 第46号住居址出土石器实测图 (67~77· 1 : 2、他 1 : 4)

く締まっている部分もほとんどなく、あまり良好な状態ではなかった。また、床面上に存在していた礫も、自然礫かあるいは持ち込まれた礫かの区別をつけることは困難な状態にあった。壁高は、東側程深かったが、20~40cmを測り、平石遺跡の中にあっては、比較的深い掘り込みをもっているものである。壁も床面と同様に大小の礫が多数突出している状態であり、壁そのものを決定するに困難な状況を作り出していた。

炉址は、調査地区外に存在していると思われ、検出できなかった。

遺物は、中期前半~後半までの土器が出土しており、混入資料が目立つが、器形復元ができた床面出土の土器が本址の時期を設定する資料となりうるものであると思われる。第51図17は、中期後半I期の土器で、口縁部直径26cm、器高37.5cm、底径12cmを測る。口縁部の外径は方形、内径は円形に作られており、口唇は水平で、三叉文と沈線によりコーナー部に施文されている。口縁直下は無文帯があり、その下部には二条の横帯する沈線が施文され、そこから半截竹管文の押引が施文された比較的太い隆帯が区画文状に貼付されている。隆帯の交錯する部分には渦巻文もみられる。地文には何も施文されていない。器厚は、口縁部で4.3cm、胴部の平均値で1.2~1.5cmを測る。18は、口縁部が外反する大型の深鉢形土器で、口縁部直径35cm、器高は推定で50~55cmである。外反した口縁部の口唇は、内側に突き出すようになっており、ここからくびれながら頸部に至っている。頸部には、波状に隆帯が貼付され、ソーメン状の貼付文が巡っている。胴部にかけては区画文と綾杉状沈線文が施文されている。第52図19は、口縁部にアクセントのある深鉢形土器で、胴部が大きく張り出す器形である。地文に縄文が施文されている。20は、19と同様口縁部に塔形の把手が付く深鉢形土器で、胴部は欠損している。口縁部の把手から連なる隆帯が、横帯する区画文を作り、内側に縦状の沈線が施文されている。21は、口縁部直径20cmを測る浅鉢形土器であり、口縁部に横帯区画文が施文され、胴部には縄文が描かれている。22は、口縁部の外反する深鉢形土器で、地文に縄文が施文され、その上に縦状の沈線と渦巻文が施文されている。23は、台付土器で、器台部に対称的に2個の孔があげられている。胴部には沈線文が描かれている。第51図1~16は、中期前半の土器、第52図24~35、第53図36~66は中期後半の土器である。

石器は、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、両極石器、石皿、凹石、軽石製ペンダント、磨石、打製石斧、磨製石斧、フレイクが出土している。石錐は、平石遺跡全般を通じて多く出土しているが、本住居址は特に出土量が多かった。柄部が長く刃部が短いもの、柄部が短く刃部が長いものなど形態はさまざまであるが、刃部先端が欠損しているものが多い。石匙は数少ない石器の一つである。黒曜石製は縦長に作られ、自然面が目立つ。打製石斧は安山岩製が多く、中には自然面を残すものもある。形態はいずれも短冊型と揆型の間中型式が多い。磨製石斧は2点出土しており、いずれも刃部が多少欠損しているだけで保存状態がよい。その他は図示しなかったが、黒曜石製のペンダントや石皿など良好な資料が多数出土している。

本住居址は、多数の出土遺物があったが、床面出土の器形復元できた土器を基準に時期設定をすると、縄文時代中期後半I期の住居址に比定することができる。

16. 第47号住居址 (第55~56図、図版30)

本住居址は、調査区の南端で、中央部よりやや西側で検出された縄文時代後期前半の円形竪穴住居址である。かかるグリッドは、F-4~6、G-4~6である。本址は、南側半分が調査地区外になってしまっており、また、第48号住居址と複合関係をもっていた。本住居址は、第48号住居址の廃棄の後、張り床を行なって構築されており、第48号住居址→第47号住居址の順に編年が明らかになっている。

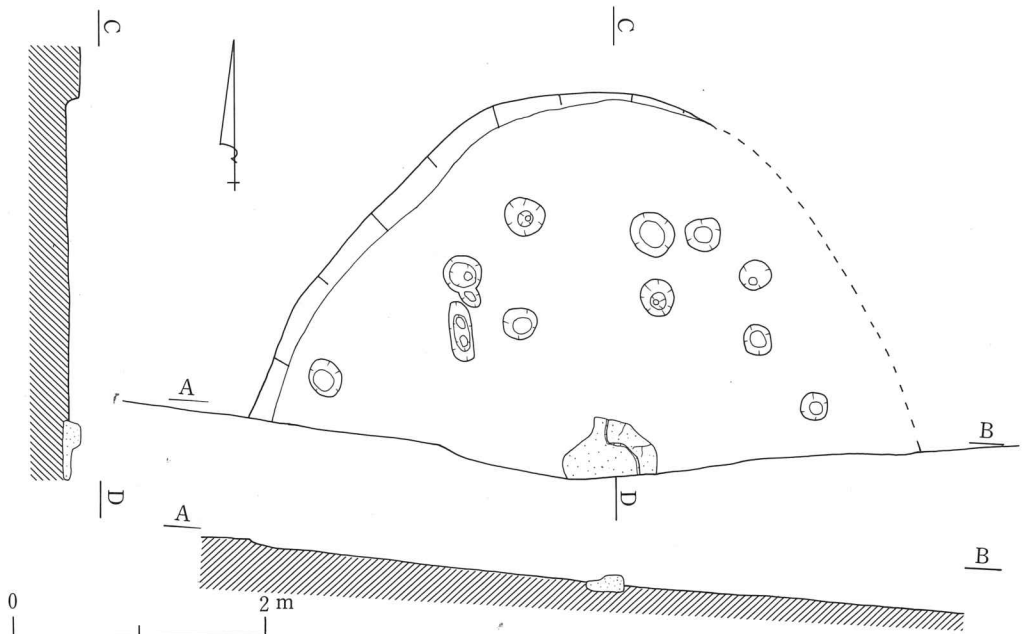
プランは、東側部分も壁がすでに存在しておらず推定の域を出ないが、床面の状況から、東西500cm程度ではないかと思われる。床面は、砂質黄色ロームを掘り込んでいたが、やや軟弱さが目立った。西側には部分的に固く締まっているところもあったが、東側程軟弱になる傾向があった。壁は西側にのみ存在しており、高さ10cm程度となっていた。

炉址は、調査地区外にかけて存在しており、東西72cmを測る。炉石は全く使用されておらず、いわゆる地焼炉の形態を示している。僅かに床面がくぼんでいる程度であり、ここに焼土が比較的多く存在していた。

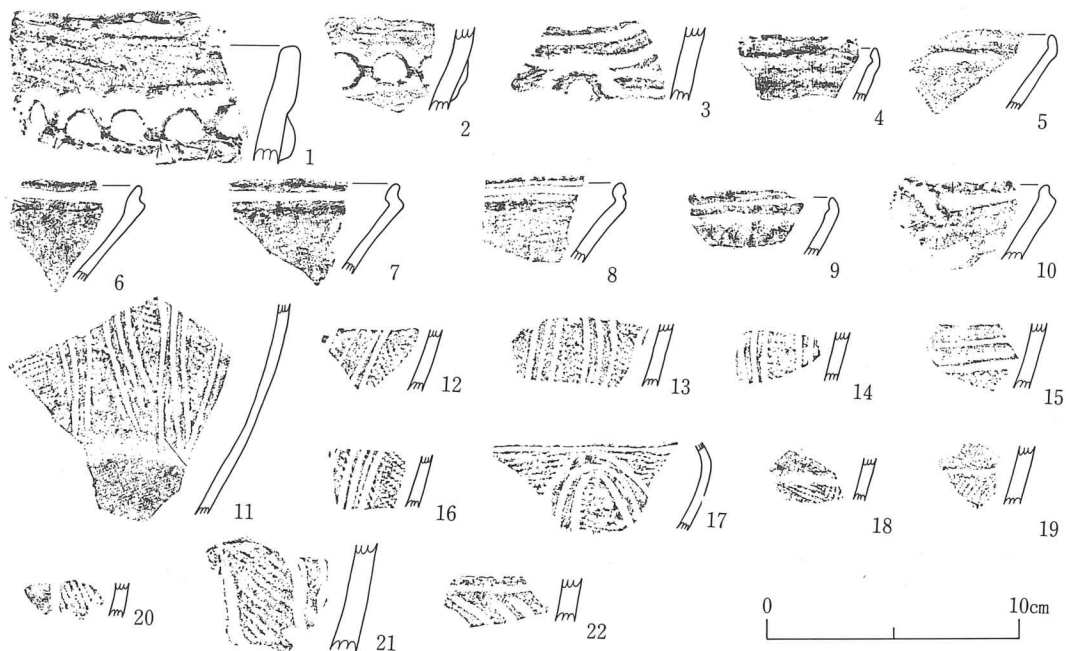
柱穴は、炉址を中心に小型のものが壁に沿って多数存在していた。

遺物は、第56図1~22に示したとおりで、やや時期差のある資料も含まれるが、後期前半の掘之内I式に比定されるものであり、第40号住居址に先行するものである。

本住居址は、僅かに出土した土器に限定して時期設定をしなければならないが、後期前半の掘之内I式期に比定することができる。



第55図 第47号住居址実測図 (1:60)



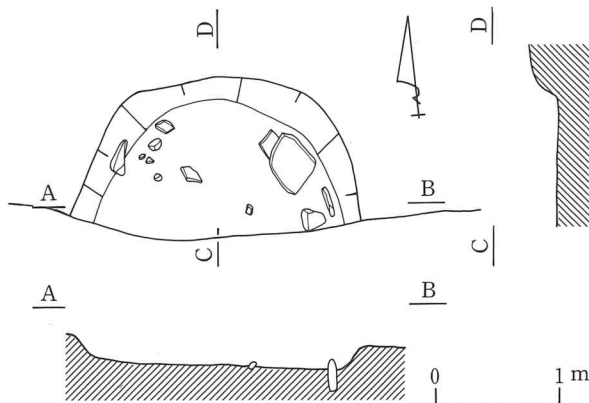
第56図 第47号住居址出土土器実測図（1：3）

17. 第48号住居址（第57～58図、図版31）

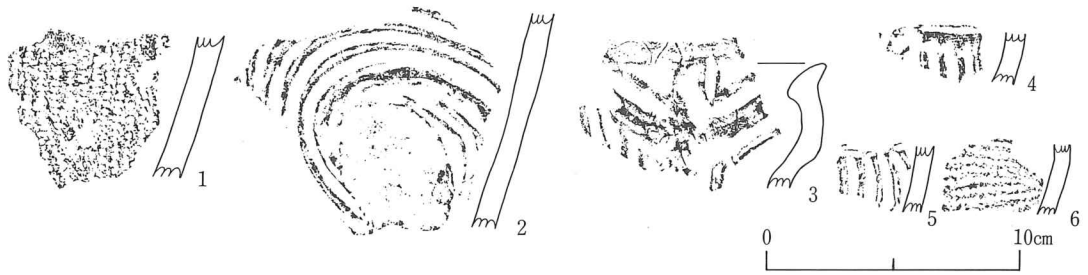
本住居址は、調査区の南端で、中央よりやや西側で検出された縄文時代中期の竪穴住居址である。かかるグリッドは、F-5、G-5である。本址は、プランのほとんどが調査地区外にかかってしまっており、検出できた部分は北側の一部にすぎない。また、本址の上部に張り床をなした第47号住居址が構築されていたが、検出部分が僅かであり複合による影響がいかなる状態であるかは現状では不明である。

床面は、砂質黄色ローム上にあり、固いという印象はないが良く締っていた。また、床面上には、鉄平石や河原石が存在しており、僅かな遺物も礫と混在するように出土した。

壁は、深さ20cmを測り、やや軟弱ではあるが良好な状態を保っていた。遺物は、僅かに出土しただけであり、本址の時期を設定する根拠とはならないが、縄文時代中期中葉に集約できるのではないかと考えている。



第57図 第48号住居址実測図（1：60）



第58図 第48号住居址出土土器実測図 (1 : 3)

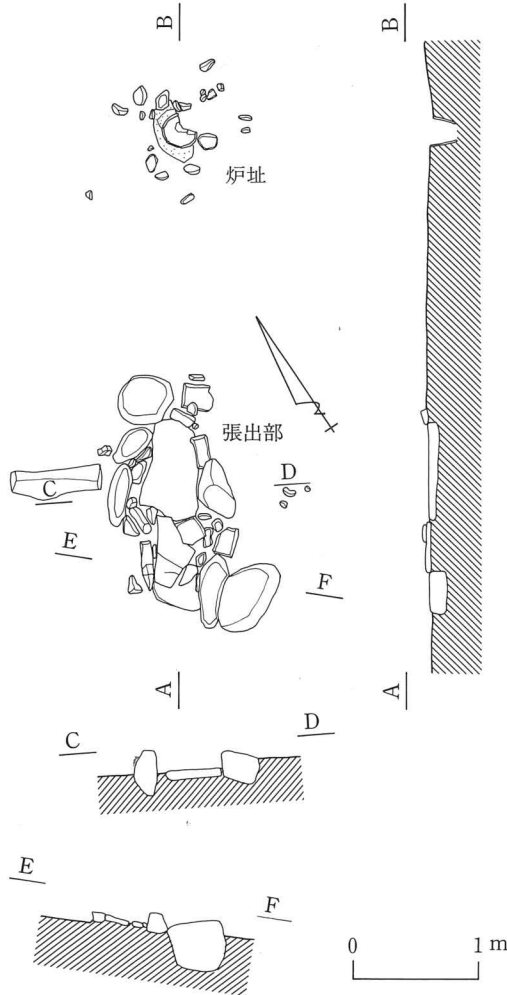
18. 第49号住居址 (第59・60図、図版32)

本住居址は、調査区中央部よりやや西側で検出され、かかるグリッドは、D-4~6、E-4~6、F-4・5である。本址は、竪穴状のプランは全く検出されておらず、大礫の集中部と炉址とによって想定した住居址・柄鏡形住居址である。

炉址はすでに炉石が抜かれ、焼土と炉胎土器が残されているだけであった。炉胎土器は、底部が打ち欠かれて設置されており、炉内の焼土とともに土器内部にも焼土が詰まっていた。口縁部はすでに欠損していたが、恐らく設置後に欠損したものと思われる。炉址の周囲には、小礫が集中しており、炉石の破損と関係があるのかも知れない。

柄鏡形住居址と想定すれば、炉址から200cmの位置に張出部と考えられる石組み構造が存在する。炉址と張出部を結ぶ主軸は、N34.5° Eで、主軸を通過する張出部の長さ180cm、幅100cmを測る。内部に長さ80cm、幅45cmと長さ70cm、幅40cmの大きな鉄平石2個を置き周囲を数個の河原石でとり囲んでいた。

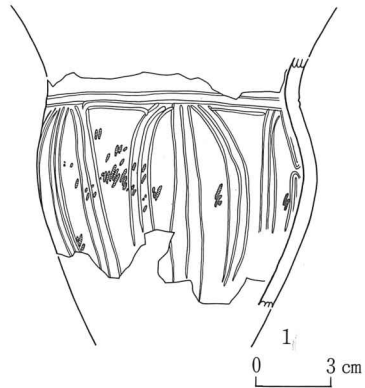
炉址を中心とする主体部は、直径400cmを有する円形プランで、そこに長軸180cm(最南端の河原石1個が不明・これを復元すると約200cmになる)の張出部が構築されたいわゆる柄鏡形住居址にほぼ誤りがないと思われる。



第59図 第49号住居址実測図 (1 : 60)

遺物は、炉胎土器 1 点のみである。胴部下半は打ち欠かれ、口縁部は欠損しているため、頸部から胴部の一部が存在しているだけであるが、本住居址の時期を設定するには十分な資料である。頸部には横走る沈線文が描かれ、そこから縦に区画状の沈線が施文されている。地文には縄文が施文されていた。

本住居址の時期は、炉胎土器により縄文時代後期の掘之内 I 式期に比定することができ、平石遺跡第 15 号住居址に類例を求めることができる。



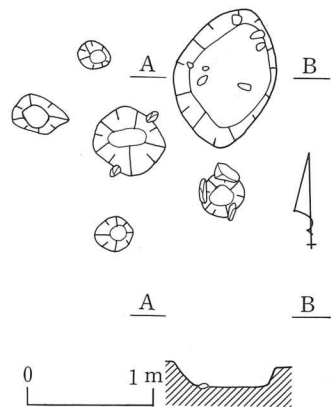
第 60 図 第 49 号住居址出土土器
実測図 (1 : 6)

19. 第 1 号土壇及びピット

平石遺跡発掘調査区全般を通じて、土壇ないしピットが遺構以外で検出されたのは、F-6、G-6 グリッドの一群だけであり、遺構外施設が極めて少ない遺跡とみることができる。

第 1 号土壇は、F-6、G-6 の双方にかけて検出され、東西 80cm、南北 110cm、深さ 20cm を測る。平面は、南北に長い楕円形、底部はほぼ水平で桶形の形状を呈している。内部には河原石が少量混入しているだけであった。

ピットは、第 1 号土壇の周辺に 5 個存在していたが、同様のピットが第 47 号住居址にもかかって存在しており、一連の遺構ではないかと考えられる。いずれも落ち込みは明瞭な状態で検出されているが、比較的浅かった。



第 61 図 第 1 号土壇及びピット
実測図 (1 : 60)

第 2 節 遺構外出土遺物

1. 縄文時代の土器

平石遺跡から出土した土器は、遺構から出土した資料を主体に、遺構外からも良好な資料が出土している。これらの土器は、平石遺跡第 1 次緊急発掘調査で得られたものと同様の範中で把握することができるが、本調査の場合には調査面積が極めて少なく、該当しない土器が多々ある。しかし、希薄であった第 1 次調査の内容を補う土器も出土しており、本遺跡の編年的内容をさらに充実するものになった。

ここでは、第 1 次報告書で作成した編年表を参考にして、本調査で出土した土器の概要を示す

第2表 平石遺跡出土土器分類表

時 期	群	類	平石遺跡時期区分	中 部 編 年	関東・東海編年		
早 期	I	I	} 早期後半 I	樋 沢	田戸下層		
		II III IV				II (鍋久保・新水B)	
前 期	II	I	} 前期後半 I	中 道(栗毛坂)	花積下層		
		II III IV				II 神ノ木	関山・清水ノ上II
中 期	III	I	中期前半 I	梨久保	五嶺ヶ台 I・II		
		II	中期中葉 I	猪 沢	勝坂I 阿王台I		
		III	II	新 道	II		
		IV	III	(焼 町)	II		
		V	IV	藤 内 I・II	III		
		VI	V	井戸尻 I・III	IV・V		
		VII	中期後半 I	曾 利 I	加曾利E I		
		VIII	II	II	II		
		IX	III	III・IV	III		
		X	IV	V	IV		
後 期	IV	I	} 後期後半 I	浦 谷 B I	称 名 寺 I		
		II				II	
		III				III	堀ノ内 I
		IV				IV	II
		V	後期中葉 I	IV	加曾利B I		
		VI	II	V	II		
		VII		(無文土器一括)			

(注) 本表は、平石遺跡出土土器を、時期別に分類したもので、参考までに編年対比ができるようにした。但し、平石遺跡で出土している土器に対してのみ対比関係が出来るようにしたため、従来の編年表とは意味を異にする。また、編年の不安定な箇所については柔軟性を持たせてあるので参考にしてください。

ことにする。

I群I類 早期後半I期(第62図～1～23、図版33)

I群I類(以下I-Iという。)は、樋沢式土器の一群である。第1次調査では、山形文336片、楕円文3片、格子目文1片で計340片であったが、今回は、山形文22片、楕円文1片の計23片であった。带状施文の代表的な資料であり、新たな展開のみられる資料はなかった。

I群III類 早期後半II期(第24～38、図版33)

貝殻腹縁文土器(24～30、37・38)、無文・条痕文土器(31～36)の一群である。これらの土器は、押型文土器と共に出土しており時期差を感じさせない。貝殻腹縁文は、沈線との組み合わせによるもの、腹縁文のみのもので大別できる。

II群II類 前期前半II期(第63図1～36、図版34)

羽状縄文、斜縄文が主体の土器で、繊維の混入量にバラツキはあるが、全般には多く混入しているといえる。

II群III類 前期前半II期(第64図2～16、図版34)

神ノ木式土器は、第1次調査で25片ほど出土しているが、本調ではあまり多くは出土していない。

III群I類 中期前半I期(第64図43～52、第65図1～10、図版34)

中期初頭に位置づく土器群であり、43は梨久保式に比定される土器、他は五領ヶ台式土器の系例で理解されるものである。第65図1～5は、破片資料から器形復元できたもので、口縁部は隆帯が貼付され、その上部を斜状沈線ないし縄文が施文され、また無文部に一周する交互刺突がなされている。胴部は、沈線によるB字状文が施文されている。平石遺跡ほか蓼科山北麓地域は、梨久保遺跡に比べて五領ヶ台式土器群の方が圧倒的に多い。

III群II類 中期中葉I期(第65図11～22)

五領ヶ台式土器に後続する土器群である。いわゆる猪沢式土器として編年されてる。口縁部は、貝殻状把手が貼付されたり、直線あるいは波状の沈線が施文されている。関東の阿玉台式土器の系譜をもちつつ、中部高地的な様相の強い資料である。

III群IV類 中期中葉III期(第65図1・2)

本類は、焼町式土器として編年されている一群である。隆帯で楕円区画文を施文し、その中に刺突が描かれ、その周辺を比較的太い沈線で施文しているもの、また、図示してないが、そこに縄文が施文されているものなどがある。1は口縁部直径20.5cm、2は底径約10cmを測る。本遺跡からは破片資料が比較的多く出土している。

III群V類 中期中葉IV期(第66図3～17、図版35)

藤内式土器は、厚手で華やかな装飾把手をもつ土器が多く、特に口縁部に集中する傾向がある。胴部に対しては、隆帯を貼付した後刻み目を行ったり、半截竹管の押引文が施文されている。

III群VII類 中期後半I期(第66図18～31、図版35)

曾利Ⅰ式土器に比定される一群である。蓼科山北麓地域において、本群の器形土器の出土はまだなかったが、第46号住居址出土土器を中心に良好な資料が得られている。18は、口縁部直径23.5cmで、胴部下半から底部にかけて欠損している。頸部には隆帯が一周し、そこにクロスするように口縁部から胴部にかけても隆帯が貼付されている。地文には縄文が施文されている。21～28は口縁部に装飾把手のある土器ないしは、口縁部が無文の深鉢形土器の胴部から底部にかけての資料である。縦位に半截竹管文が描かれ、さらに押引文が間隔を置いて施文されている。

Ⅲ群Ⅷ類 中期後半Ⅱ期（第66図32～41、図版35）

曾利Ⅱ式土器に比定される一群である。深鉢形土器の口縁部直下から頸部の資料が多く、粘土紐を波状に貼付したり、ソーメン状の粘土紐を格子目状に張り付けて文様構成をなしている。

Ⅲ群Ⅸ類 中期後半Ⅲ期（第67図1～22、第68図1～10、図版36）

曾利Ⅲ・Ⅳ式土器に比定される一群である。第67図1～22は曾利Ⅲ式に併行関係をもつもので、1～7は唐草文系土器群、8～22は縄文系土器群である。第68図1～10は、曾利Ⅳ式に併行関係をもつもので、1・2は縄文系、3～10は唐草文系土器である。平石遺跡出土土器の中では、本群が最も出土量が多い。

Ⅲ群Ⅹ類 中期後半Ⅳ期（第68図11～16、18・20・21、図版36）

曾利Ⅴ式土器に比定される一群である。縄文時代中期の最終末になると、横帯する口縁部文様帯はなくなり、口縁部から直接胴部にかけて綾杉状沈線文が施文される場合が多い。20・21は、櫛歯状工具により施文されたもので、この類の資料は、渦巻状に施文されたり流水状に施文される場合が多い。16は、両耳把手付土器で、厚手の粗製土器である。

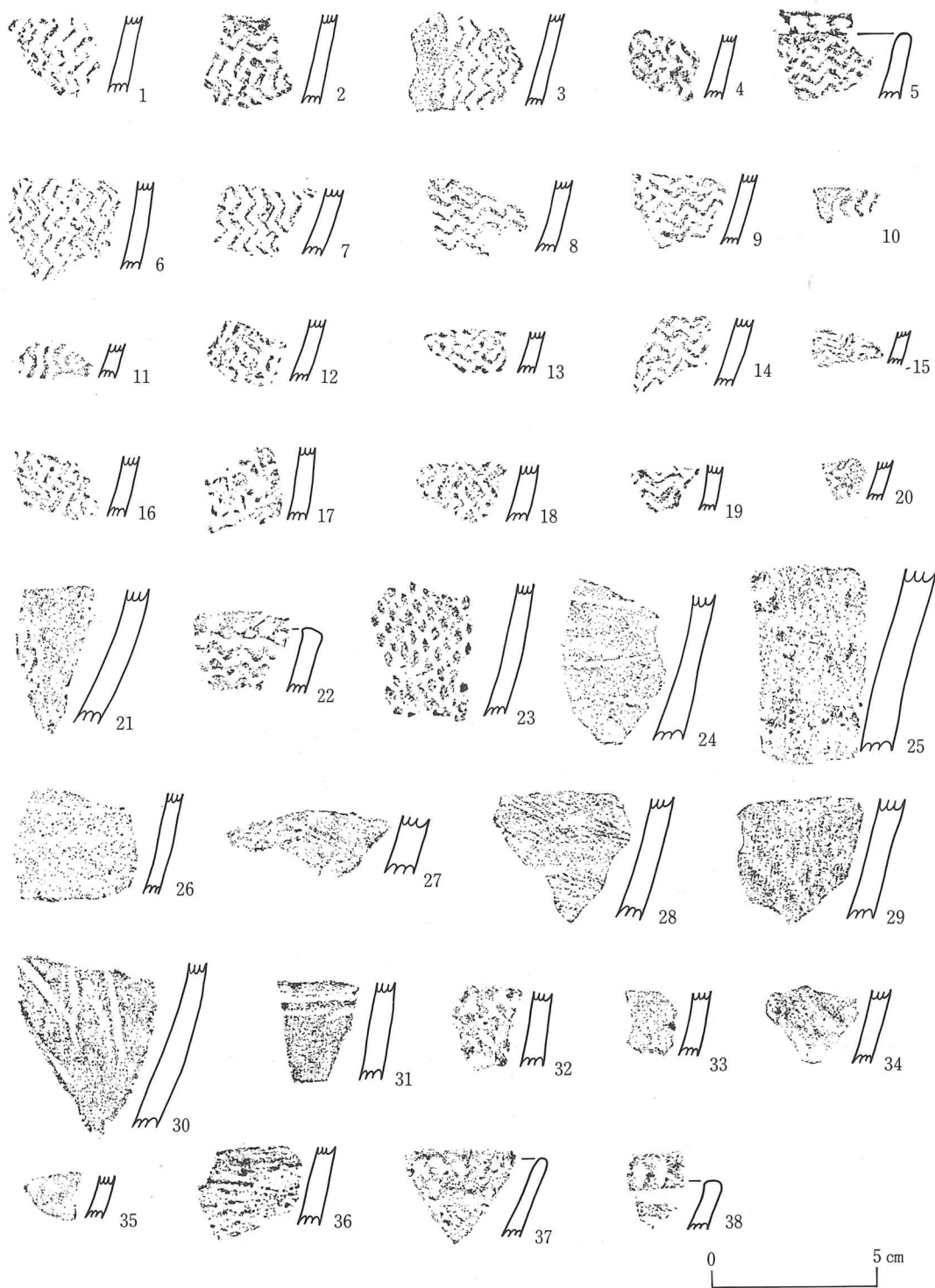
Ⅳ群Ⅶ類 後期の無文土器の一群（第68図17・19、図版36）

縄文時代後期に比定される一群の土器であることは間違いないが、無文土器であり詳細に時期設定することは難しい。2点とも内外面が研磨されており、無文土器ではあるが精製土器の一群である。

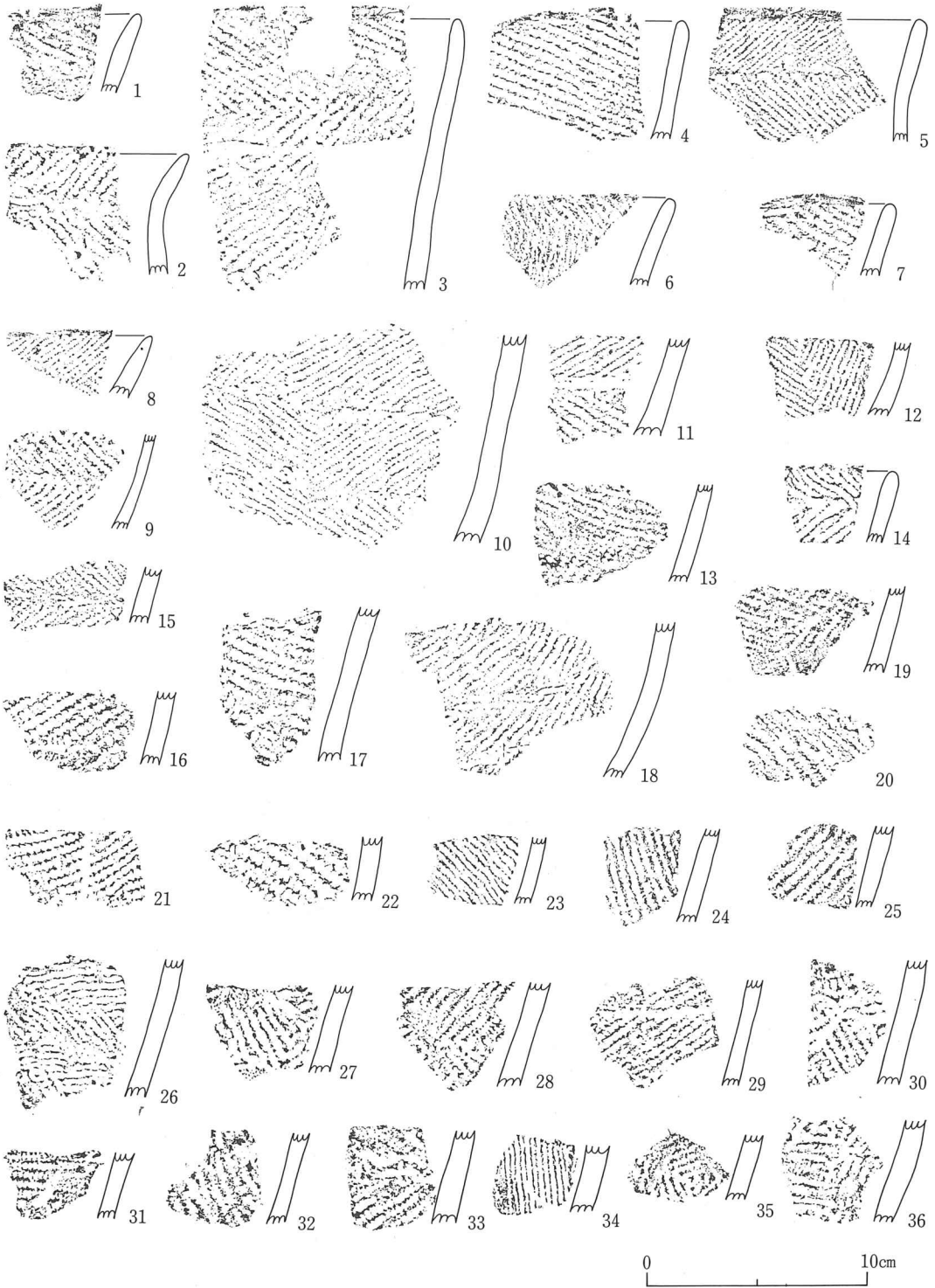
2. 縄文時代の石器（第69図、図版37・38）

平石遺跡から出土した石器は、石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹石、石皿、敲石、磨石、石匙、石錐、削器、搔器、両極石器、石棒、軽石製ペンダントなどであるが、出土量はそれ程多くはない。これらの中で多くを締めるのは打製石斧であり、石材は安山岩製が多く、また、両面に自然面を多く残しているのが特徴である。凹石と磨石も多くを締めるもののひとつである。磨かれた石に凹を付すものも出土している。石鏃、石錐、削器、搔器、両極石器、石匙は黒曜石製がほとんどを締めている。

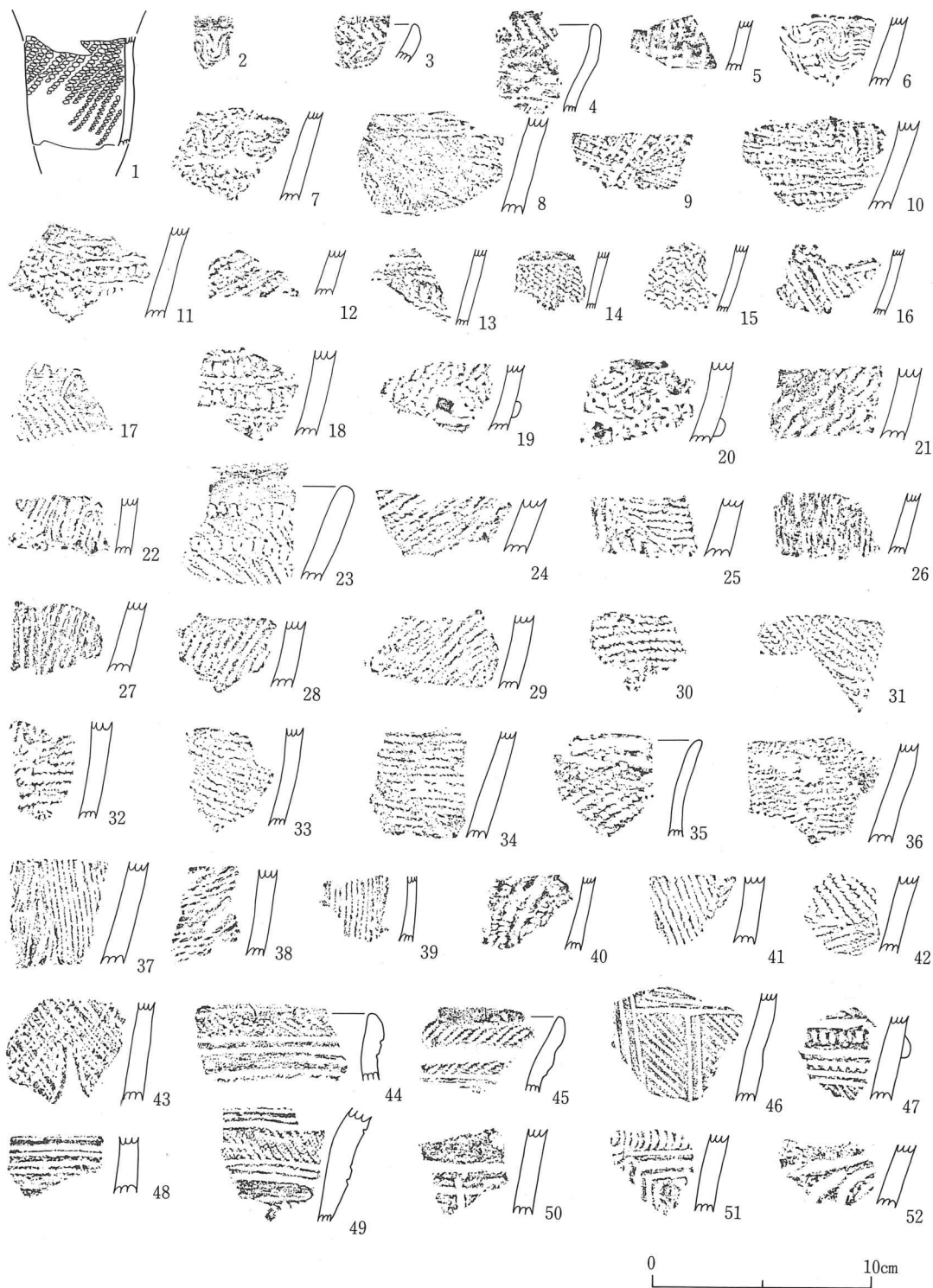
石棒、軽石製ペンダントは、石器というより石製品として取り扱わなければならないが、石棒は、安山岩製と緑泥片岩製の2個が出土している。また、ペンダントは、孔が開けられ、両面が研磨されて遍平になっている。



第62図 遺構外出土土器実測図 (1 : 2)



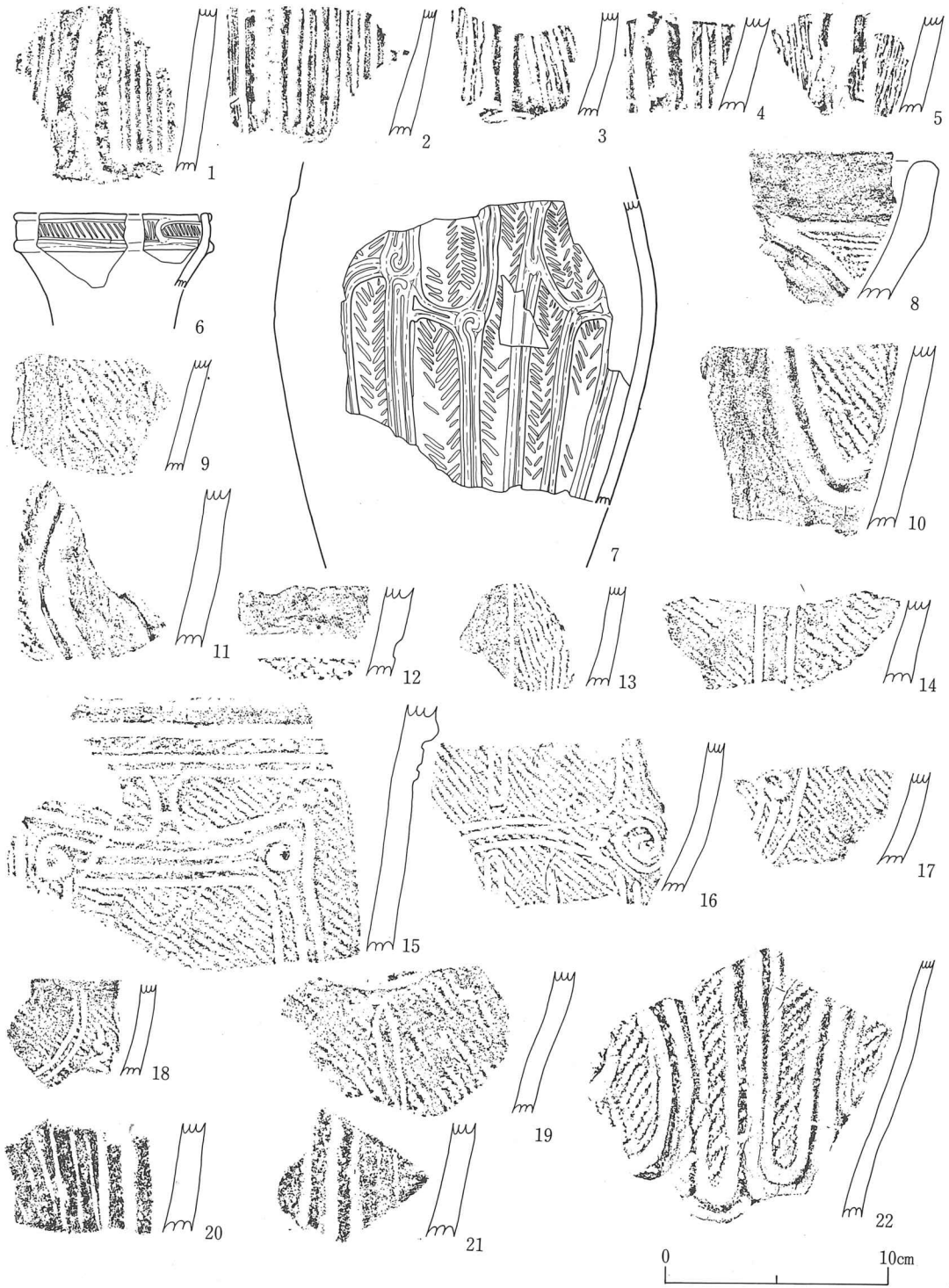
第63図 遺構外出土土器実測図 (1 : 3)



第64図 遺構外出土土器実測図 (1・1:6、他1:3)



第65图 遺構外出土土器実測図（1～5・11～12・1：6、他1：3）



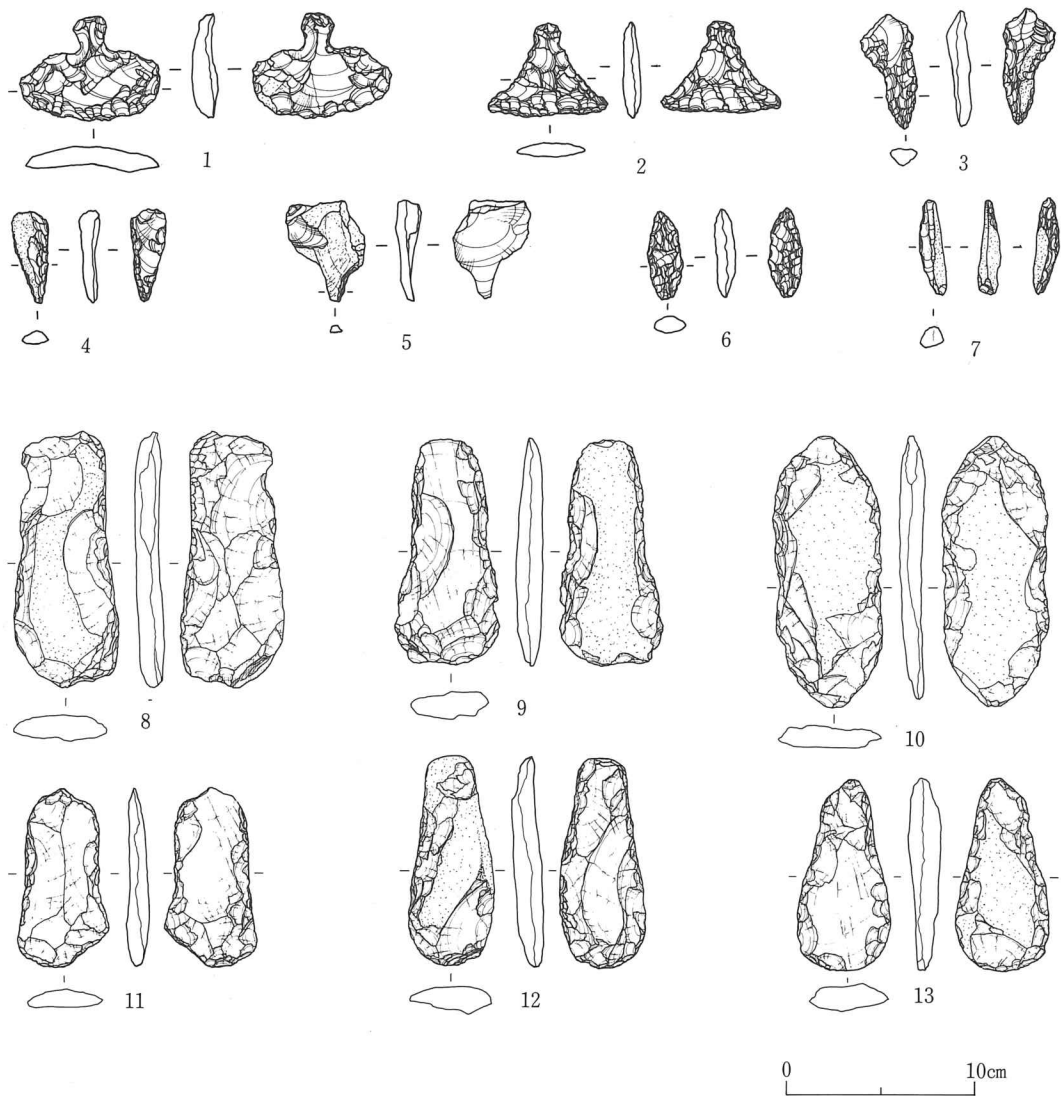
第66図 遺構外出土器実測図 (6~7・1:6、他1:3)



第67図 遺構外出土器実測図 (1~2・18・1:6、他1:3)



第68図 遺構外出土土器実測図 (1~2・8・16~19・1:6、他1:3)



第69图 遺構外出土石器実測図 (1~7・1:2、他1:4)

第IV章 総 括

本発掘調査は、前述したように昭和62年度に続き第2次の調査である。第1次調査では、住居址31棟、環状配石遺構1基、配石遺構1基、その他人為的な集石ないし配石と思われる遺構が検出された。第2次調査では、住居址18棟、土壌1基、その他柱穴が検出されており、第1次調査の成果を受けて、住居址番号も第32号から第49号住居址とした。

検出された住居址は、縄文中期後半Ⅰ期（44住、46住）、中期後半Ⅲ～Ⅳ期（34住）、中期後半Ⅳ期（32住、33住、35住、36住、39住、41住、42住、43住）、中期の詳細時期不明（37住、45住、48住）、後期前半Ⅲ期（47住、49住）、後期前半Ⅳ期（40住）、後期の詳細時期不明（38住）の各期に編年することができる。これらの中では、中期後半Ⅳ期の住居址が最も多く、第1次調査でも同様の結果が得られているところから、平石遺跡では、最も人々が集中して繁栄をみた時期であることがわかる。

中期後半Ⅰ期の住居址は、蓼科山北麓地域では数少ない件数の一つであり、第44・46号住居址は貴重である。しかも、出土した遺物も器形資料として重要であり、当地方の基準となりうるものである。検出された住居址の中でさらに注目されるのは、中期後半Ⅳ期の第32・34号住居址、後期前半Ⅲ期の第49号住居址、同Ⅳ期の第40号住居址である。32・34住は、敷石が大分除かれてはいたが、2棟とも敷石住居址である。第1次調査では、中期後半Ⅳ期の2住、後期前半Ⅲ期の15住、同Ⅳ期の16住など5棟の敷石住居址が検出され、全てが柄鏡形敷石住居址であった。中期の2住は、主体部の敷石部平面形態が方形であることが特徴である。炉址を中心に巨大な鉄平石を組み合わせて敷き、四方の周囲には河原の小礫で淵取りがしてあった。張出部は、敷いた鉄平石の周囲を河原石で取り囲み、河原石の框石が存在した。主軸上に埋甕があったことは重要である。後期の15住は、敷石部が六角形に構成されているのが特徴である。主体部と張出部の間には框石が置かれ、張出部の床は鉄平石、周囲の石は河原石で構築されていた。16住は、主体部がほぼ正円形でかなり深い竪穴で、中央の炉を中心に全面に鉄平石が敷かれ、張出部は、5段程の石積み構造になっているのが特徴である。

本調査における32・34住は、現状では形態を確認することはできなかったが、32住は柄鏡形敷石住居址であった可能性が大きい。49住は、破壊が進んでいたが明らかに柄鏡形住居址である。張出部は、鉄平石と河原石の組み合わせ構造が良好に検出された。炉体土器のあり方は、15・16住と同堀ノ内期の所産である。本遺跡における後期住居址のあり方は、そのほとんどが敷石住居址の形態で検出されていたが、40住は比較的深い竪穴住居址であり、16住と同様堀之内Ⅱ式期の住居址として貴重である。

敷石住居址以外の住居址は、中期後半期に集中しており、しかも複合関係をなしているものが多いところから、同じ型式の住居址であっても同時期に存在したものは少なかったと思われる。

遺物は、縄文時代早期から後期までの土器及び石器が出土した。中でも第1次調査で注目された樋沢式タイプの押型文土器が本調査でも出土した。また、貝殻腹縁文土器も同様に出土しており、第1次調査と同じ結果が得られている。平石遺跡の成果も含めると、これまでに樋沢式・平石式→細久保式→高山寺式→相木式と押型文土器の一連の流れを把握することができ、また、多縄文系土器群→撚糸文系・無文系→沈線文系・貝殻腹縁文系→条痕文系のそれぞれの土器群が把握されるに至っており、今後層位的に調査ができるとすれば、より具体的に早期の様相が明らかになるものと思われる。

前期の土器は、前半の花積下層式から黒浜式までの資料が得られているが、関山式の土器片が中でも多かった。第1次調査で、県内では出土例の少ない清水上Ⅱ式の良好な土器が出土したが、本調査においては図示できなかつたが細片が出土している。望月町においては、新水B遺跡と平石遺跡で出土しており、県内では八ヶ岳西南麓に僅かに出土例がある程度で極めて貴重な資料である。

中期の土器群は、五領ヶ台式で包括される土器群と中期後半の一群に大きく把握される。五領ヶ台式土器は、上吹上遺跡で器形復元のできた良好な資料があり、本遺跡も立地的に一連の遺跡として据えることができる。中期後半の土器群では、後期Ⅰ期の住居址が蓼科山北麓地域で初めて検出され、良好な土器を得ることができた。Ⅱ期では、土器片は出土しているが遺構に伴って今だ確認されておらず、Ⅲ・Ⅳ期は最も住居址の検出例が多く、出土遺物も遺構に伴って良好な状態で多数出土している。これら中期の土器を総合的にみると、初頭においては関東的な様相がかなり強く、僅かに中部高地的な雰囲気を感じさせるものに対して、後半は、流入した一定程度の文化内容を、より土着性の強い様相へと変容していったことがうかがい知れる。

後期の土器群は、浦谷B遺跡で初頭から後葉あるいは晩期初頭までの一連の編年体系を把握できる程の成果を上げることができたが、初頭から前半の土器はやや弱体化の部分があった。平石遺跡の後期土器は、特に堀之内Ⅰ・Ⅱ式の良好な資料が、遺構も含め検出されており、本地域における縄文時代の歴史的変遷がかなり明確になってきたといえる。

当地方においては、早期前半、前期後半、中期中葉、晩期の各期の資料を明確にする必要があり、既出資料の見直しと新たな検出に向けて今後詳細なる調査をする必要性を感じる。

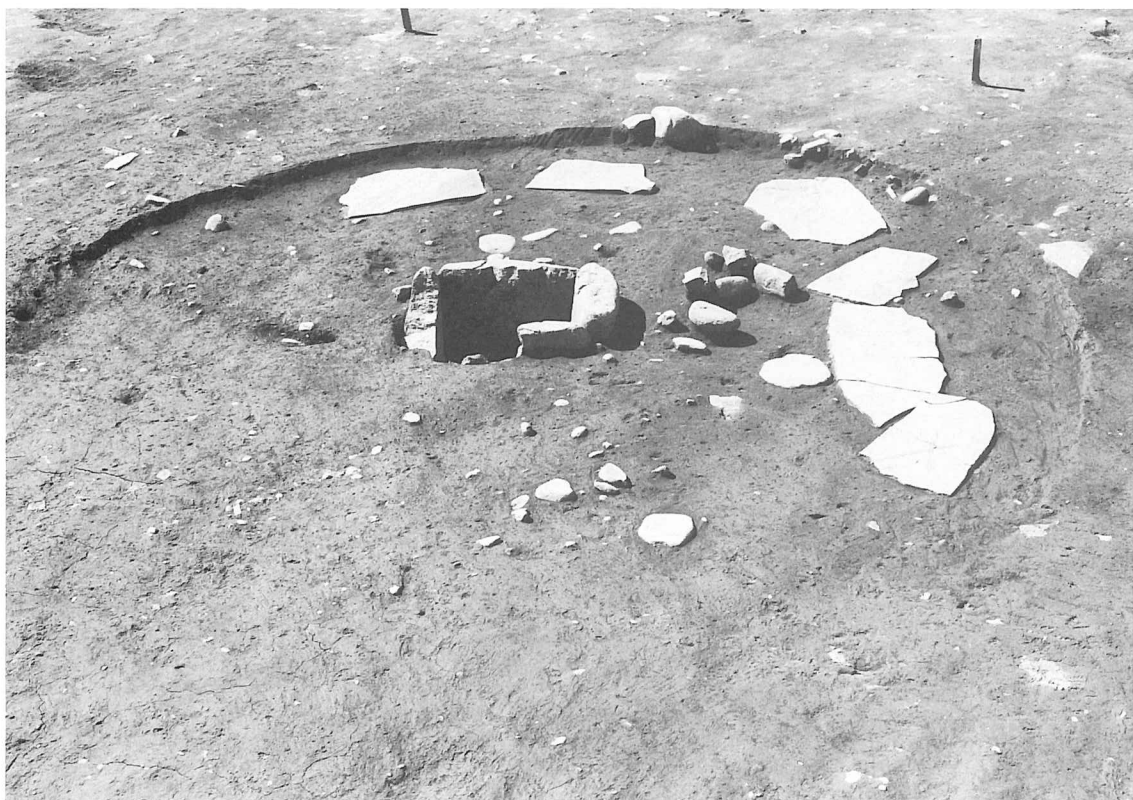
本調査は、個人住宅の建設に伴う緊急発掘調査であり、土地所有者のご理解とご協力により十分な調査が可能となったとともに、貴重な資料の検出により大きな成果を上げることができた。この成果は、単に町の歴史解明のためだけではなく、小地域から見れば蓼科山北麓の文化圏であり、広く把握すればまさに全国的視野の中で据えていくべき重要な内容を包括しているものである。これらの成果が、多くの方々の目に触れ、活用され歴史的研究の一助となれば幸いである。



平石遺跡より遠望



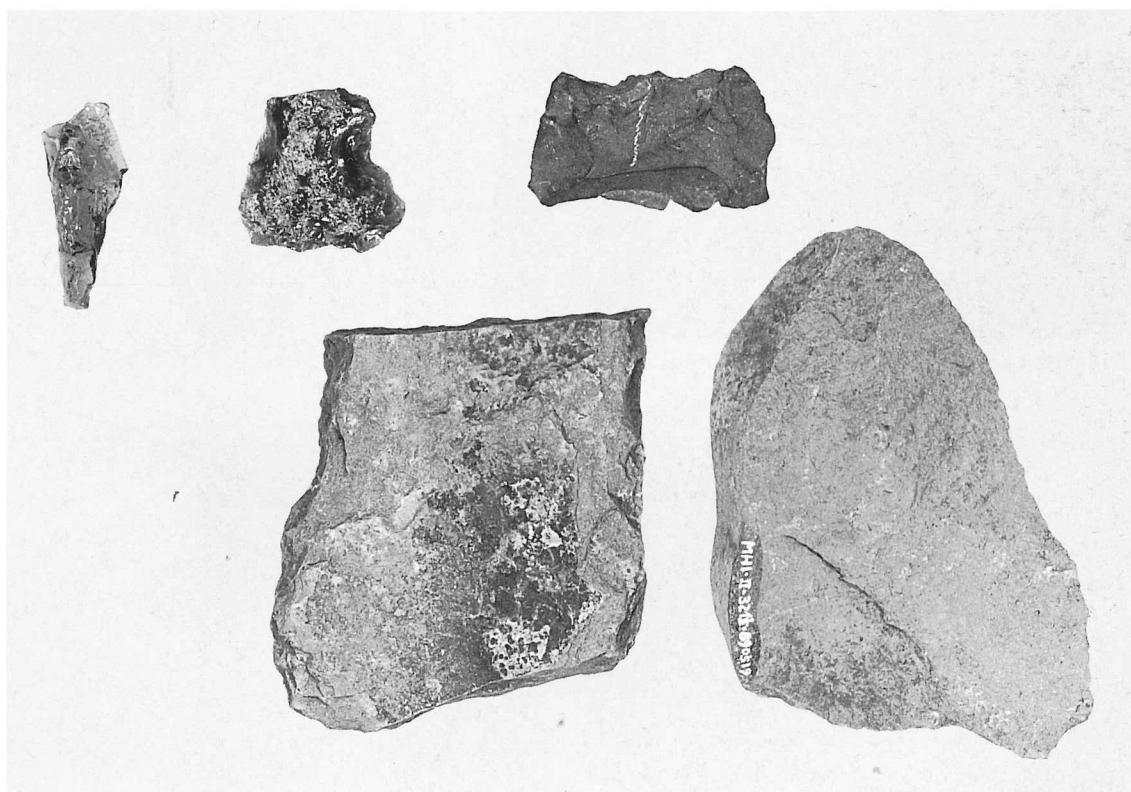
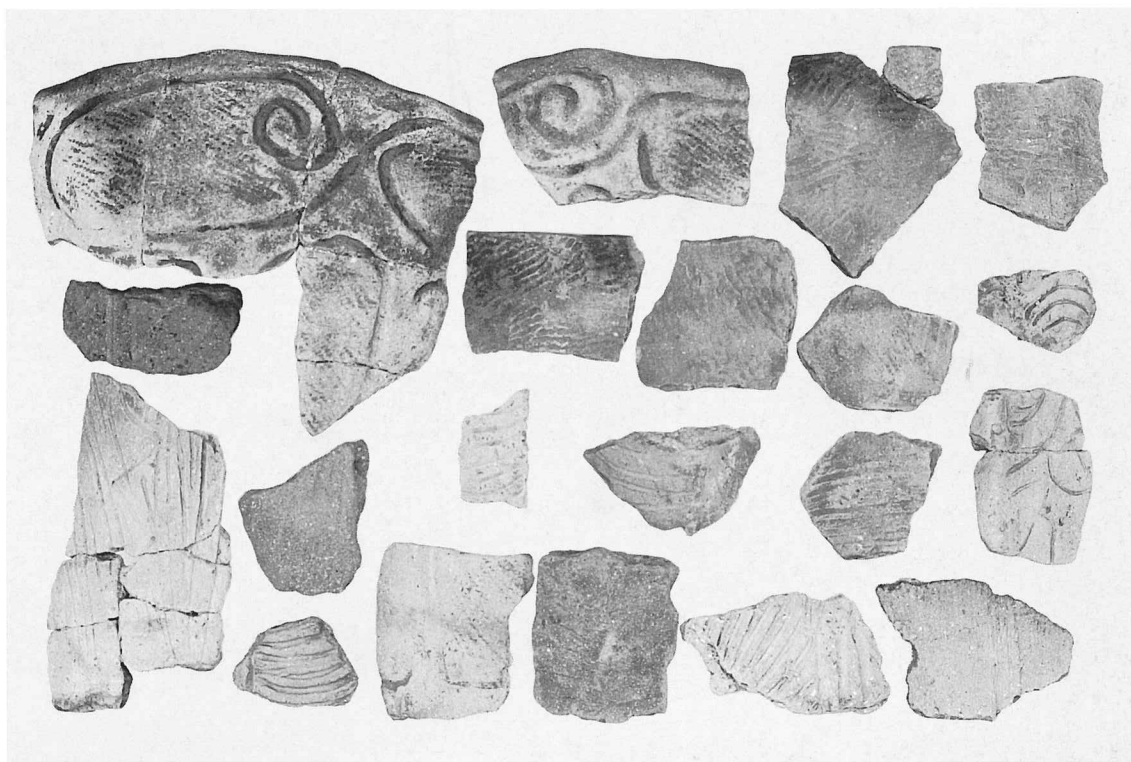
遺跡全景（初期段階）

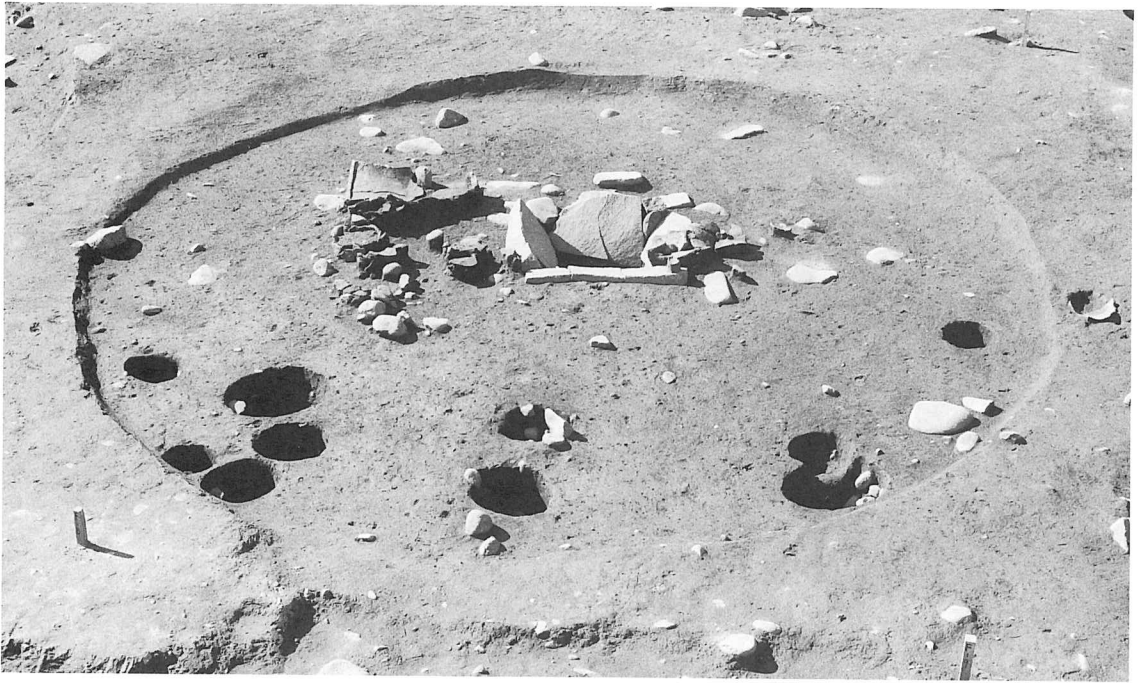


第32号敷石住居址

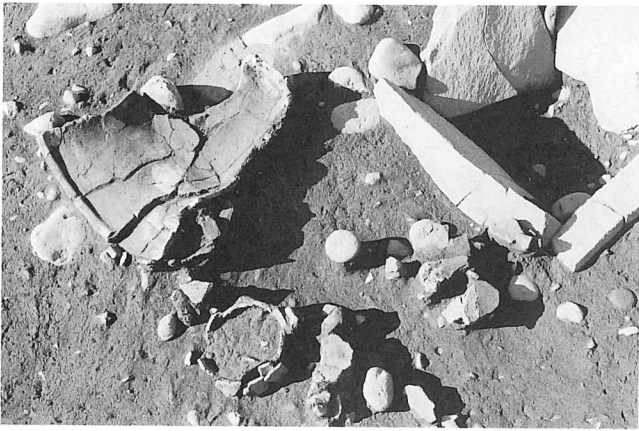


炉址



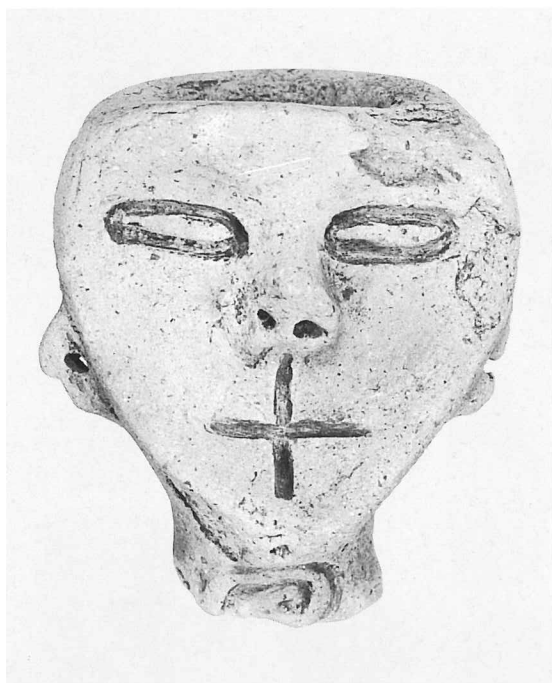


第33号住居址



炉址及び土器出土状態

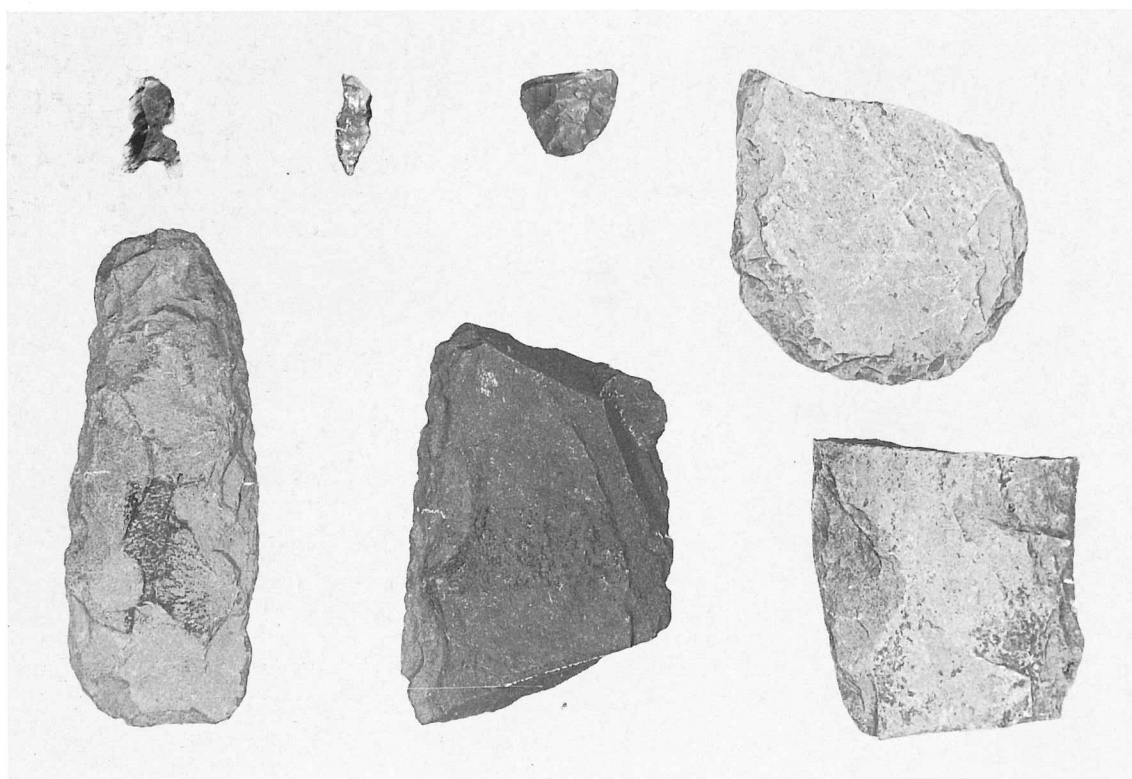
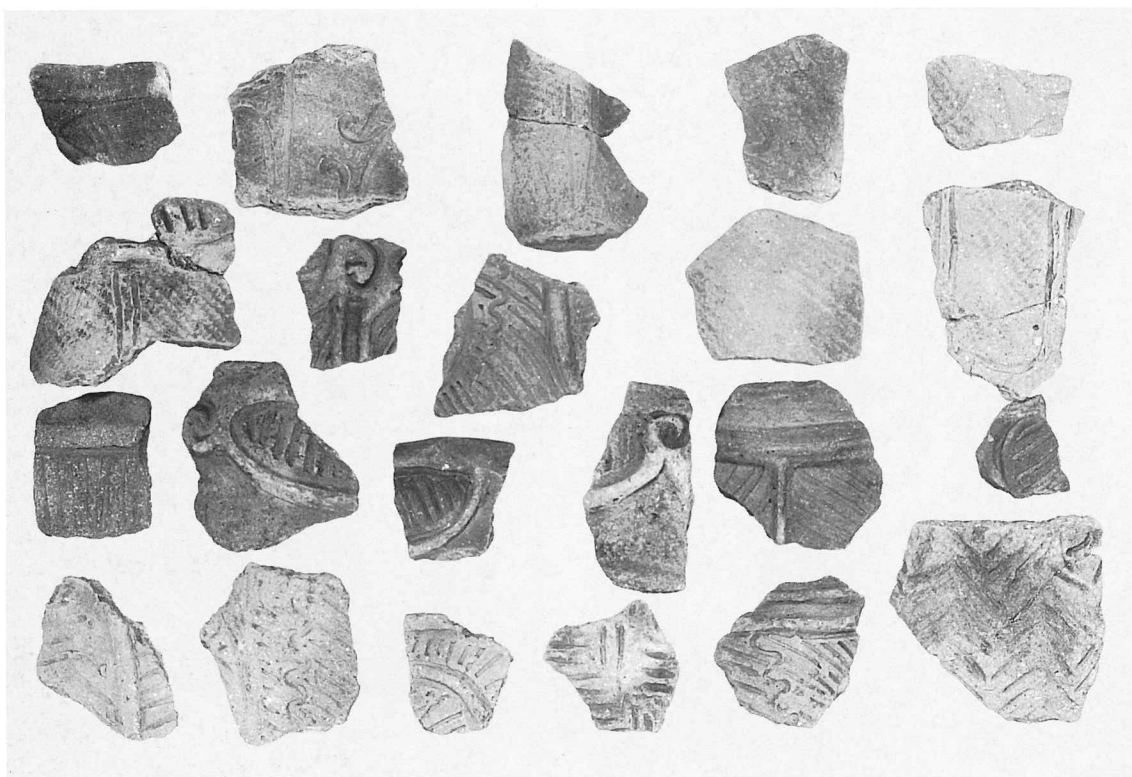




土偶



图版六 第三十三号住居址





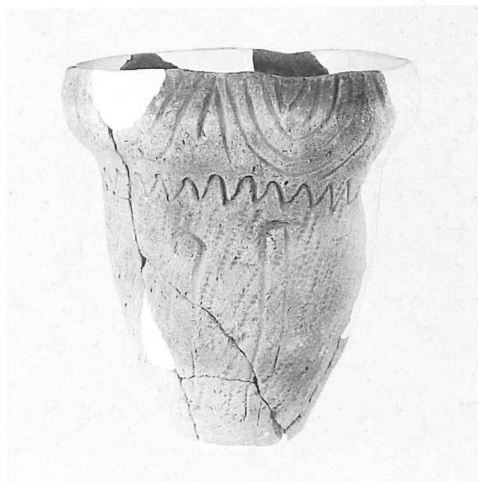
第34号住居址



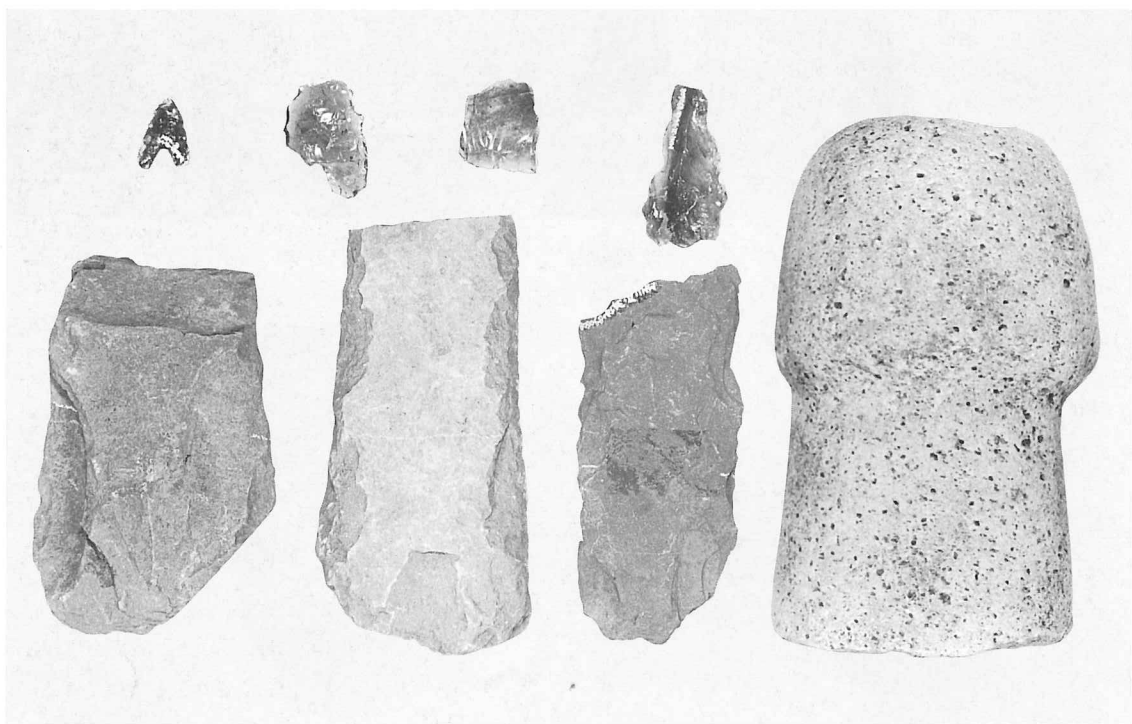
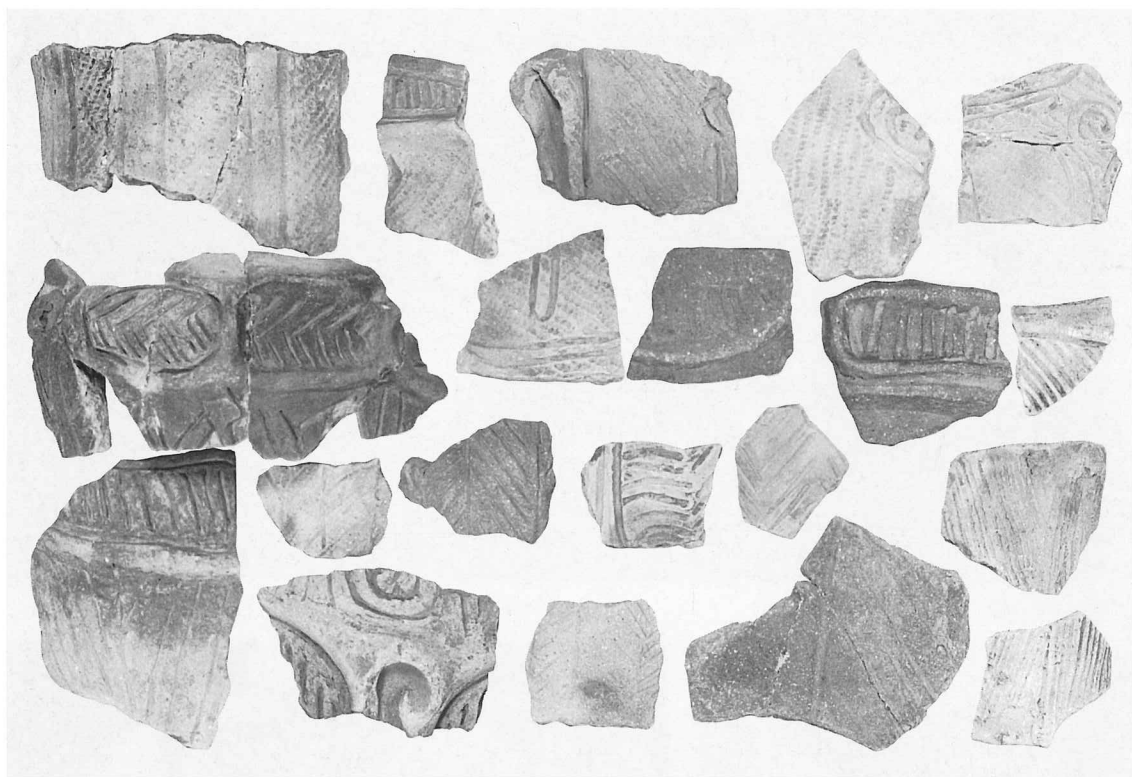
炉址

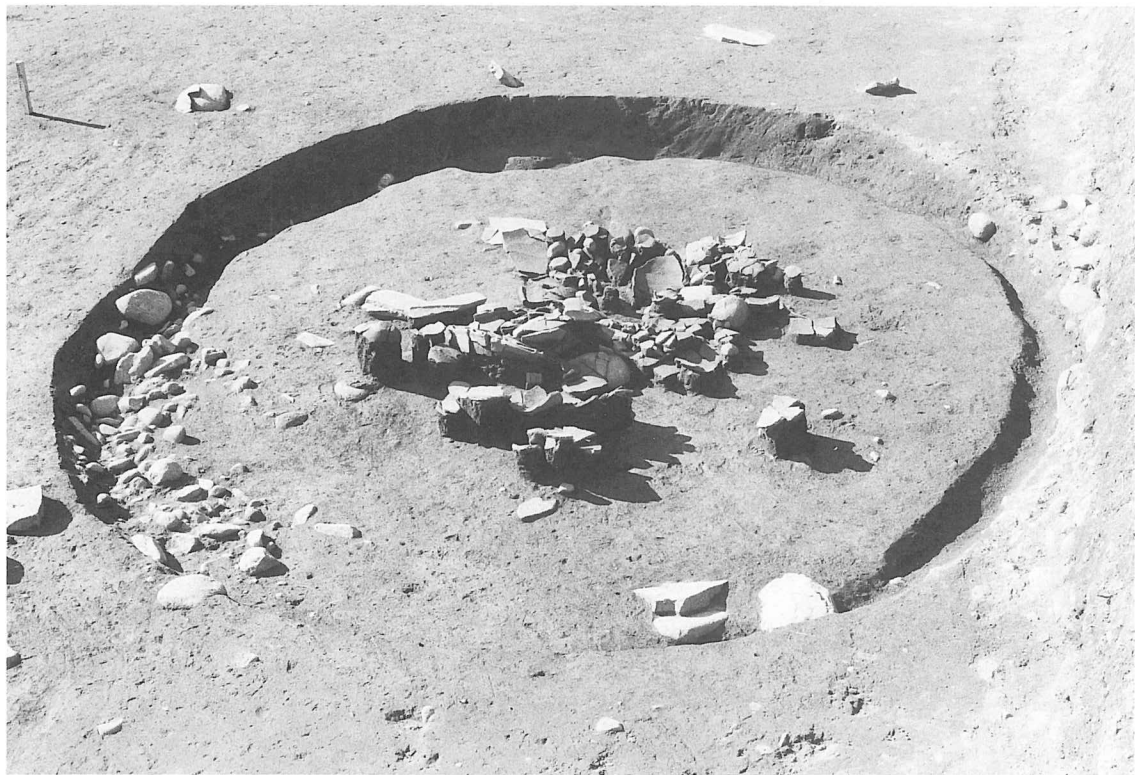


土器出土状态



图版八 第三十四号住居址

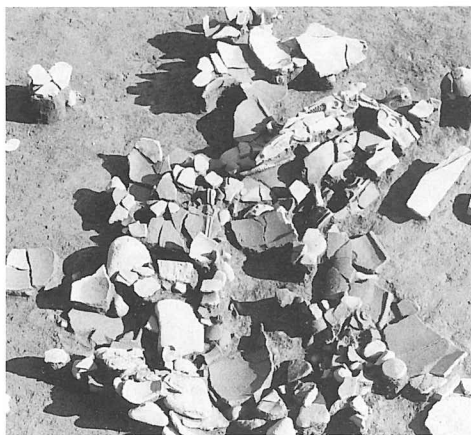




第35号住居址



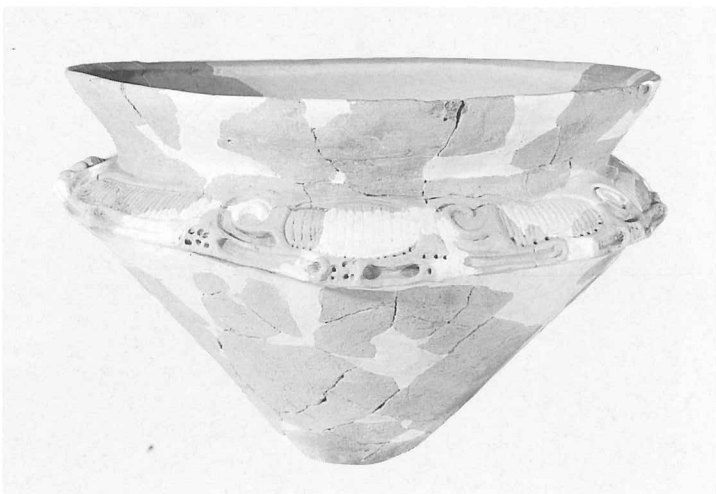
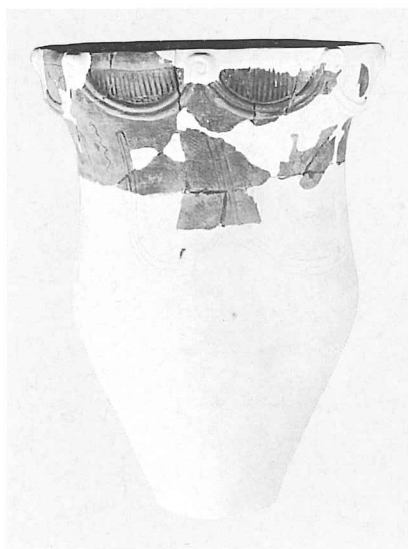
第35号住居址（遺物を取り除いた状態）

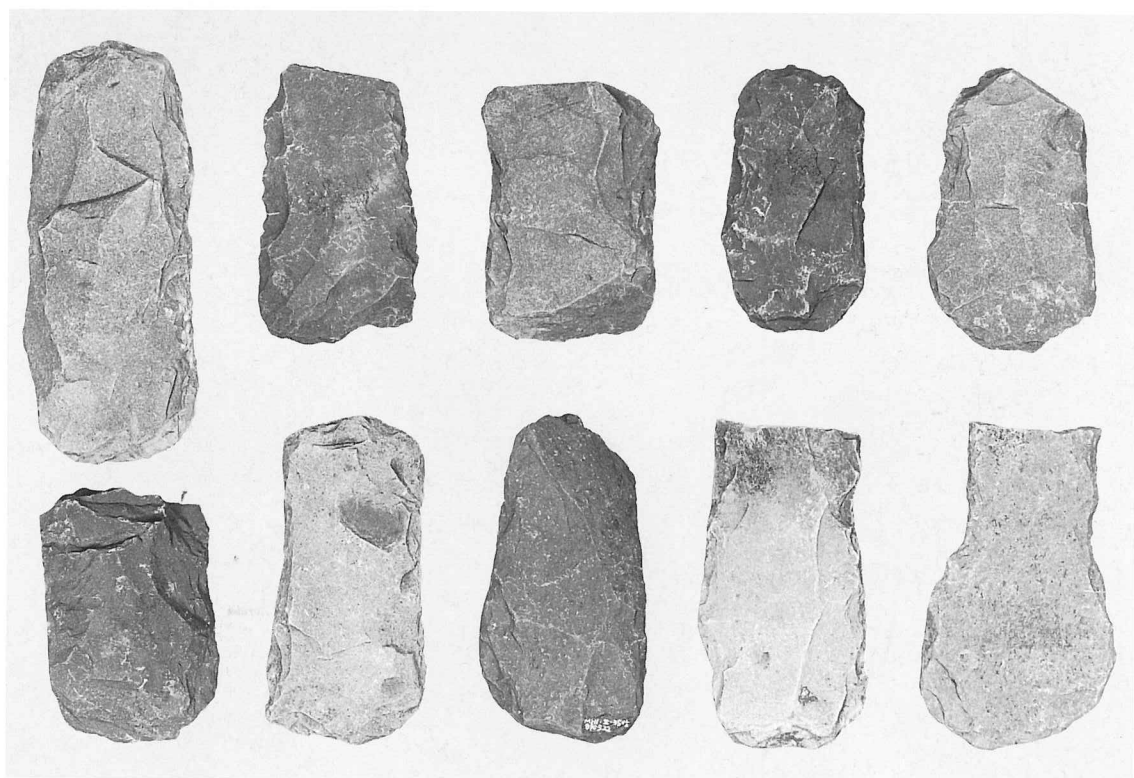
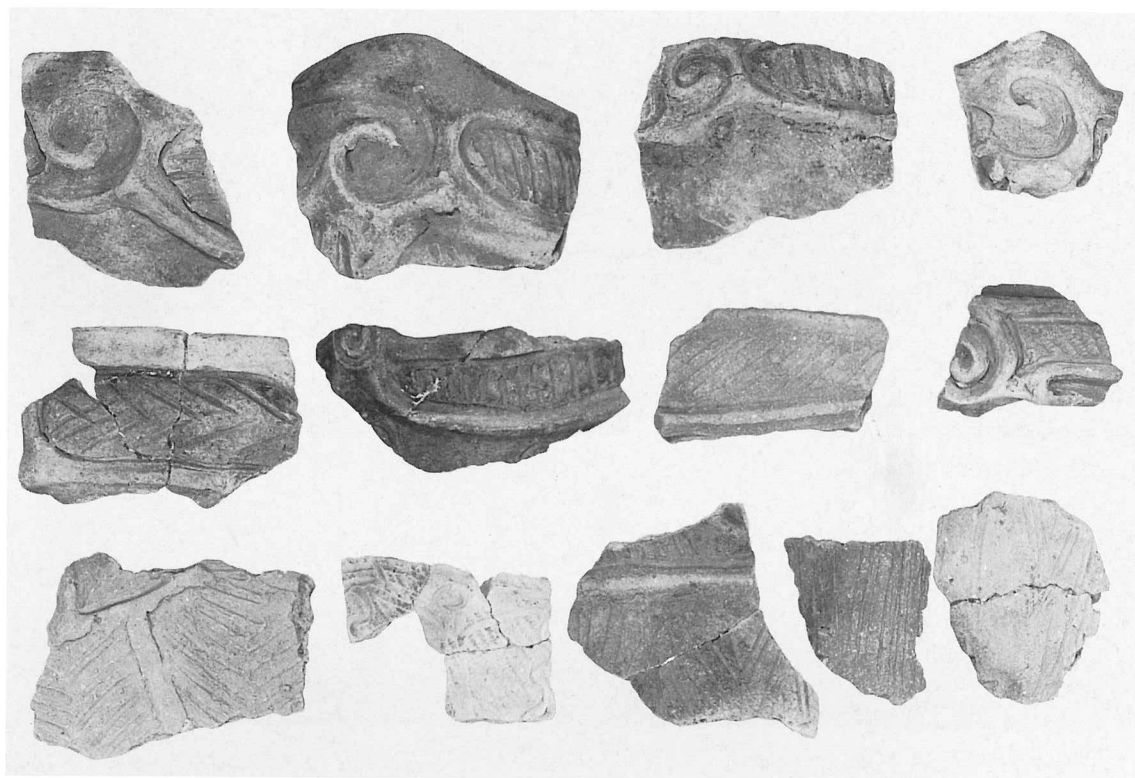


遺物の出土状態



遺物の出土状態







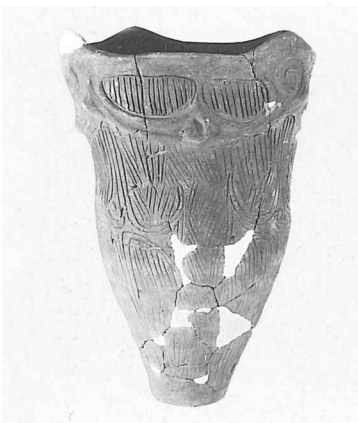
第36号住居址

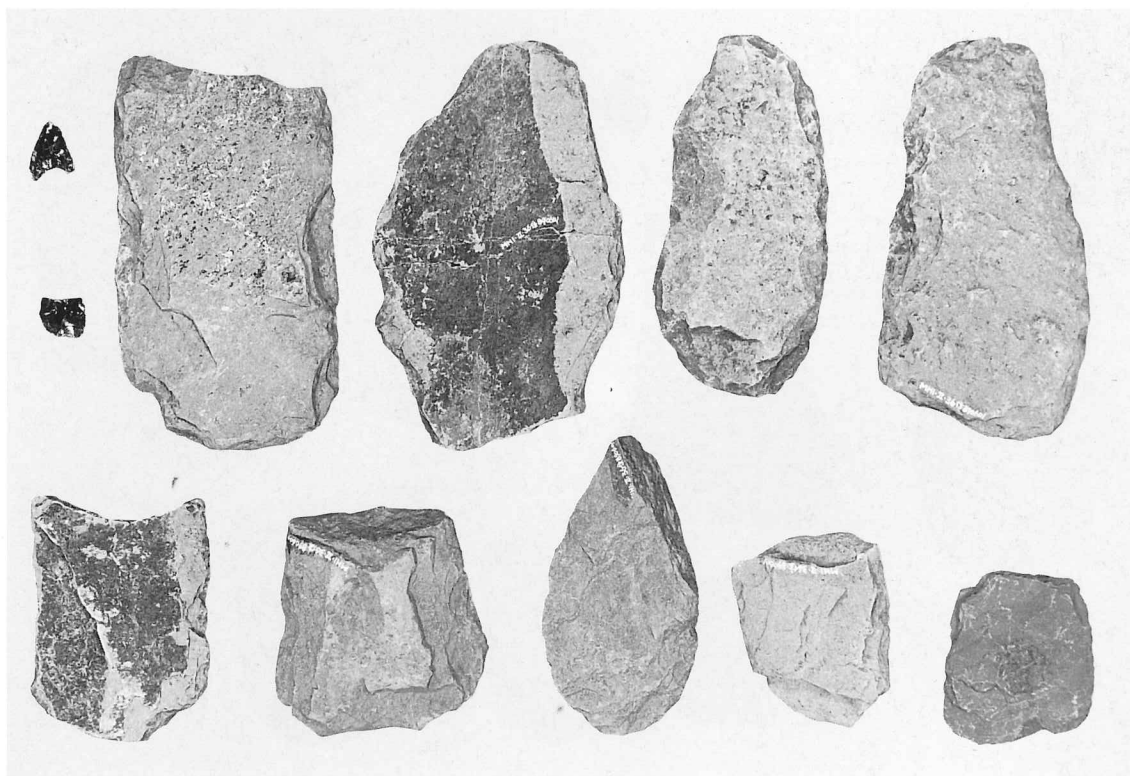
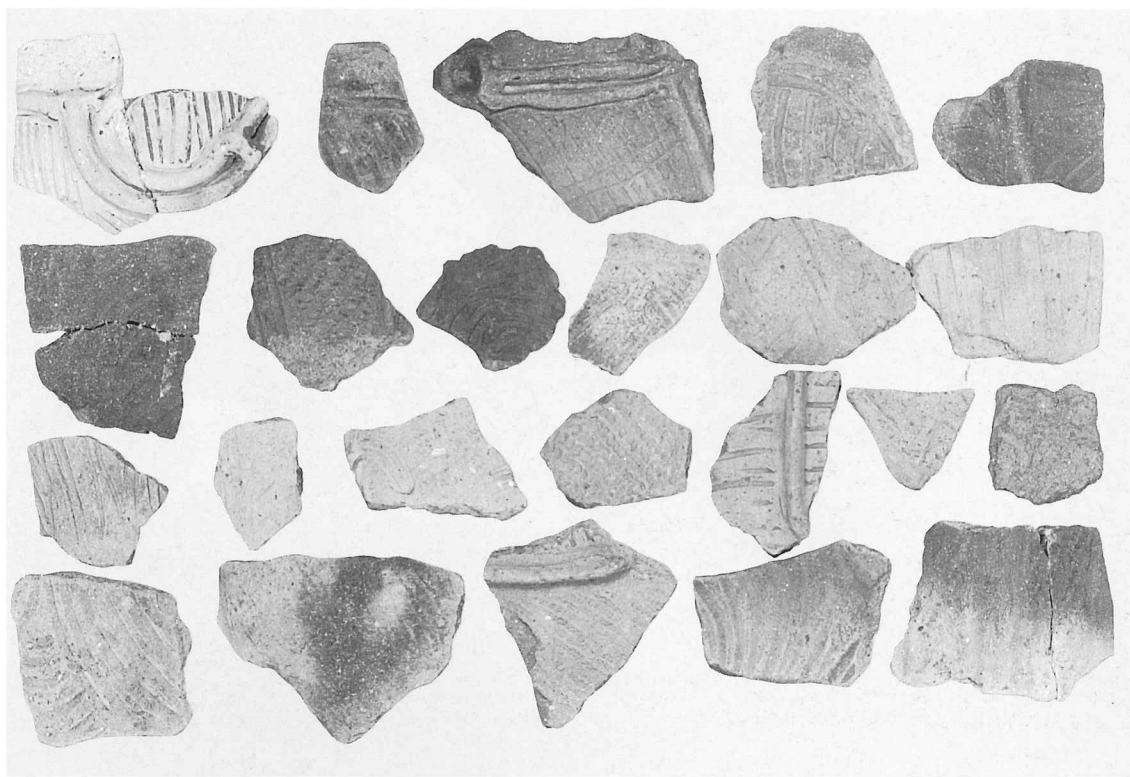


埋甕出土状態



埋甕





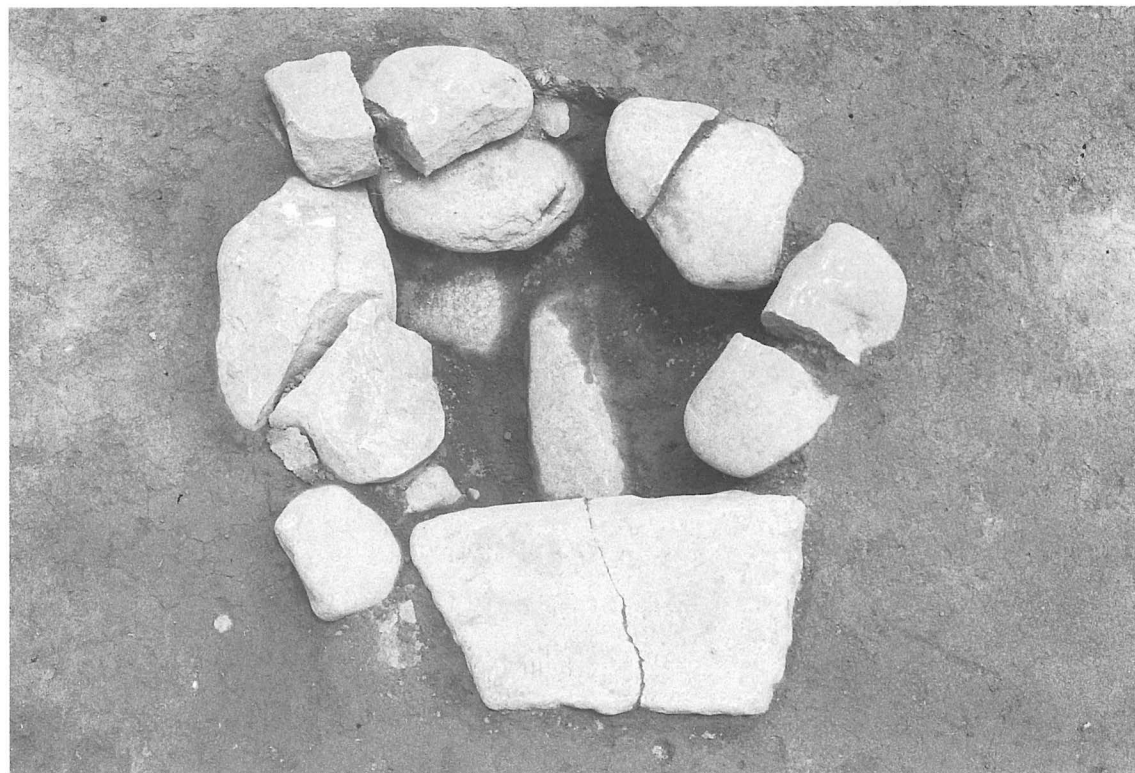


第37号住居址 (炉址)





第38号住居址



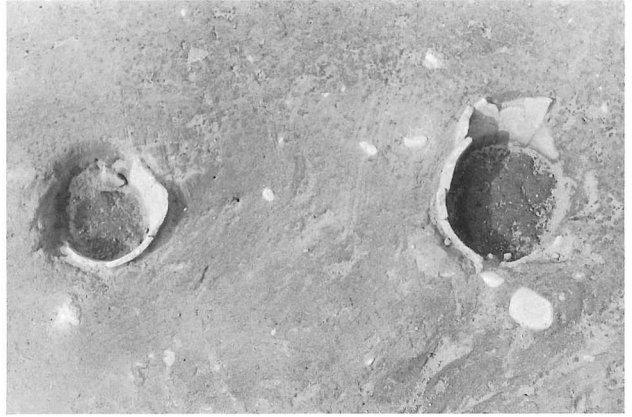
炉址



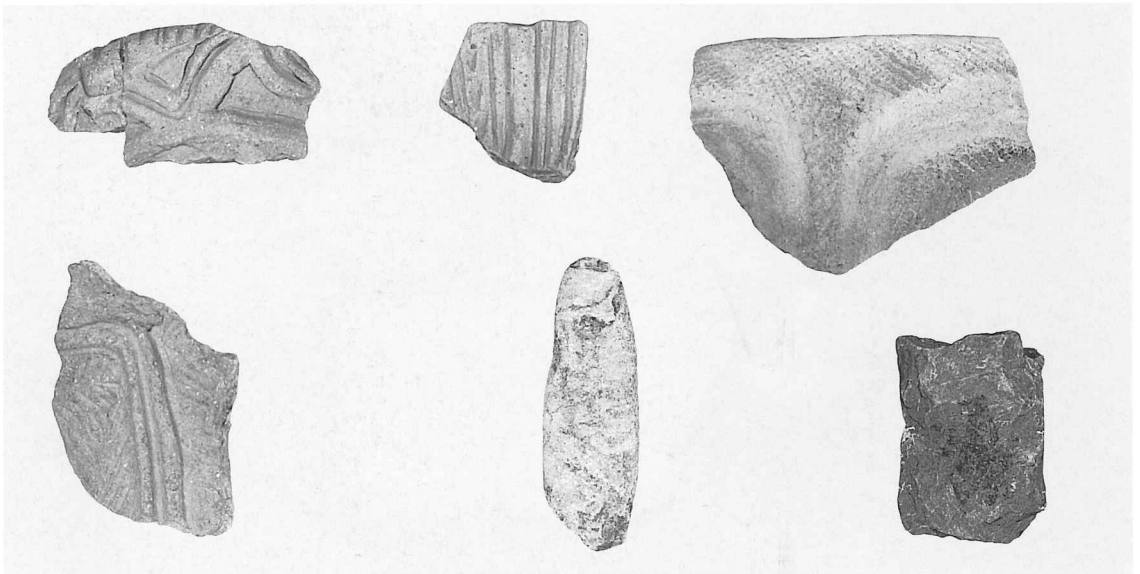
第39号住居址

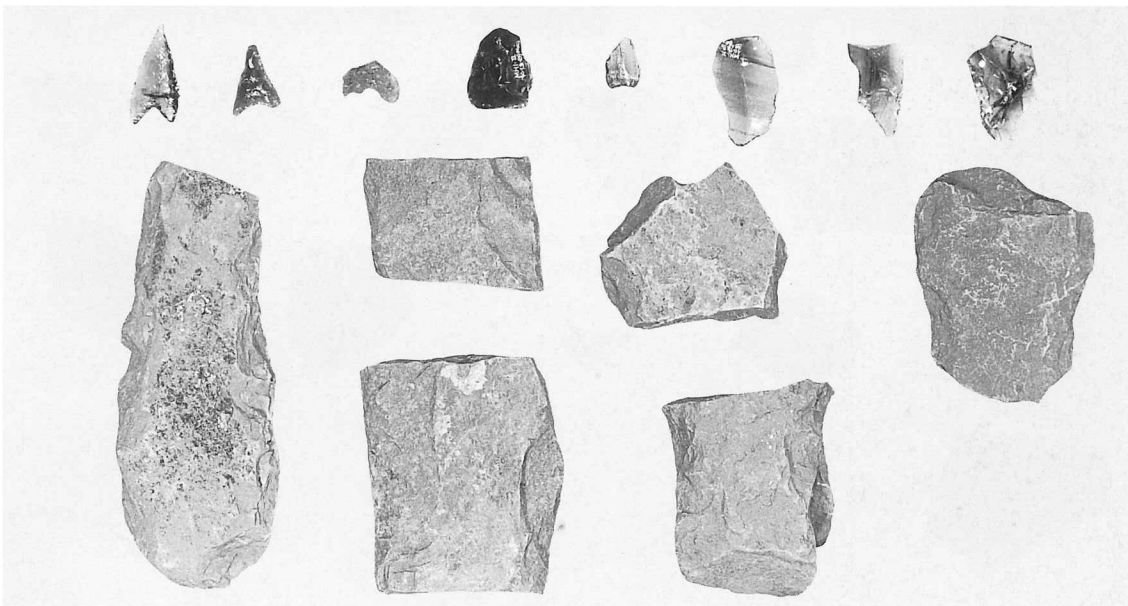
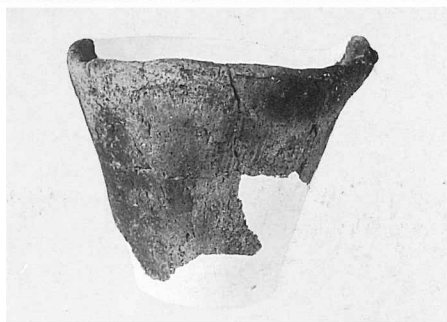
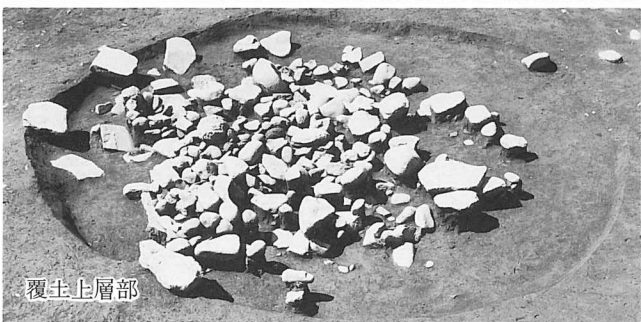


炉址

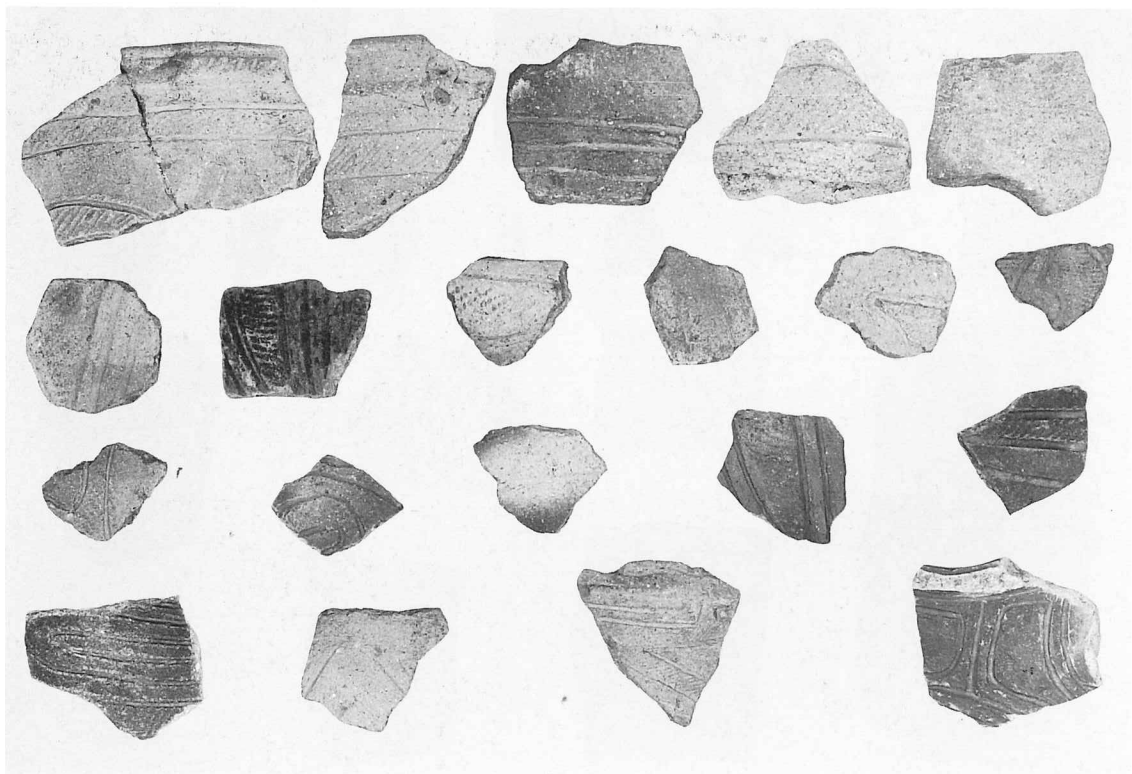
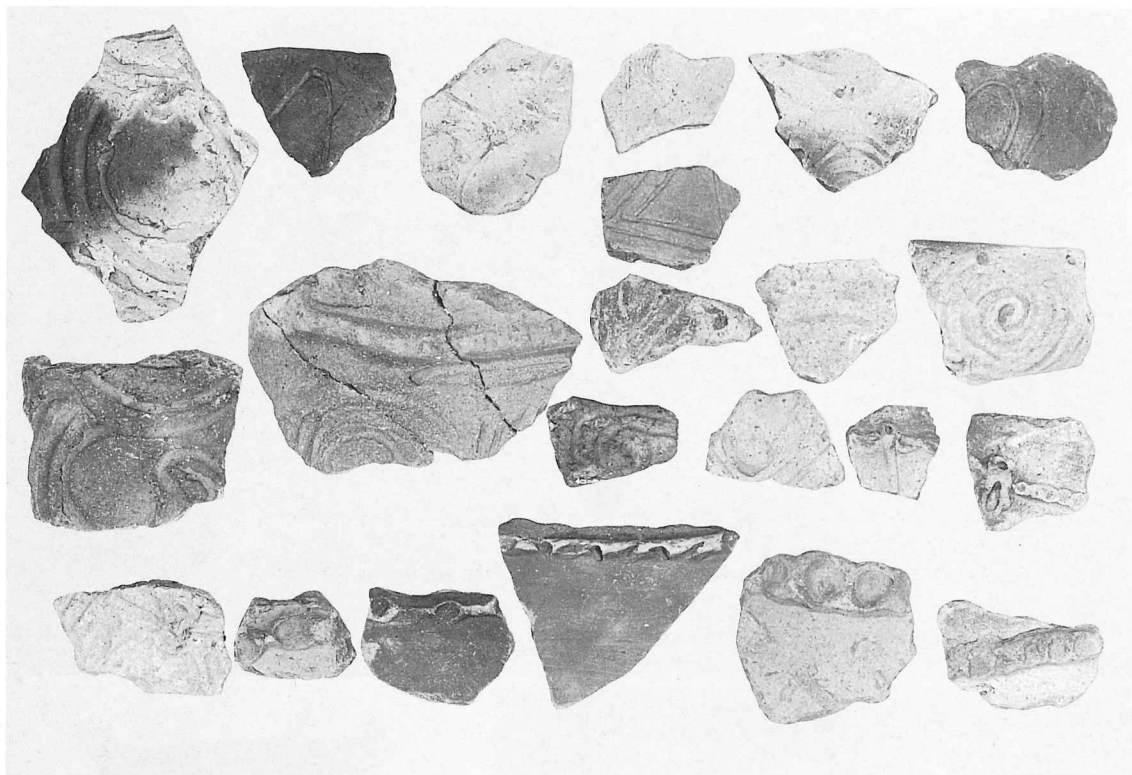


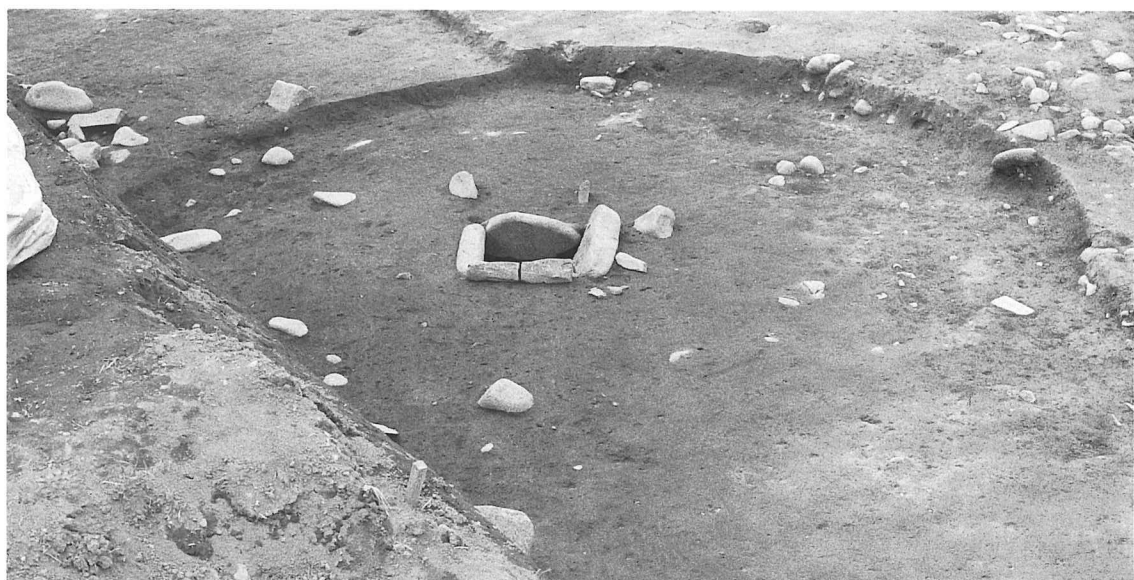
埋甕



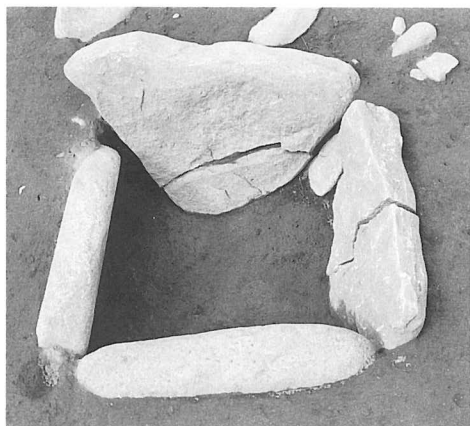


图版十八 第四十号住居址





第41号住居址



炉址

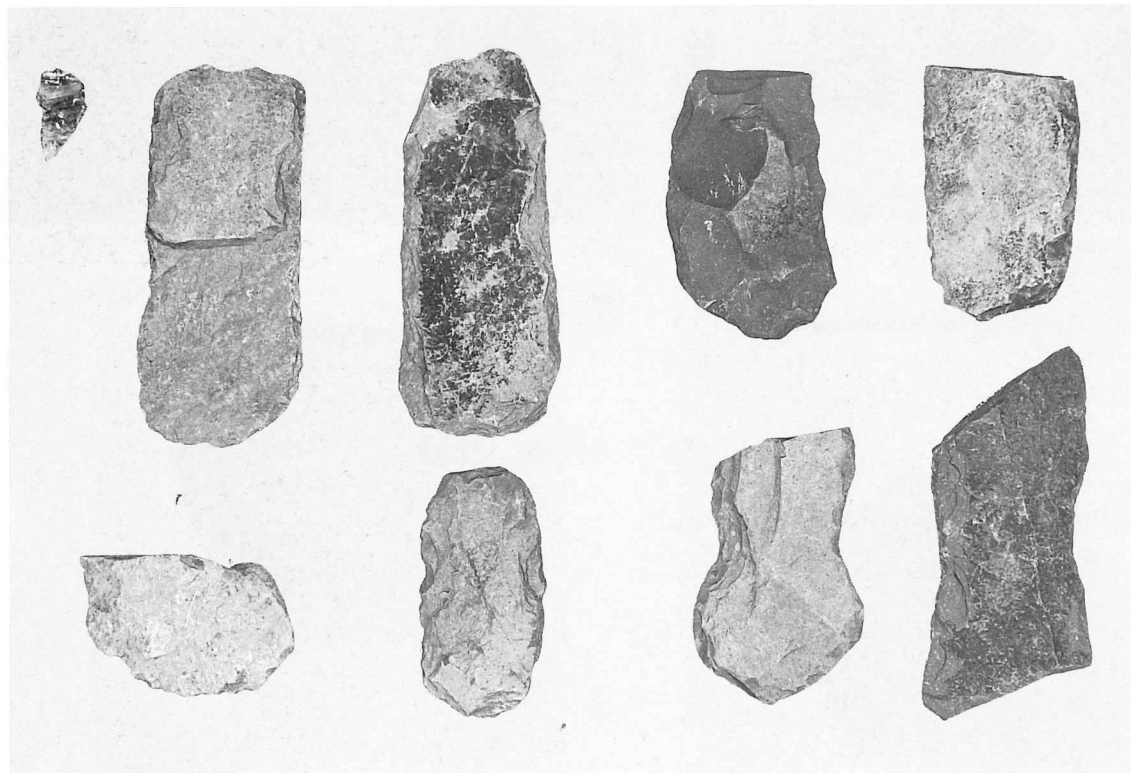
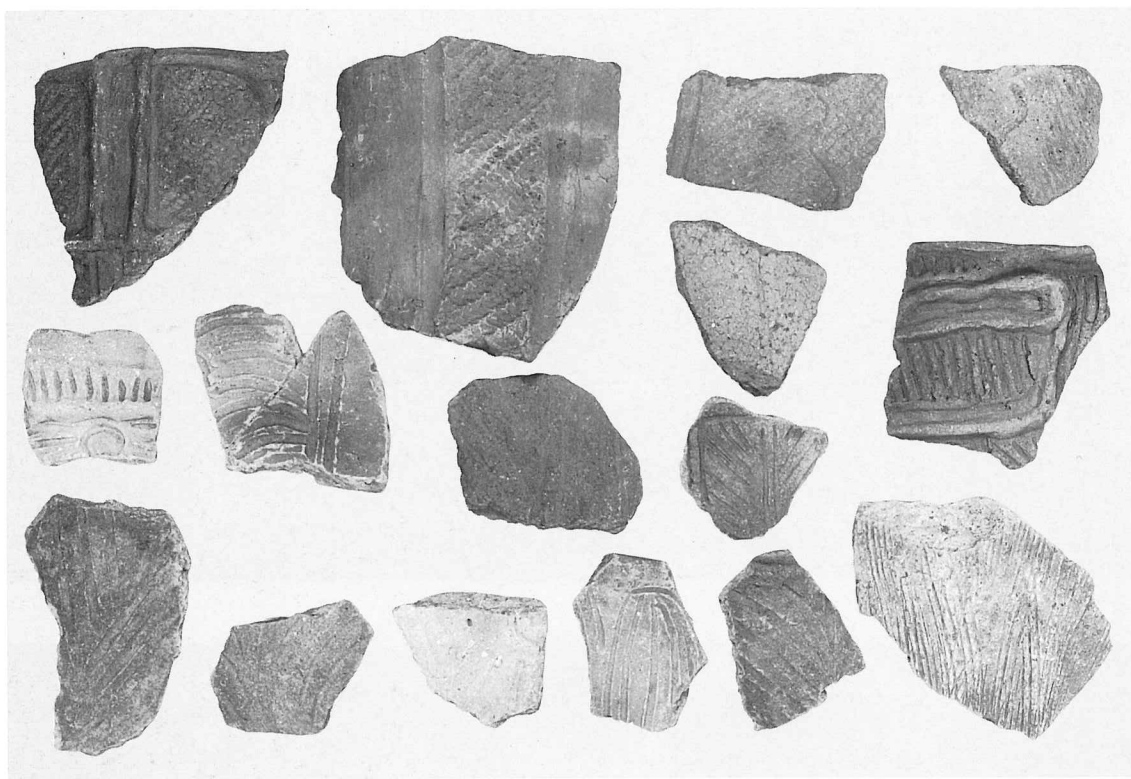


埋甕



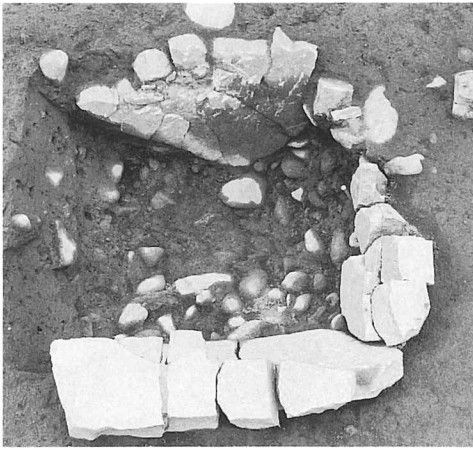
埋甕

图版二十 第四十一号住居址





第42号住居址

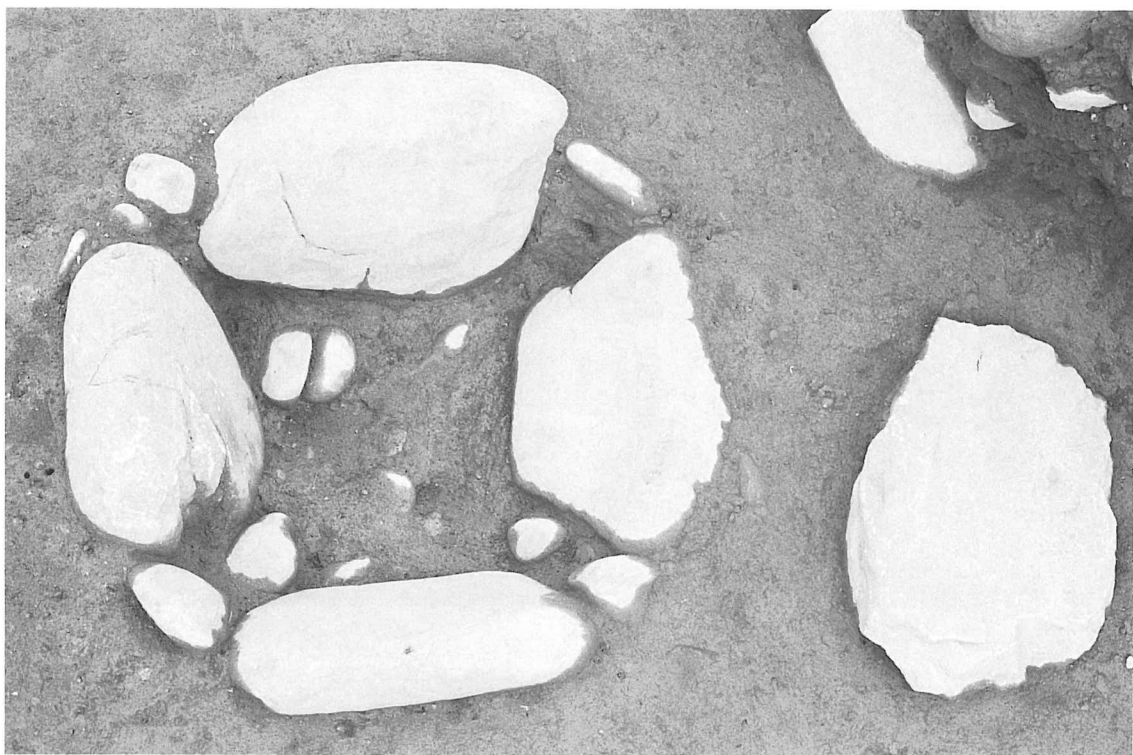


炉址

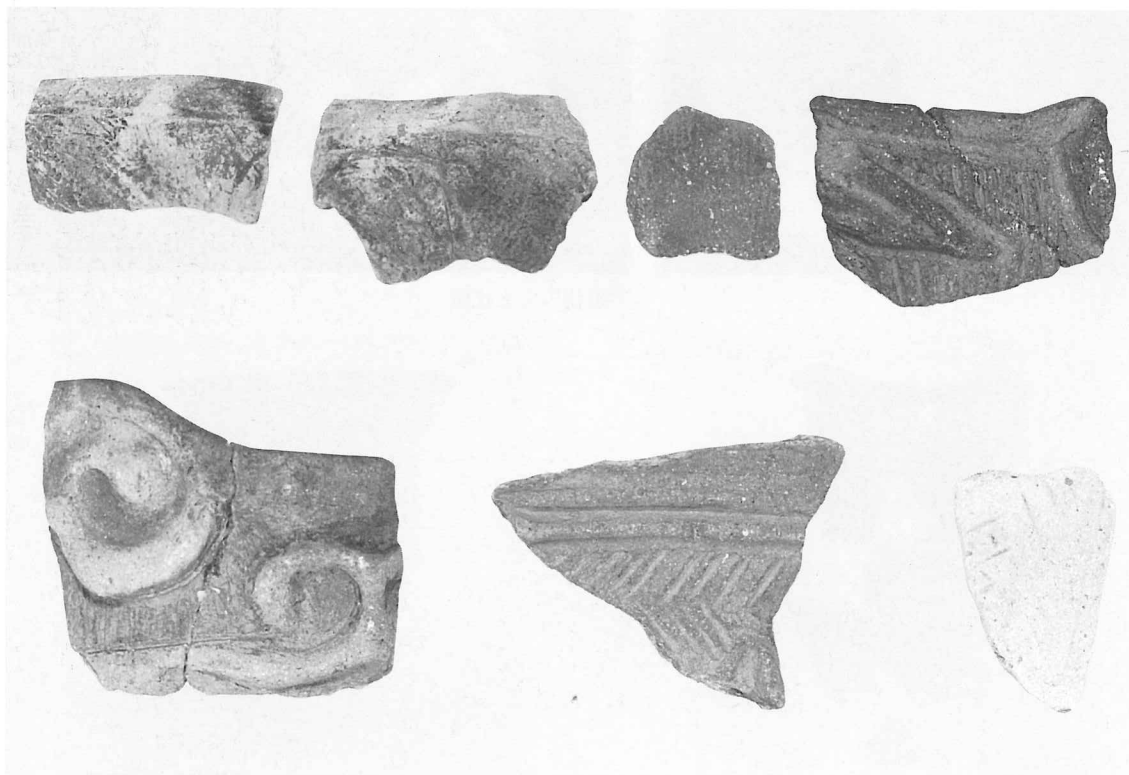


遺物の出土状態





第43号住居址

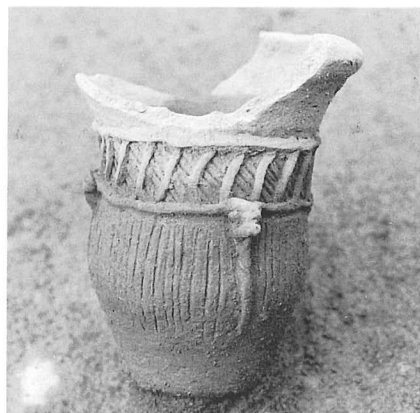




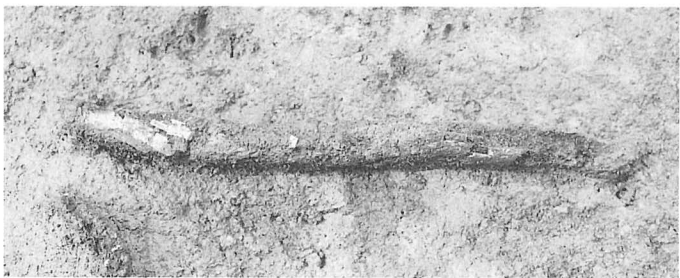
第44号住居址



炉址

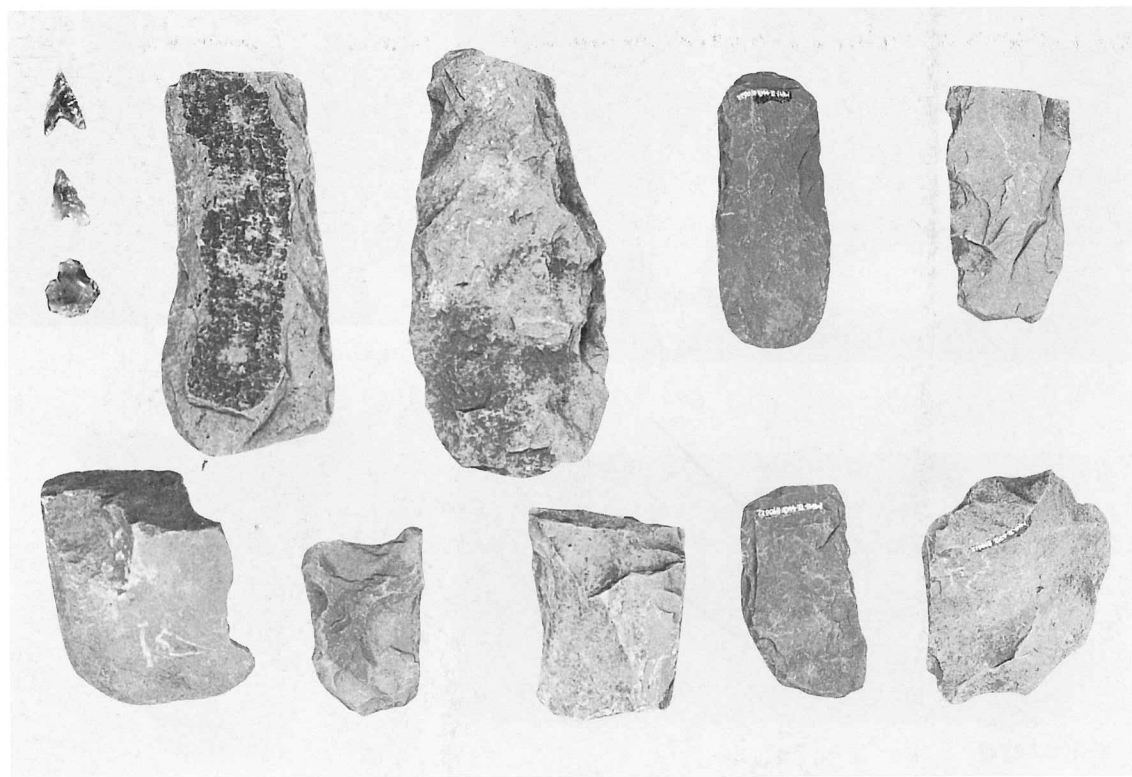
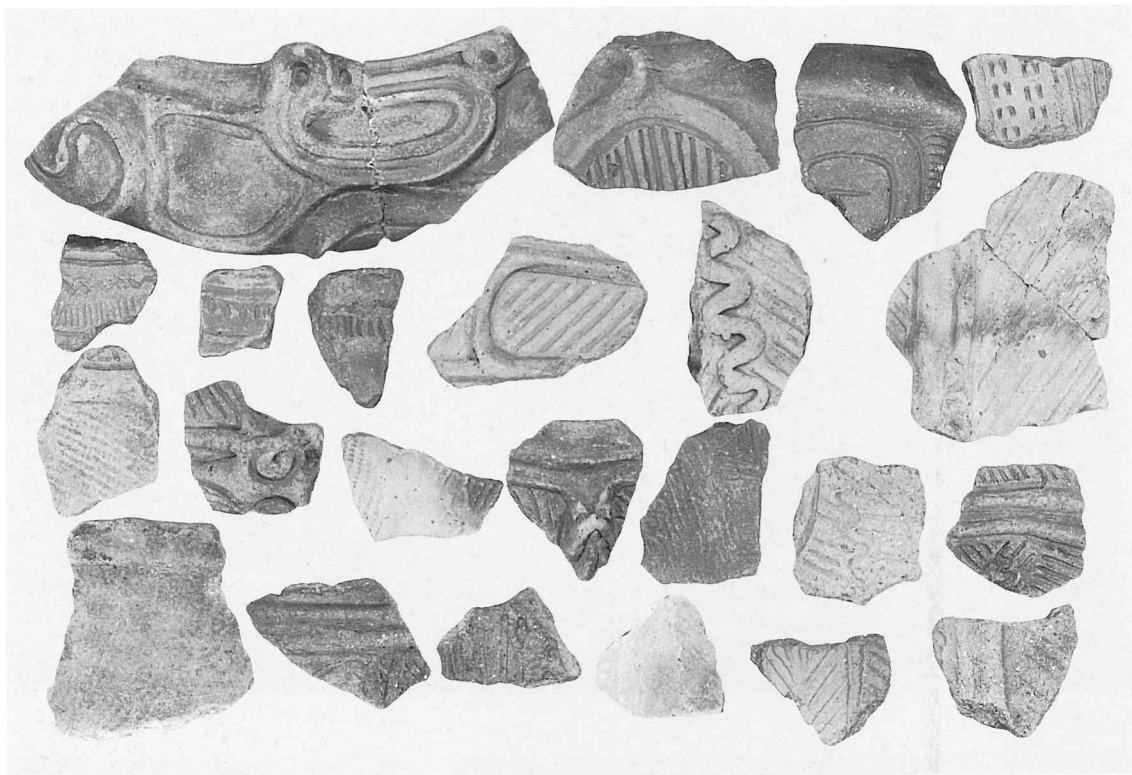


土器出土状態



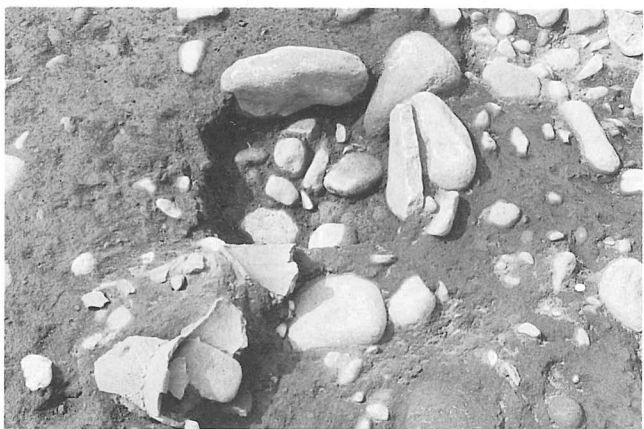
獣骨出土状態







第45号住居址

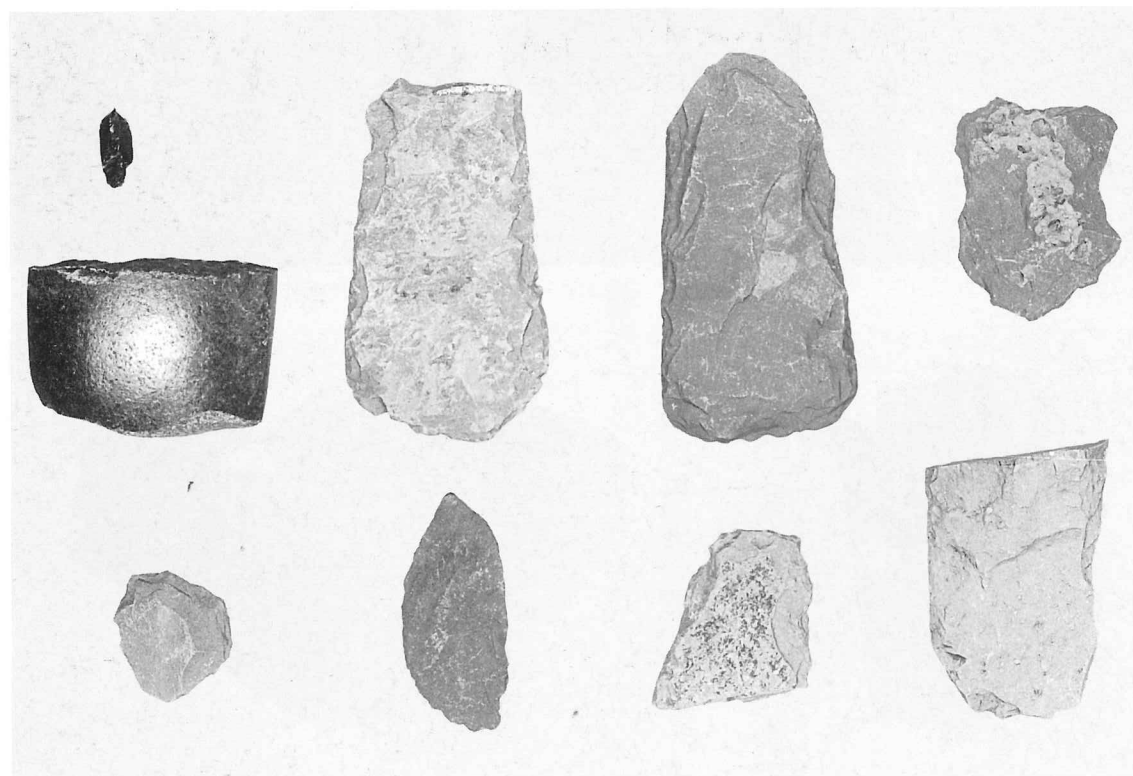
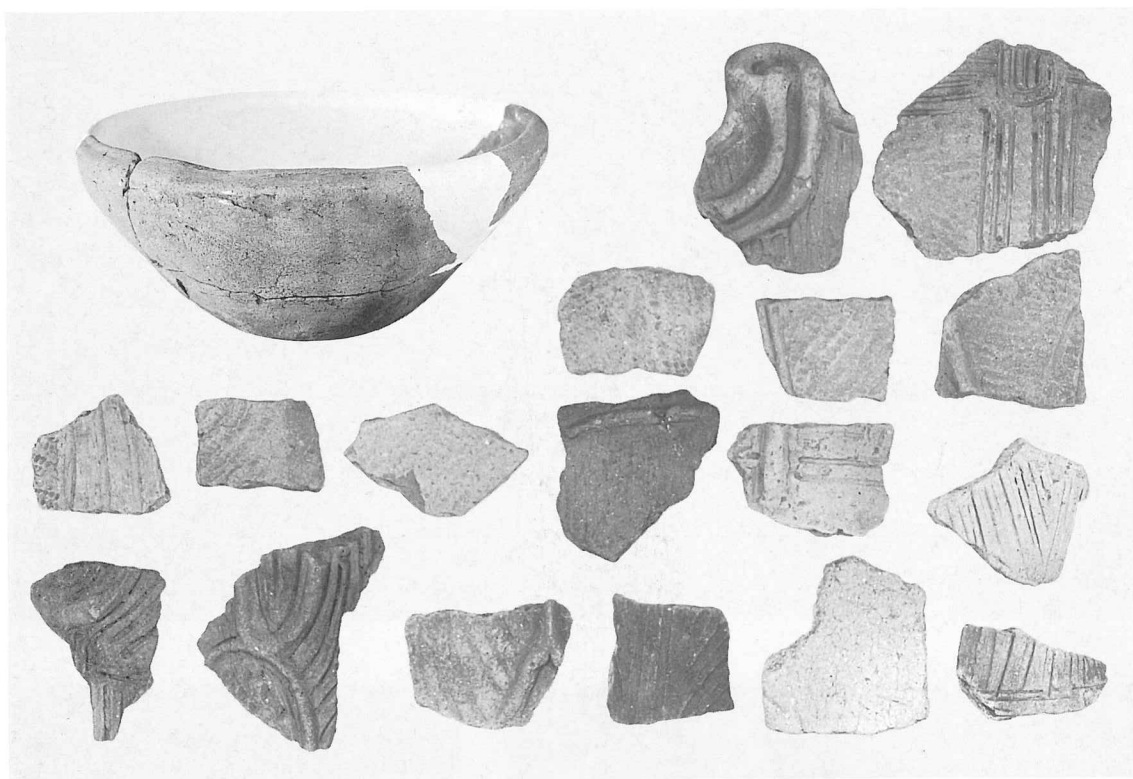


炉址



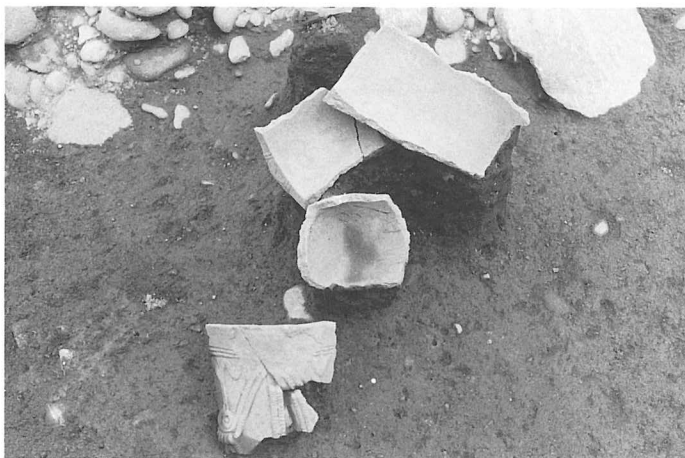
土器出土状态







第46号住居址



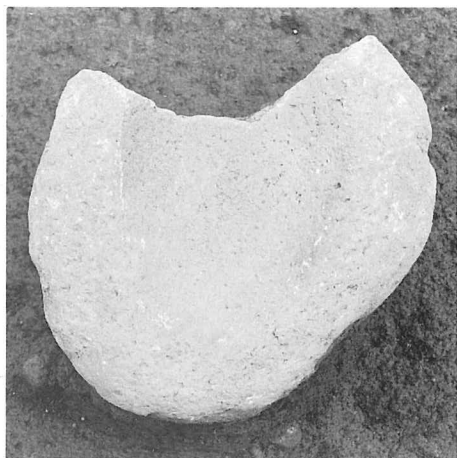
土器出土状态



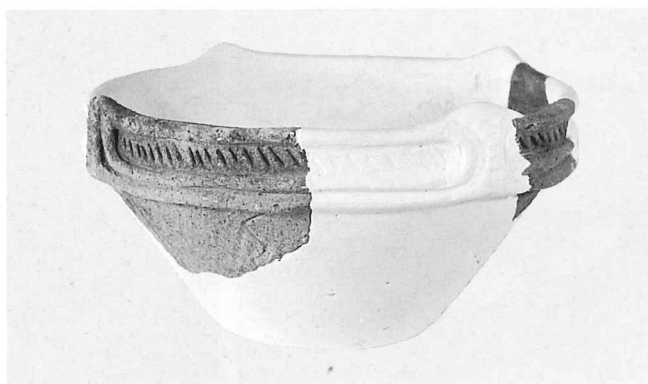
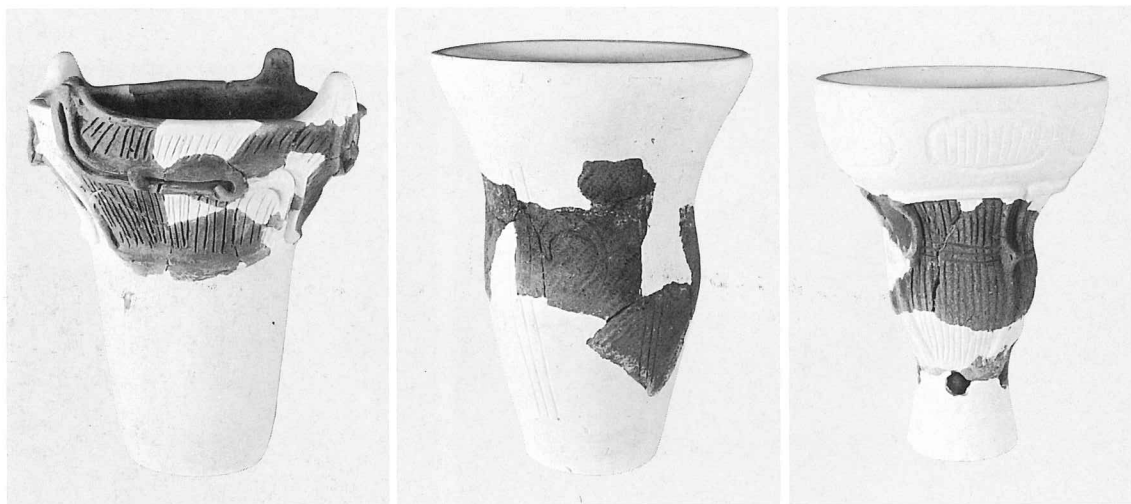
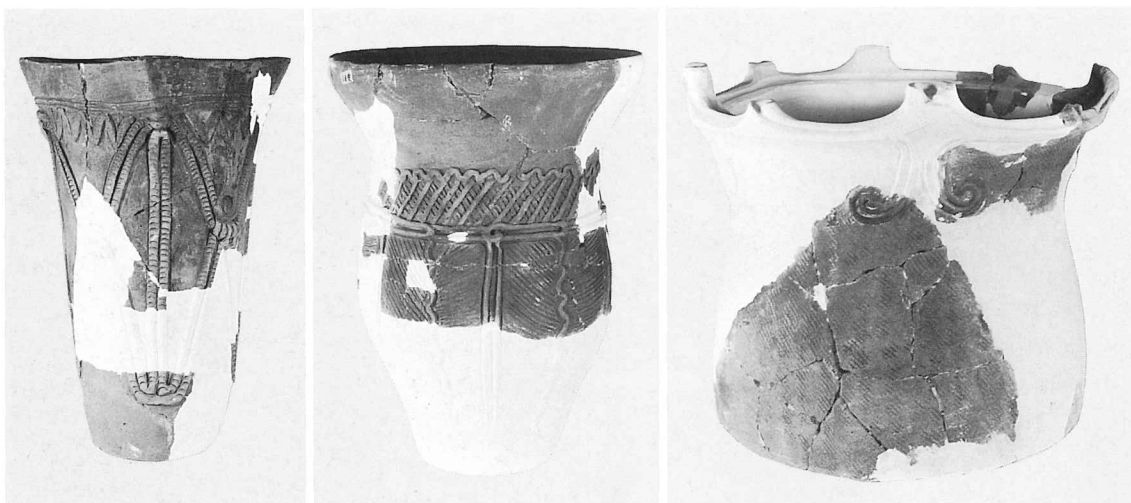
土器出土状态

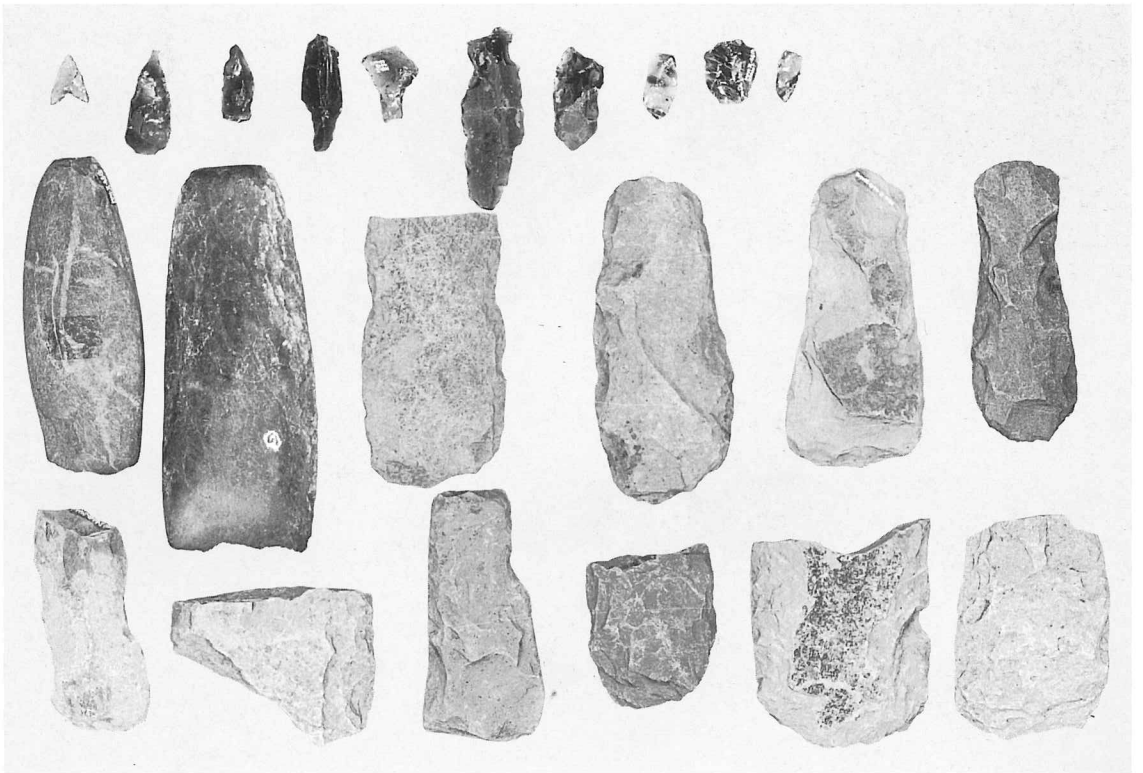
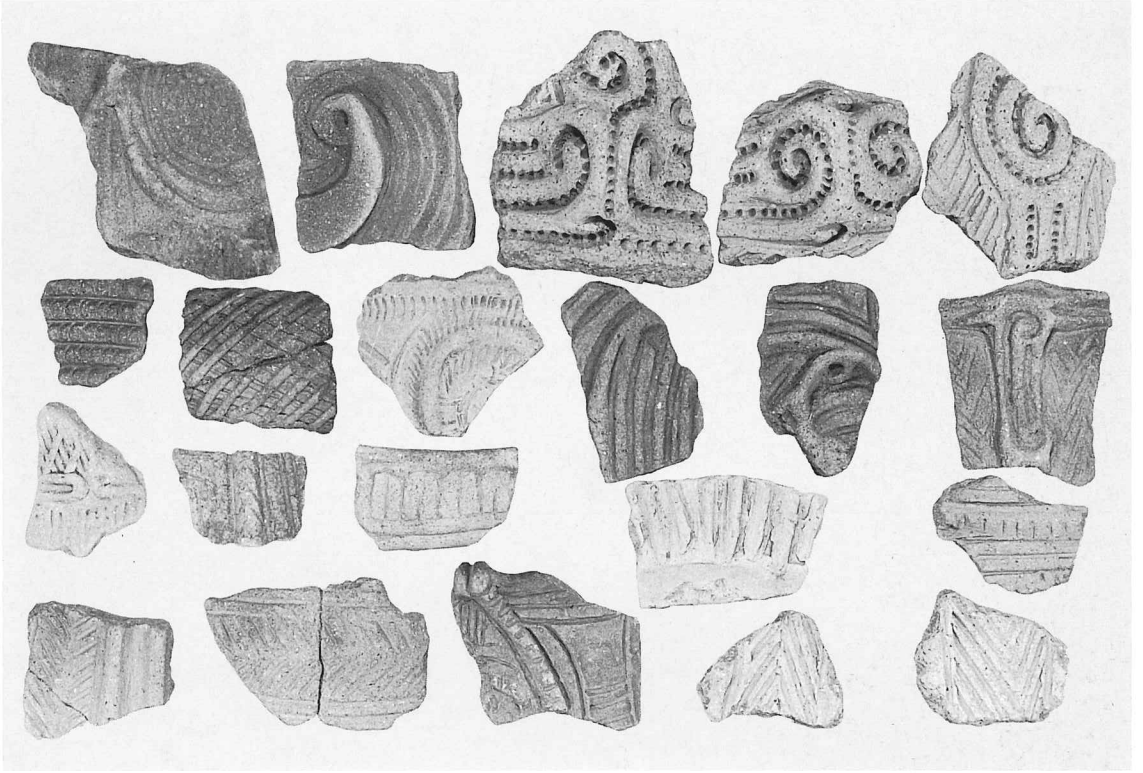


土器出土状态



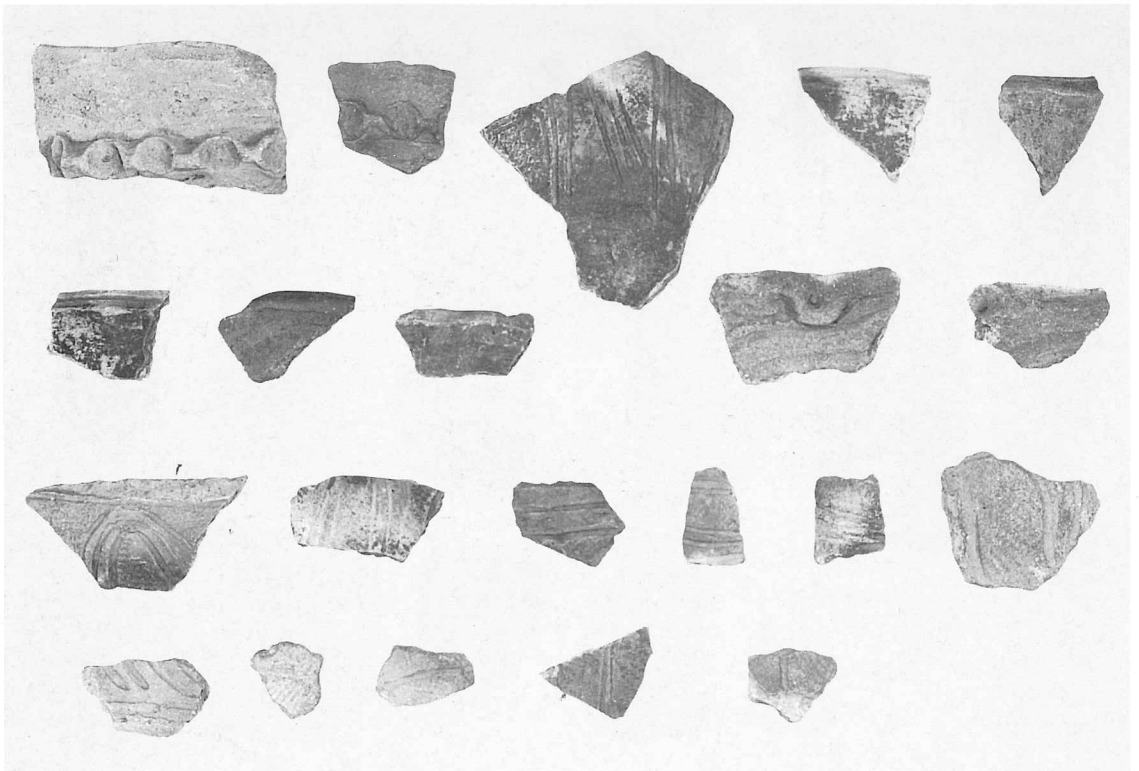
石器出土状态 (石皿)





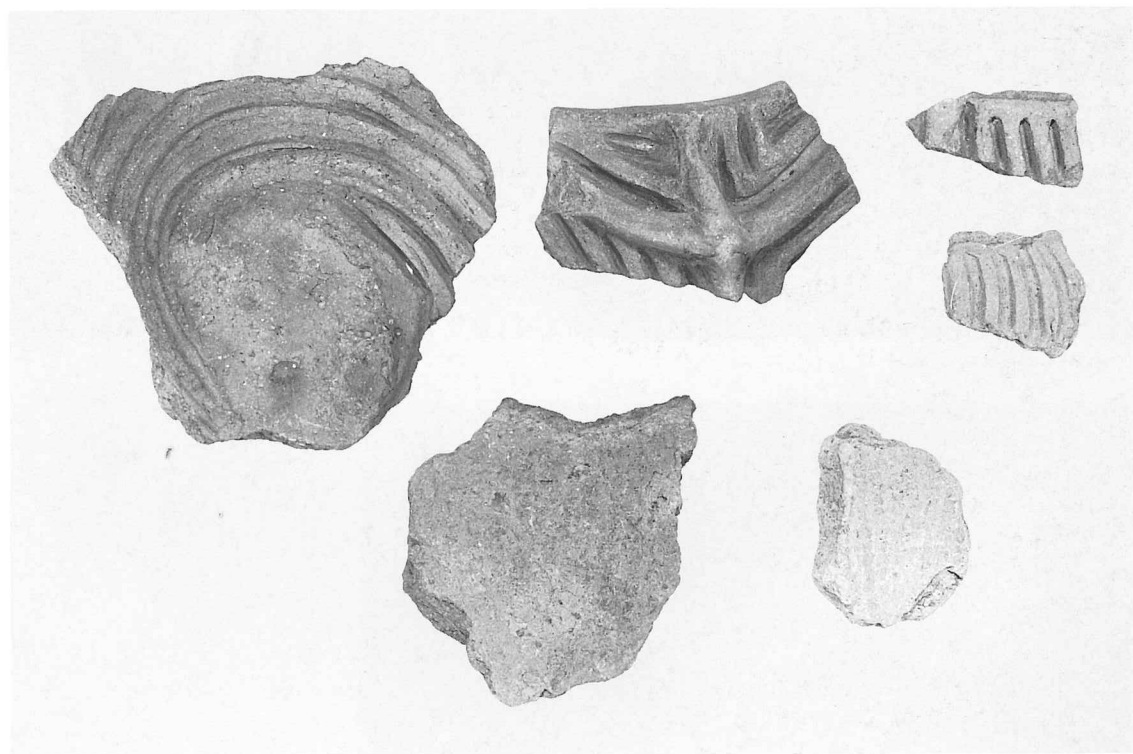


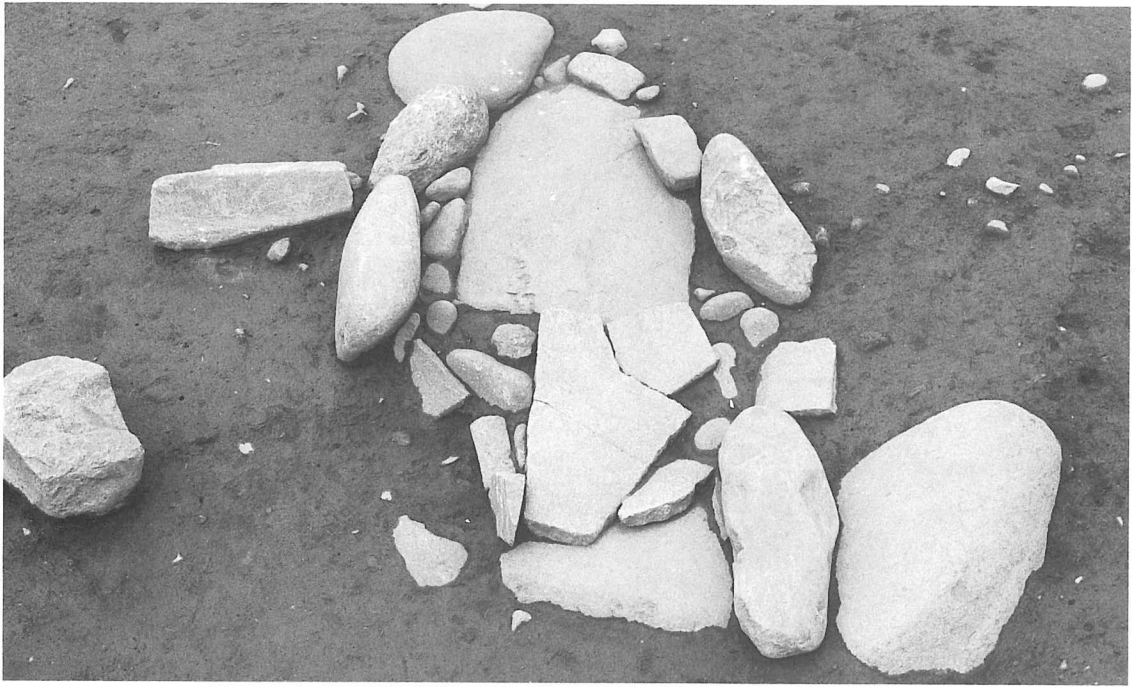
第47号住居址





第48号住居址





第49号柄鏡形敷石住居址 (張出部)



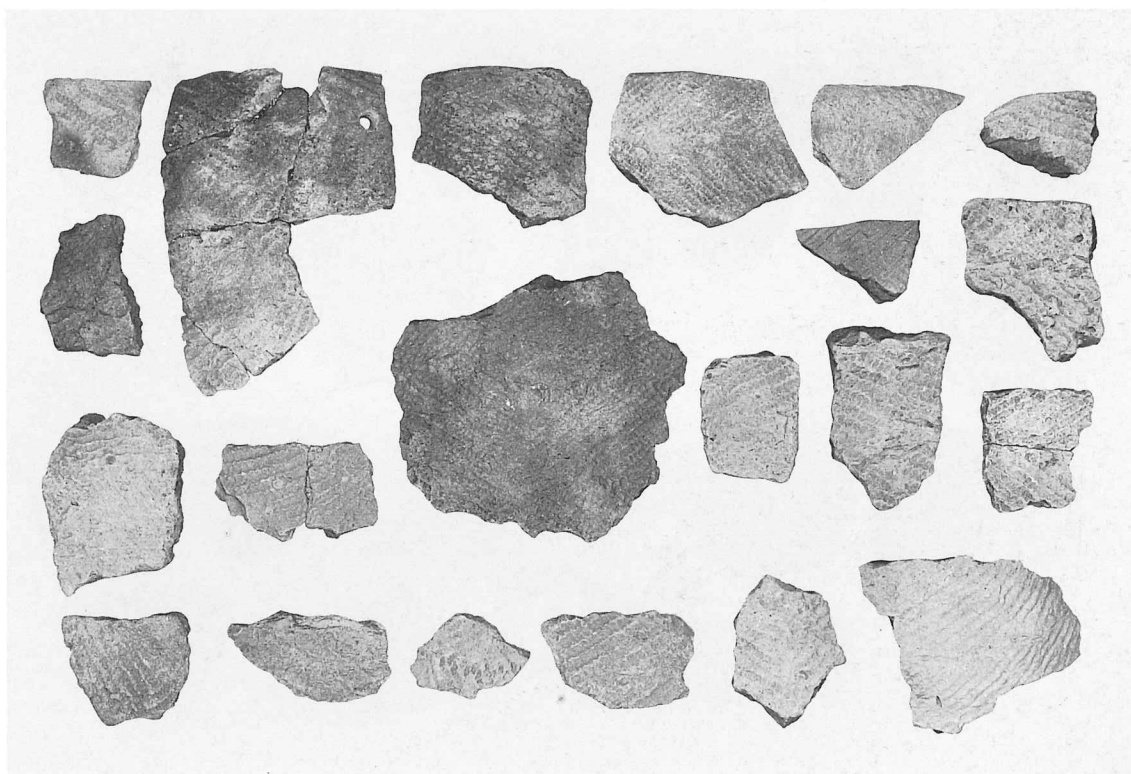
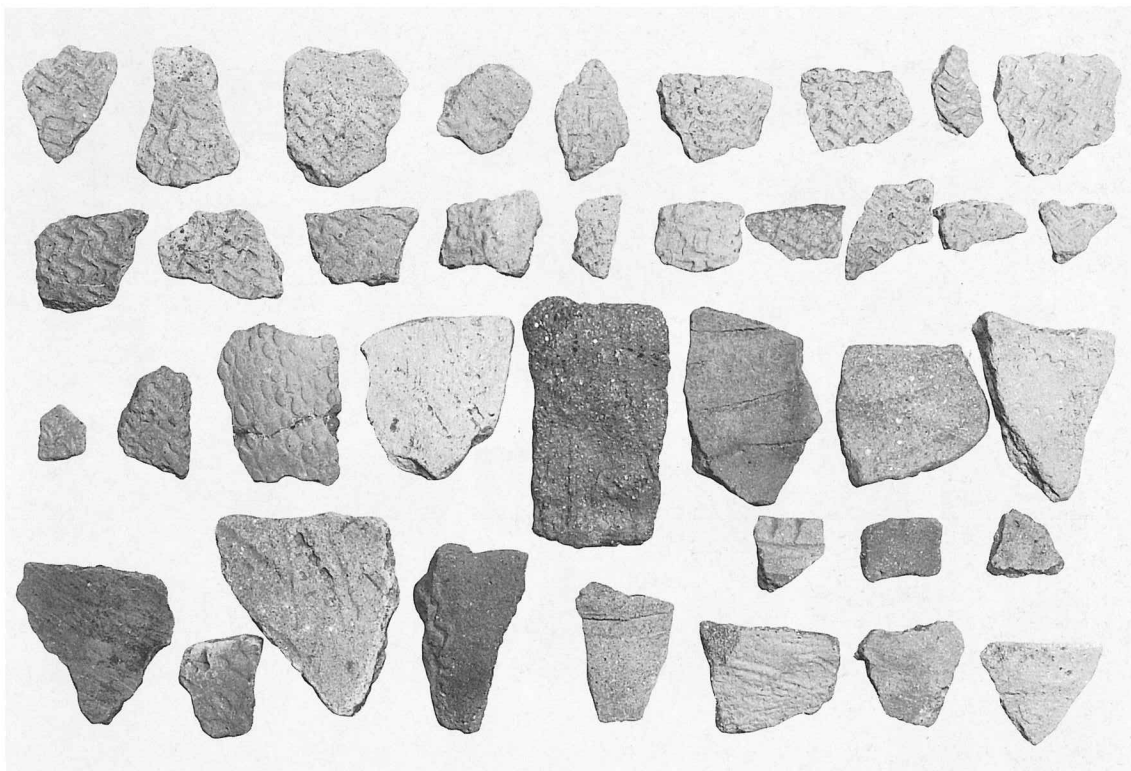
炉址内土器出土状態



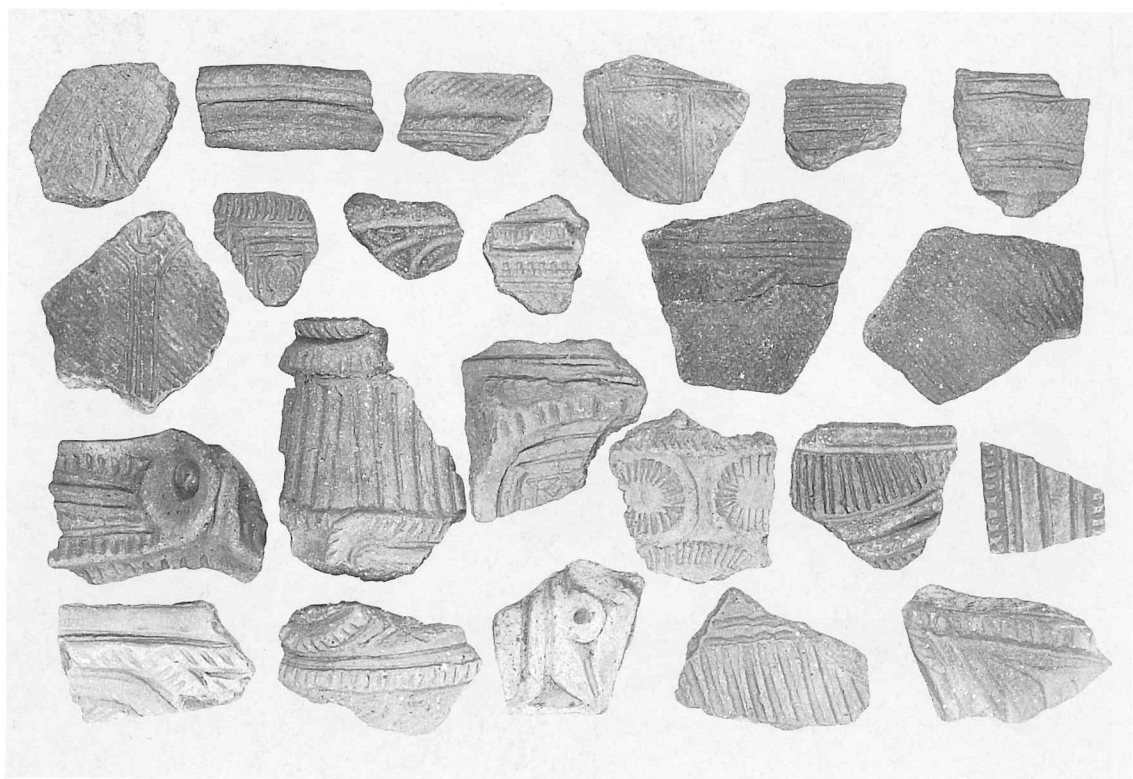
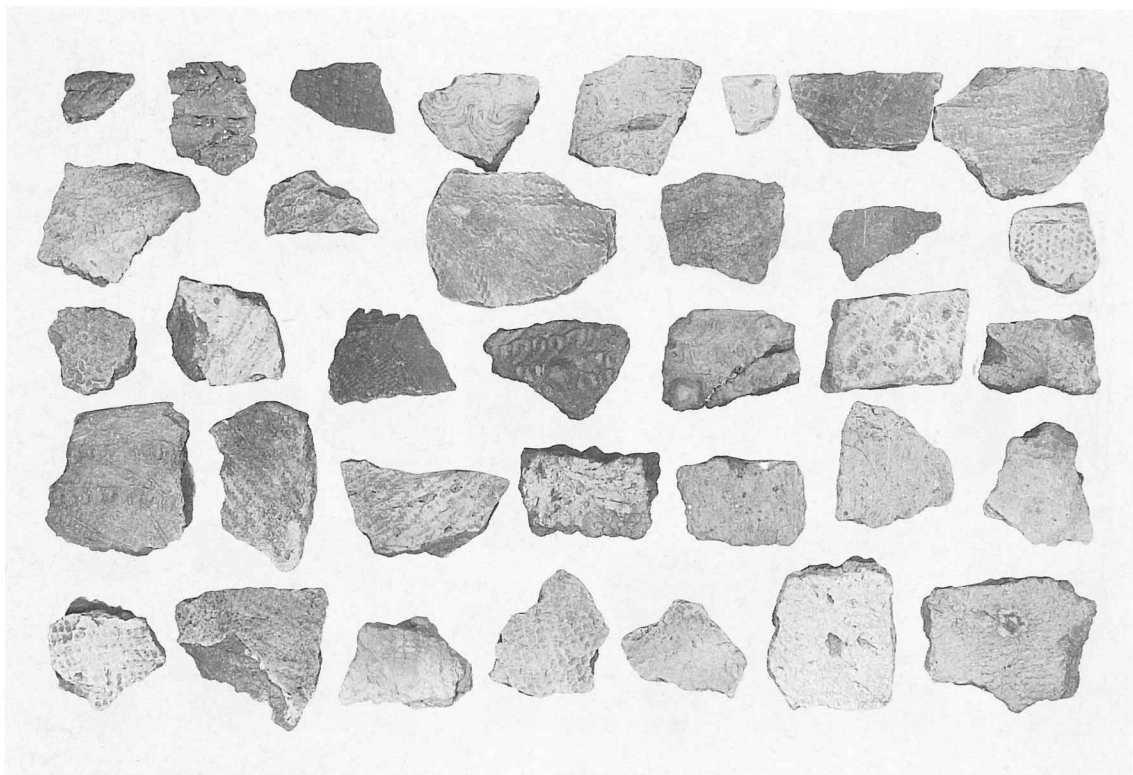
炉胎土器

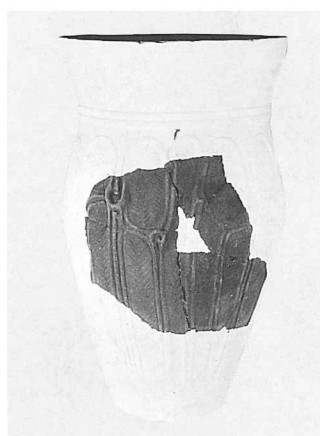
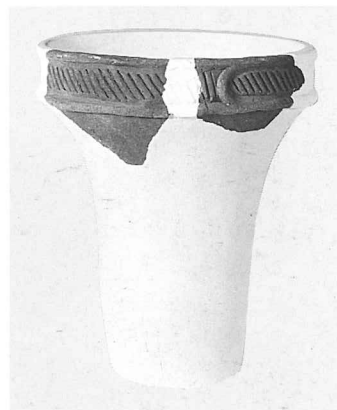
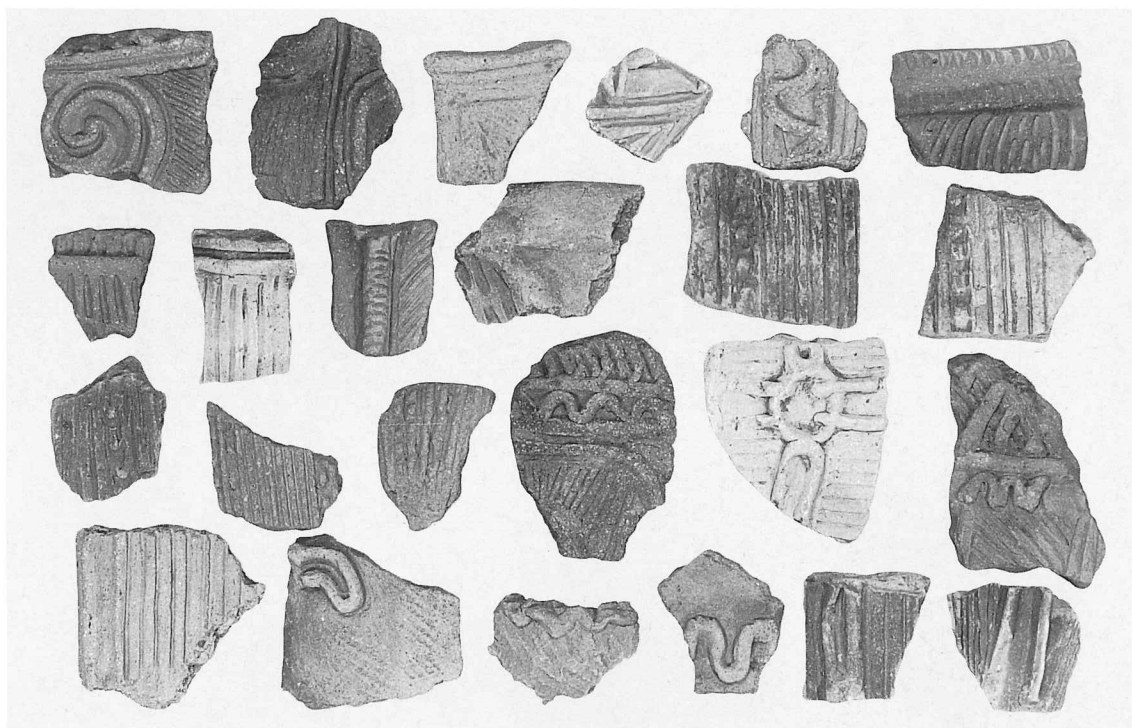


同上

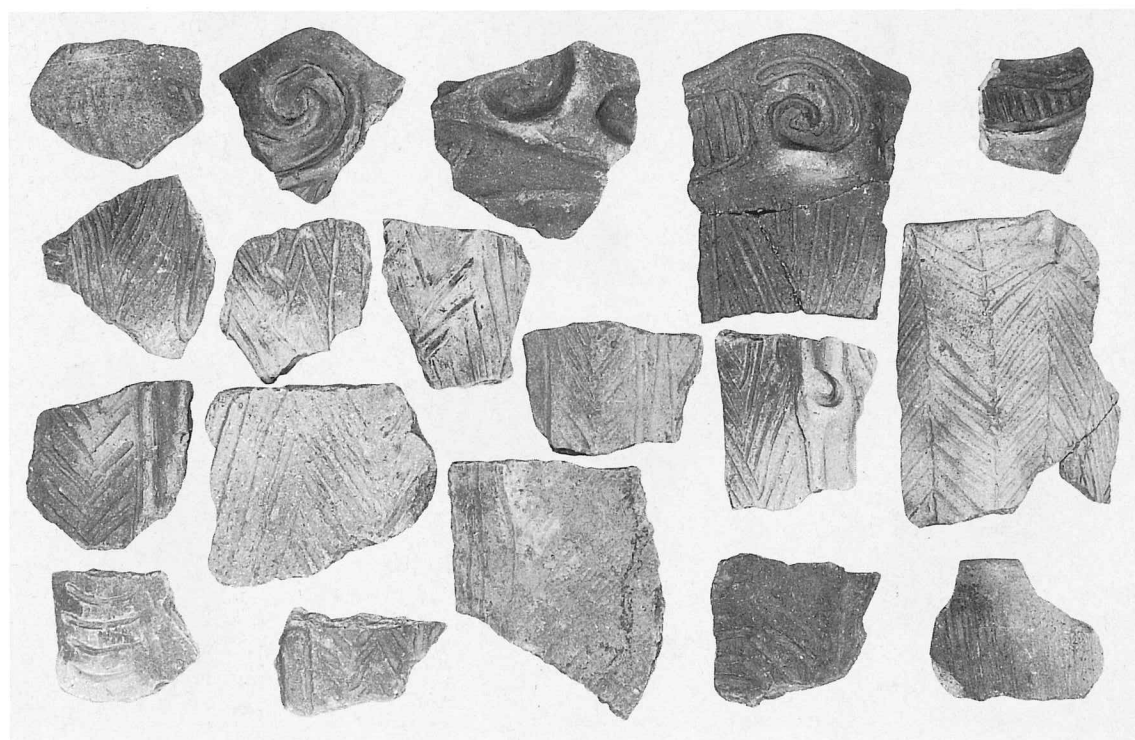
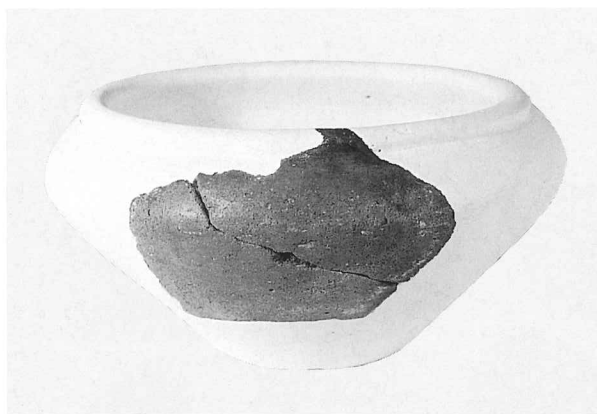


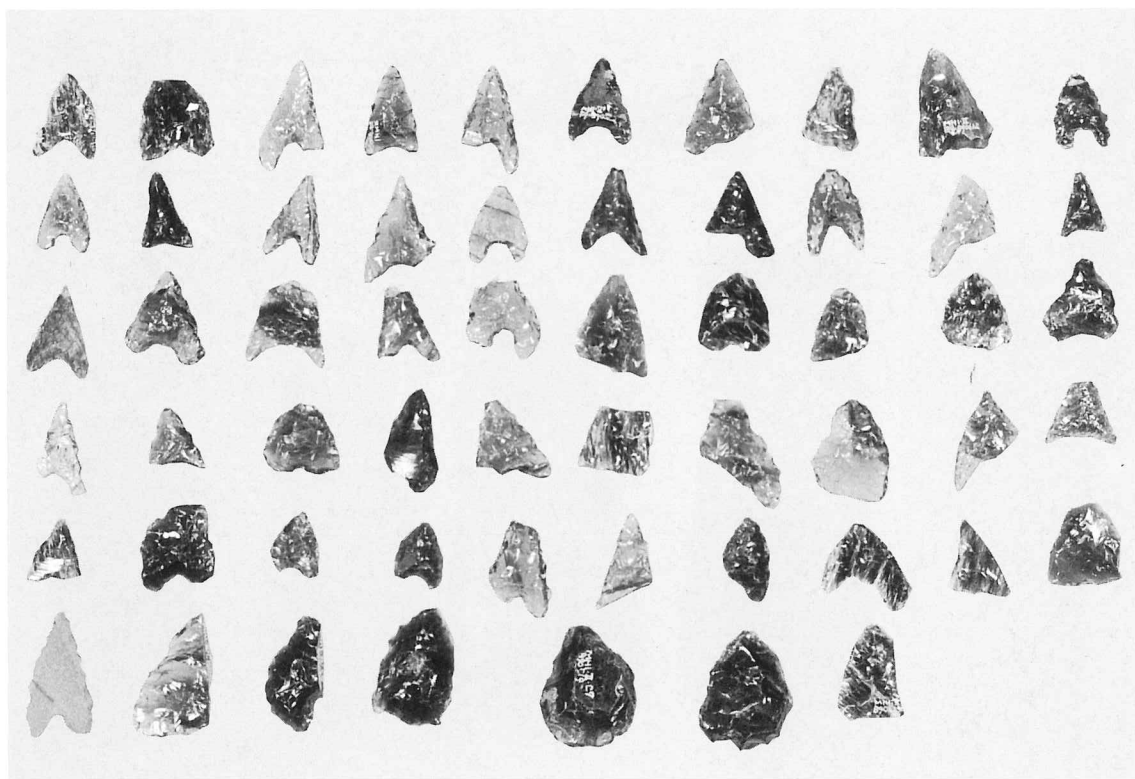
図版三十四 遺構外出土遺物



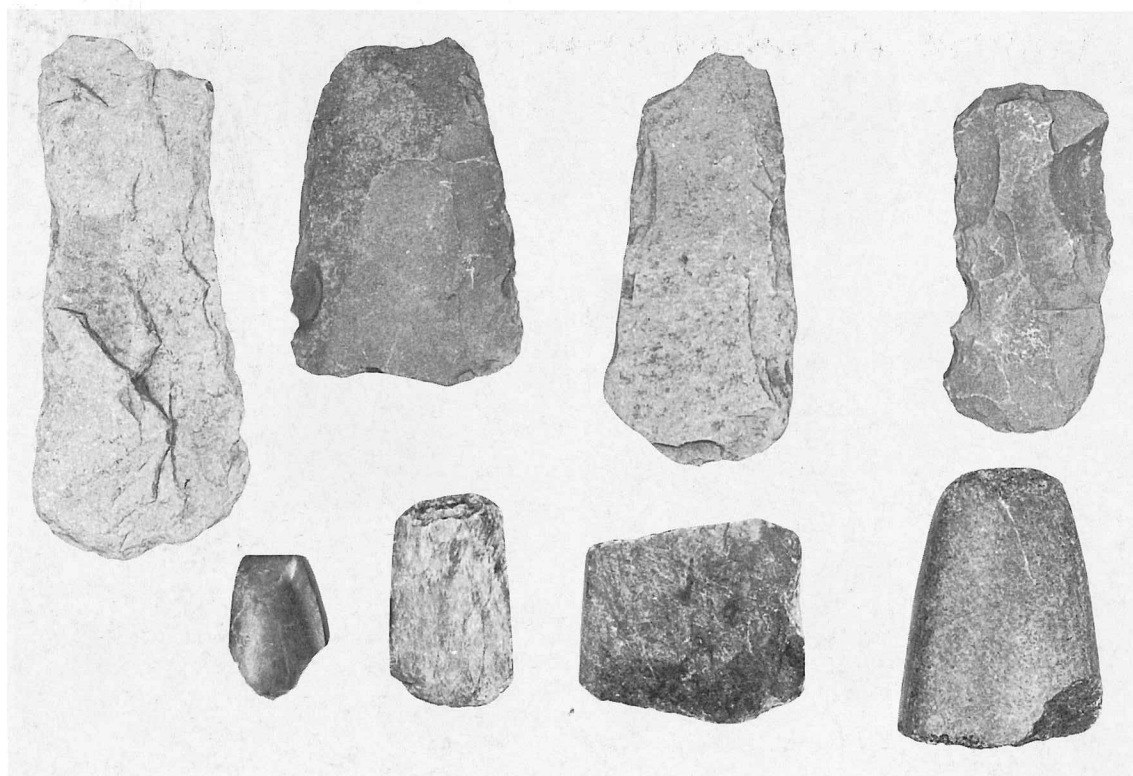
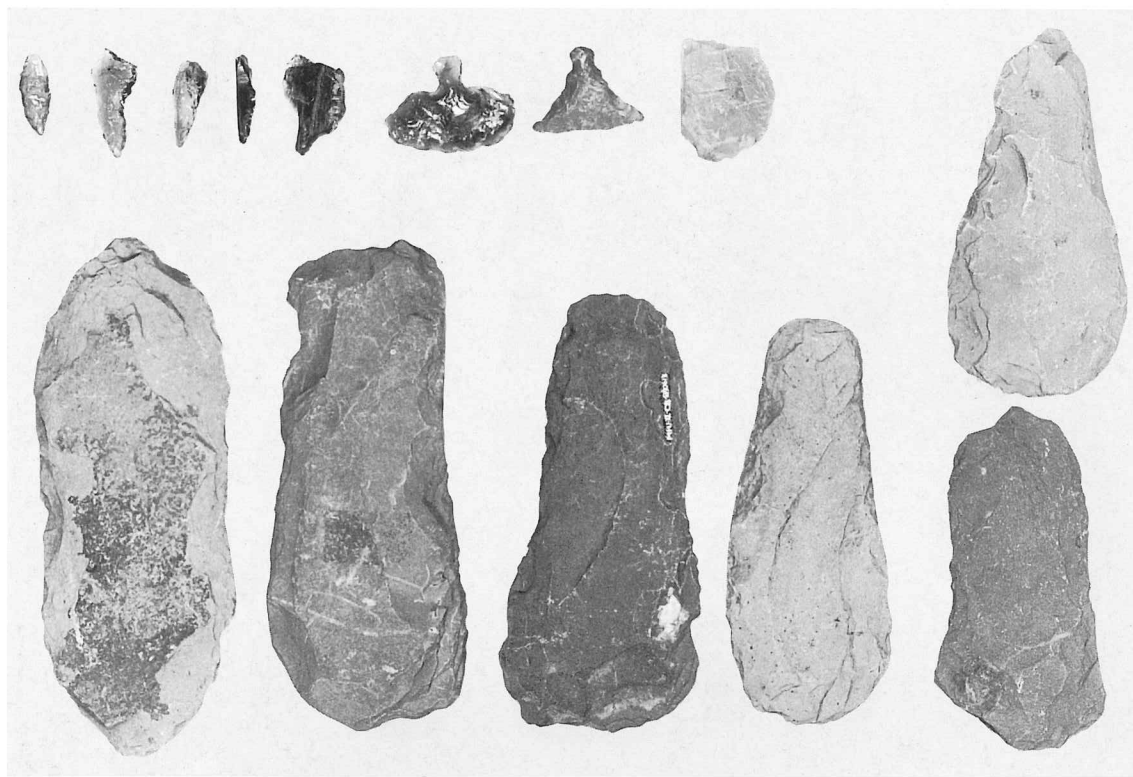


図版三十六 遺構外出土遺物





図版三十八 遺構外出土遺物





地主主催による神事



竹花助役



田中教育長



地主上野一雄氏



調査風景



調査風景

- 望月町文化財調査報告書 第1集 『下吹上遺跡』(昭和53年度)
第2集 『犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書』(昭和53年度)
第3集 『犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(昭和53年度)
第4集 『又久保』(昭和55年度)
第5集 『望月町遺跡詳細分布調査報告書』(昭和55年度)
第6集 『尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳』(昭和55年度)
第7集 『新水』(昭和55年度)
第8集 『金塚遺跡』(昭和56年度)
第9集 『真光寺第1号古墳』(昭和57年度)
第10集 『春日尾崎遺跡』(昭和57年度)
第11集 『後沖遺跡』(昭和57年度)
第12集 『栃久保A遺跡』(昭和57年度)
第13集 『竹之城原遺跡 浄永坊遺跡 浦谷B遺跡』(昭和58年度)
第14集 『胡桃沢 瓜生坂A 宮久保A 布施山寺A 岩井遺跡』(昭和58年度)
第15集 『望月城跡』(昭和59年度)
第16集 『岩清水遺跡』(昭和60年度)
第17集 『平石遺跡』(昭和63年度)
第18集 『上吹遺跡』(平成元年度)
第19集 『平石遺跡第2次』(平成2年度)

望月町文化財調査報告書 第19集

平 石 遺 跡 (第2次)

——緊急発掘調査報告書——

発行日 1991年3月31日

編集者 望月町教育委員会

発行者 望 月 町

望月町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
